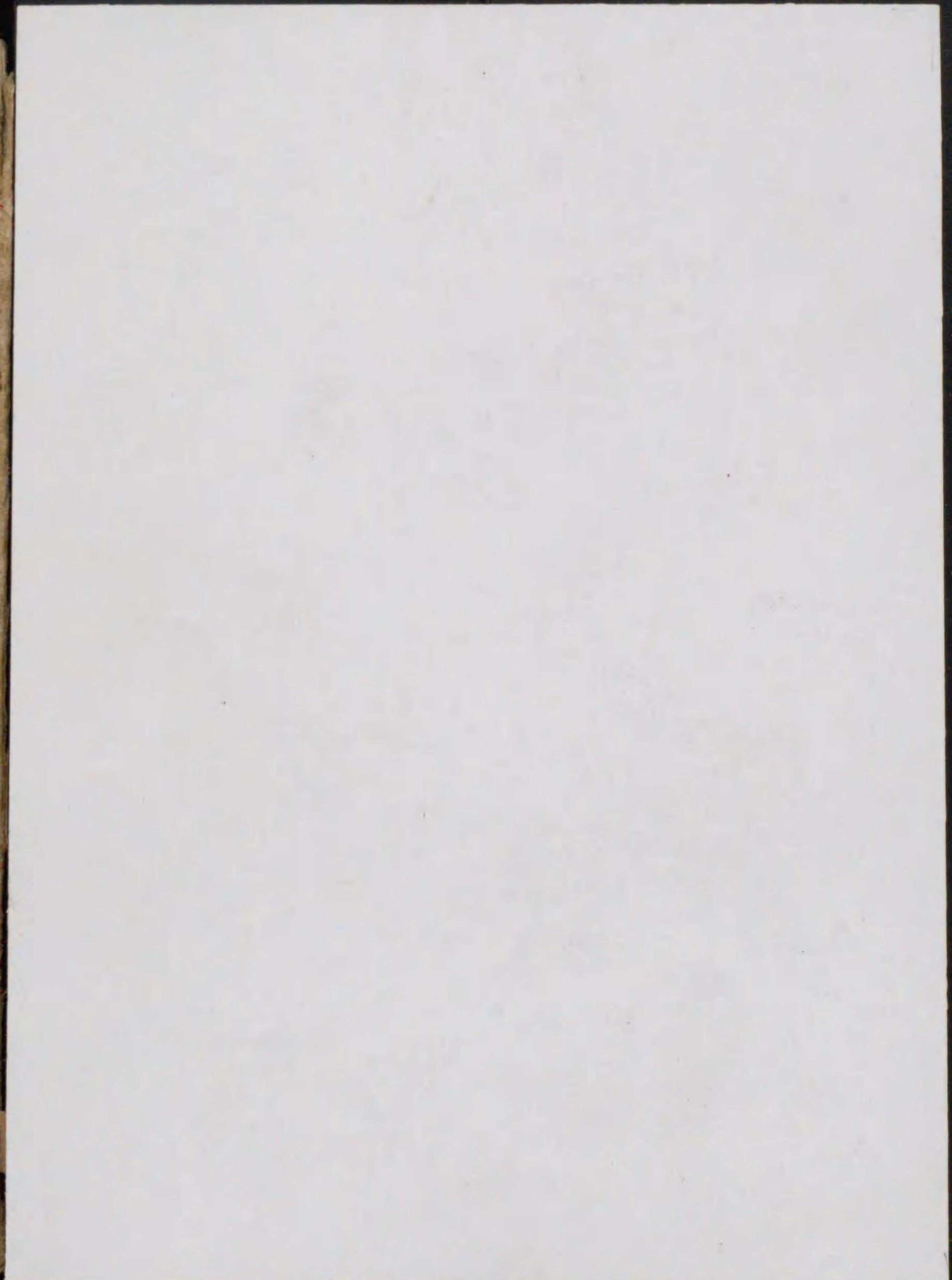
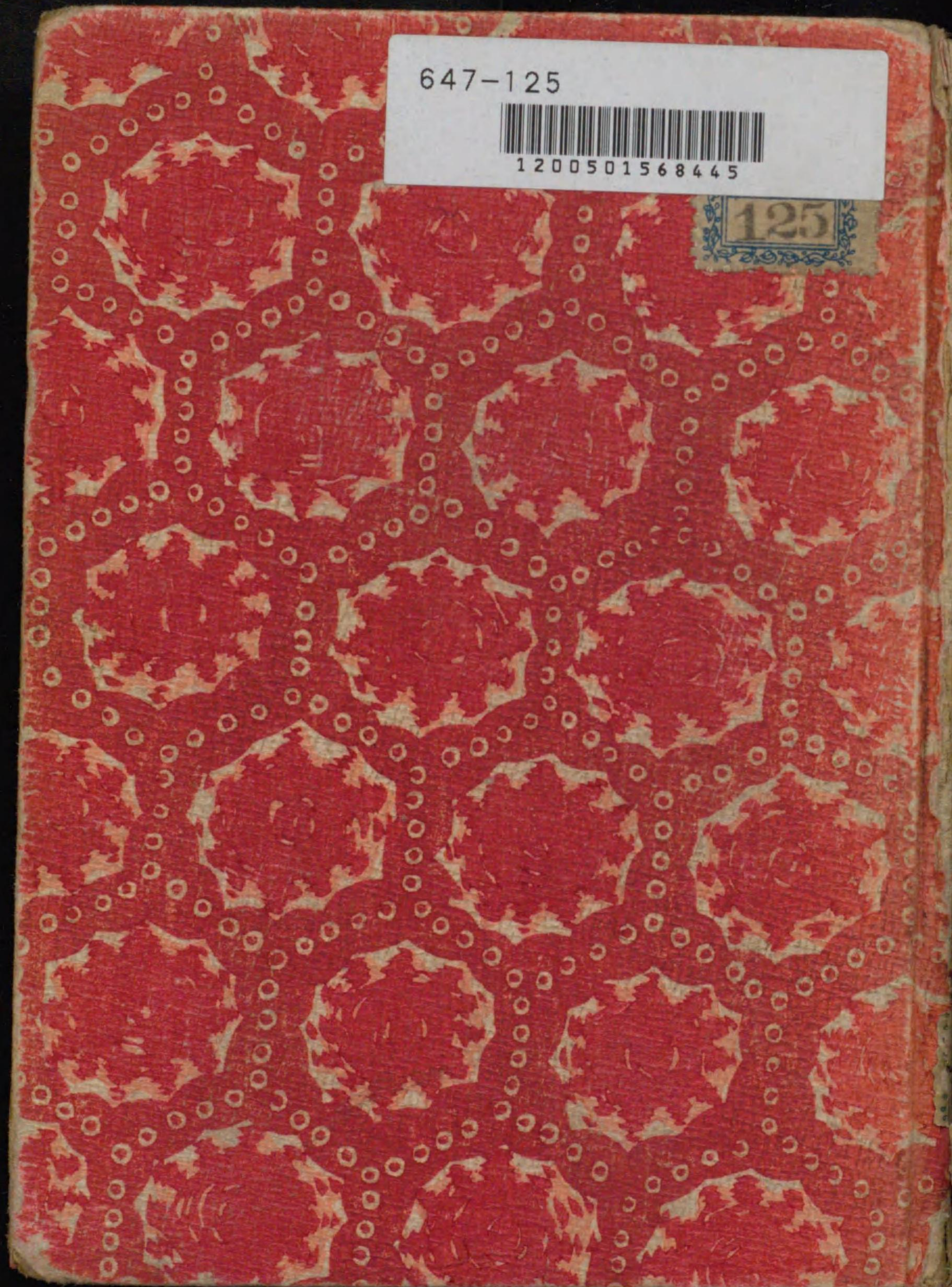


647-125



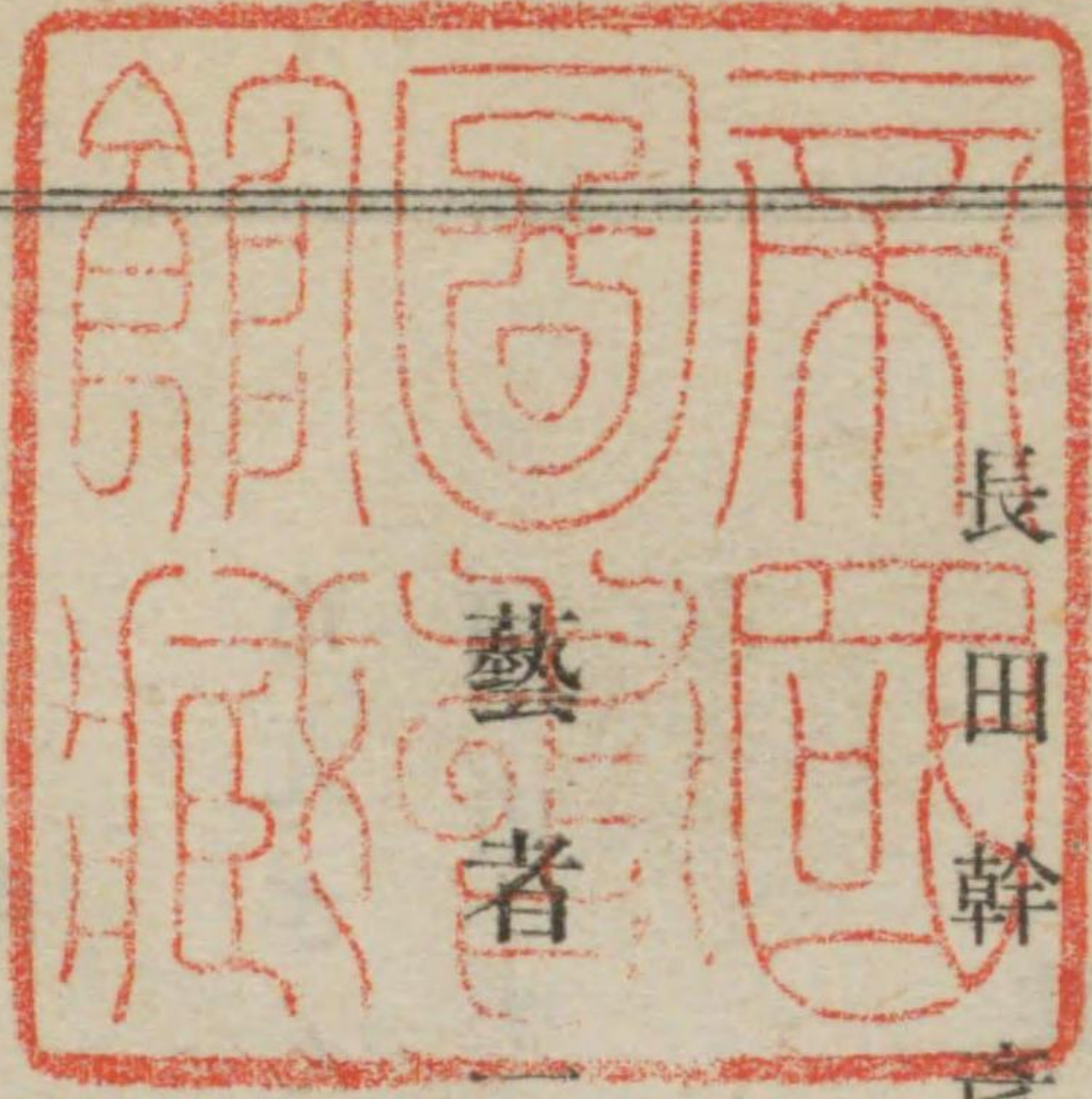
1200501568445

125



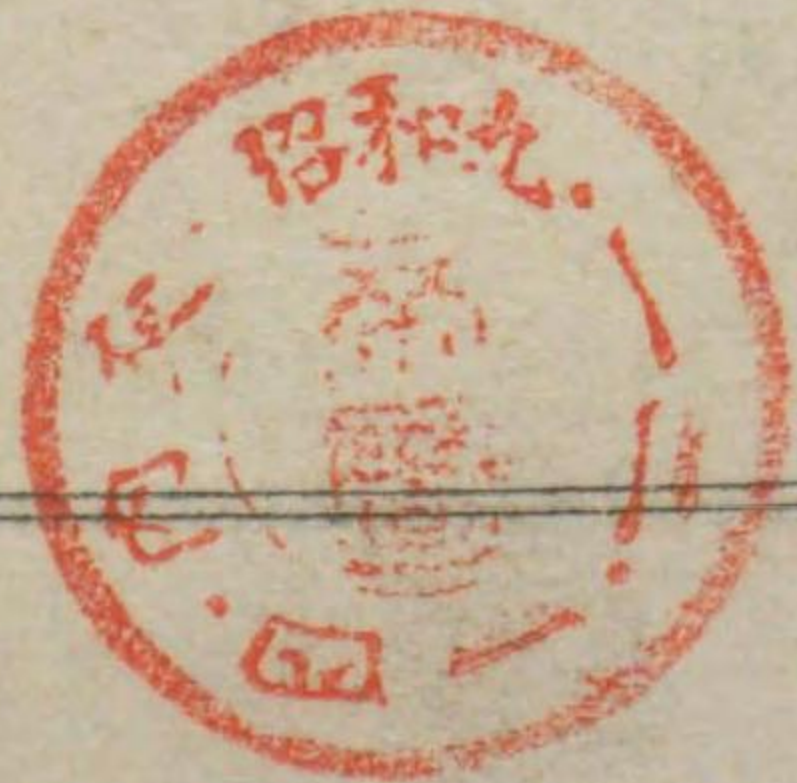
情話新集三

長田幹彦著



藝者三代記

新小說社版



内 容

市丸ざんげ(昭和篇)

..... 一

須山小唄(大正篇)

..... 七

蕩 兒(明治篇)

..... 一四

装 釘 ・ 小 村 雪 岱

647-125

市丸ざんげ [昭和篇]

篠原さん

その朝、市丸が眼をさましたのは、十時ちよつと廻つた頃であつた。その前の晩は新橋の新喜樂で新内閣の閣僚連の宴會があつて、市丸もその席へ招ばれ、淺草の家へ歸つてきたのは、もう午前の二時ちよつたので、まだ何んだか頭の心に疲れが残つてゐて、起きるのがひどく億劫であつた。表窓の雨戸の隙間からさし込んでくる朝の光は、枕もとの屏風に紫がかつた空の色をうつして、この二三日めつきり秋らしくなつた朝寒むが、肩先へひいやりとしみてきた。

あと三日ばかりすると、日比谷の公會堂で大演奏會があるので、市丸はしきりに喉を大事にしてゐた。歌手の生命は聲にあるので、彼女も此頃ではひどく神経質になつ

藝者三代記

て、とても健康に注意するやうになつてゐた。彼女は毎朝眼がさめるとすぐに、大學の矢島博士に處方をしてもらつた含嗽薬ですつかり喉を洗ふことにしてゐた。

と、その時、屏風のかげから、

「あら、姐さん、お眼覺め」と、いふ聲が聞える。それは抱妓の松奴であつた。

市丸は喉をガラガラやつてしまふと、又枕のうへへ顎をのつけて、

「松ツちやん、何にさ。何か用なの」

「あの、姐さん、私ね、さつきから、姐さんがお眼ざめになるのを待つてましたのよ。實はね、ほら一昨日の朝きたあの變な人ね、あの人があまたきてね、どうしても姐さんに逢はしてくれつて、きかないんですの。どうしませうねえ」

「一昨日きた變な人つて、誰あれ」

「ほら、姐さんが新聞社の方と話してらつしやる時にきたちやありませんの。汚い洋服をきて、女の子を連れてあの人ですよ」

「あ、あの、篠原とかつて人」

「え、さうさう、篠原つてさういつてましたわね。もう姐さん、一時間の餘も玄關へ入り込んでるんで、おみねさんもとて困つてるんですわ」

市丸はやつとその客のことを思ひ出した。もう此頃は新聞社や雑誌社はむろんのこと、各方面からいろんな人がいろんな用をもつて訪ねてくるので、さすがの市丸もよく胸忘れをして仕様がなかつた。訪ねてくる人の中には、恐らしい強請や、もの貰ひなどもまじつてゐるので、女中のおみねもほとほと閉口してゐるのであつた。

その篠原といふ男は、一昨日もやつてきて、市丸が階下の六疊で或る新聞の社會部の記者と話してゐる時に、二十分ばかりぐづつていつたのであつた。市丸は顔を出さなかつたがおみねの話によると、腐つたやうな麻の背廣を着て、十二三位の可愛らしい女の子を連れてゐるといふ。いつもならそんな篠原なんていふ名前も右から左に忘れてしまふのだが、市丸はその時何かなしに氣にかゝることがあつて、實は今日までうろ覺えに覺えてゐた譯なのであつた。

「私ね、きつと又お金を貰ひにきた人だと思ふわ。おみねにさういつて、一圓か二圓

やつて返してくれない」

「ところがね、姐さん、どうもお金もらひぢやないらしいんですよ。さつきもね、おみねさんが自分で一圓ばかりつゝんでやつたんですけど、どうしても取らないんですもの」

「そりや女中の取計らひぢやいくらもくれまいと思ふから、それで歸らないのよ。市丸つて名前をかいたあの御祝儀袋へ入れて出してごらんな、ちつきに歸るわよ」

松奴はぶつぶつ何かいひながら階下へ下りていつたが、それからはいつまでたつても上つて来ない。市丸はもう大概歸つた時分だらうと思つて、襟つきの半纏をひっかけ、裏階段から湯殿の方へ顔を洗ひに下りていつたが、ひよいと覗いてみると、玄關の上框のところには、まだその篠原とかいふ男が後向きに腰をかけて、おみねと何かひそひそ話してゐる。

市丸はもうそんなことには構はずに、水道の水をジャアジャア出したので、松奴は慌て、此方へ手傳ひにやつてきながら、

「姐さん、やつぱし駄目なのよ。あの、お金はほしかなからそれよりも市丸さんに逢つてぜひお願いし度いことがあるから、五分か十分でいゝから、どうか逢はしてくれつて、さういつて、てこでも動かないんですもの。ほんとに困つちやひますわね」

市丸ももう自烈ツ度くなつて、

「そんなに煩くいふんなら、もうほつときよ。私顔を洗つたら出ていつて、怒鳴りつけてやるからさ」と、眉根をびくびくやりながらいふ。

松奴は朝から市丸に不機嫌になられると困るので、一生懸命になつてまめまめしく顔を洗ふ手助けをしてやつた。

市丸はやつと顔を洗つてしまふと、態と化粧はしずそのまゝ六疊の方へ出ていつて、長火鉢の前へすつと坐りながら、

「あの、私、市丸ですが、何んか御用なんでしょうか」と、玄關の方へいふ。その調子は最初から喧嘩腰であつた。

と、上框に腰をかけてゐた篠原はぎよつとしたやうに初めて此方に向いて、

「やあ、お松さん、いや、どうもしばらくでした」と、さもてれたやうに丁寧にお辭儀をする。

その顔を見ると、市丸の方があべこべにはツと顔色をかへてやゝしばらくの間、二の句がつけないのであつた。それもその筈で、その篠原といふ男は、市丸が淺間温泉にゐた時分に随分長い間、ひいきになつた大事な客の一人なのであつた。

市丸は座布團からすこし乗り出して、片唾をのみながら、

「まあ、あなた、篠原さん、どうも私、篠原つてお名前が何んだか氣になつてたんですけど、まさかあなたとは夢にも思ひませんでしたわ。どうも大變に失禮をいたしました、申譯もござんせんわね。さあ、まあ、そこは端近かですから此方までお上なすつて」市丸はいくらでれくさくても今迄とは打つて變つた待遇をするより他はなかつた。

篠原は汚らしい身なりに恥ぢるやうにもちもぢしてゐるが、それでもやつと長火鉢のところまで上つてきて、

「いや、どうも度々煩くお邪魔をして、ほんとにすみませんでした。お家の人達にもいろいろ御迷惑をかけて、僕、お氣の毒だと思つてゐるんです。あなたからどうかよろしくさういつて上げて下さい」

「いゝえ、どういたしまして。私の方こそちつとも知らなかつたもんですから、ただことをしてしまひまして、ほんとに篠原さん、勘忍して下さいましな。あなたも悪いんですわ。ちよつと一言松本の篠原だつてさう仰有つて下さりや、私だつてこんな厭な思ひはおさせ申しやしなかつたんですわ。ほんとに随分ですわねえ」

「いや、僕も實は立派に名乗つて來られるやうなら、こんな朝つばらからお宅を騒がせやしないんです。僕いろいろ事情がありました、自分の名さへ大きな聲ぢやいへないやうな境遇にゐるもんですから」

「まあ、そりやどうしてですの。それよりもあなた、お連れさんがあるんぢやありませんの。もしお差支へがなかつたら、此方へお連れなすつたら」

「いや、あの、實は僕、妹をつれてきましてね、あなたも覚えてゐるでせう。あの

貞子ですよ」

「あら、まあ、お嬢さんをお連れなすつたんですか、何處にゐらつしやるんですの」

「あの、恥かしがるもんですから、戸外に待たしてあるんです」

「まあ、お可哀さうに、おい、おみねや、お前ちよつとそとへ出て、お嬢さんを此處へお上げ申しておくれな、ほんとに私どもへいらしつて、そんなに御遠慮なさらないだつていゝんですのに。さうしていたゞくと却つて私の方がてれちやひますわ」

「いや、あなたは、大變な御成功で、僕もほんとに陰ながらどんなに喜んでゐるか知れないんですよ。あなたに引き換へて、僕はこんなみすほらしい恰好をして、ほんとならお宅へなんか顔を出せた義理ぢやないんですけど、今度ばかりは僕も非常に差迫つた事情に責められてゐるもんですから……」

そこへおみねに連れられて、可愛らしい顔をした十二三の娘が玄關から上つてきた。これも色のさめたモスの單衣を着て、繩のやうなよれよれになつた細帯をしめたつきの、見るかけもない風をしてゐた。その娘はさも恥かしさうに眞紅な顔になつて、

上櫃のところをうぢうぢしてゐた。

「まあ、お嬢さん、そこにいらしつちや出入りに困りますから、さ、どうかお兄様のそばへいらしつて下さいませ。まあ、ほんとにおみおほきくおんななさいましたわねえ。おいくつ」

篠原もさもいぢらしさうに妹の方をみながら、

「もうあなた、十三になるんですよ。あなたが知つてる時分にはまだ五つでしたがねえ」

「ほんと、まだやつと片言でお話しが出来る位でしたのねえ。私、お宅へ伺つちやよく抱っこをして上げましたわ。あなた、私を覚えてゐて下さいまして」
娘は體をかたくして、たゞうつむいてゐた。

絃のもつれ

だしぬけに分一松家をさわがしたこの篠原敬之助といふ男は、松本でも有名な尾澤

屋といふ呉服店の次男坊であつた。市丸が浅間にある時分には、やつとまだ京都の帝大を卒業したばかりの若い法學士で、別にこれといつてつとめ口もないので、店の手傳ひなぞをしながらぶらぶら遊んでゐた。尾澤屋は町でも指折りの資産家だつたので、さういつた坊ツちやん連中が二八會といふのをこしらへて、月に二度づつ浅間へやつてきては駄々羅遊びをしてゐた。

尾澤屋は先代から派手で賣つた家なので、敬之助の父親の敬之進も松本や浅間の花柳界では極めて評判のいゝ旦那衆のひとりであつた。今時の若いものは、小唄のひとつもろくすつほうたへないといつて、父親は彼が大學へ入るとすぐから自分で連れて、方々の料理屋などを押し廻して歩くといつた風なので、敬之助も年の割りに遊びの手はあがつてゐた。殊に京都にながいことゐるので、祇園あたりでも相當浮名をたてられてゐたのであつた。

敬之助は、市丸が雛妓で出るとすぐからひいきにしてくれて、彼女が一本になる頃には、端から何の彼のと噂をたてられるやうなやゝこしい仲になつてゐた。市丸の方

でも、様子はよし、金づかひは綺麗だし、それに變に色氣ッほくないので、いつの間にか好きになつていつた。

敬之助の方ではもう思ひあまつて、一時は父親にもすつかり打明けて、末は夫婦になるつもりでゐた。父親は笑つて取り合はなかつたさうであるが、しかし當人はもう夢中になつてゐて、寢ても覺めても市丸のことばかり思ひつめてゐた。

やつぱり二八會の連中と一緒に、土地の藝者を七人もつれて湯田中の温泉へ遊びにいつたことがあつたが、その時に、市丸は敬之助の口からそのことを聞いて、ほんとに當惑してしまつた。その時の嬉れしさは今でも覺えてゐるが、しかし彼女にしてみると、果たして自分のやうなものがあんな大きなお店の若いおかみさんになれるかと思つて、何よりもそれが不安でたまらないのであつた。市丸は夜更けた温泉宿の二階の縁端で、體をふるはしながら掻き口説いてゐる敬之助の聲を聞いてゐるうちに何かしら悲しくなつてたうとう泣いてしまつた。なぞへになつた温泉町には紅い灯が幾つも幾つも瞬いてゐて、雲の多い空からは時々片破れ月がしよんほり姿をみせてゐた。

市丸にはその晩のことが今だに忘れられないのであつた。指折り數へてみると、それは丁度彼女が十七の秋であつた。

それからは又一層ふかくなつて、もう三日に一度は必ず敬之助に逢ふやうになつていつた。向ふから電話をかけてくれない時には、きつと此方からかける。いつも逢ふのは、富貴の湯の二階座敷であつた。

或る晩、やはり富貴の湯で敬之助の父親に逢ふと、父親はニコニコ笑ひながら、

「おい、松ツちやん、お前、家の敬之助と夫婦約束をしてるちふが、ほんとかね」と、訊く。松といふのは市丸の本名であつた。

市丸はひどくてれて、

「あの、私、いやだわ、そんなことお聞きなすつちや」

「いや、しかしせがれの方ぢやもうお前、夢中なんだからなあ。昨夜も私のところへやつてきて、もし松ツちやんと夫婦にしてくれなけりや、アメリカへいつてしまふといふんぢや、これには私も弱つてのう」

「まあ、アメリカへ。いやな方ねえ。そんなこと嘘でせう」

「いや、どうもあの様子ぢや、いきかねまじいんぢやよ。女に迷ひ込んだのぐらゐる始末にいかんもんはないからなあ。お前もしさうなつたらどうする」

「どうするつて、私、分んないわ。もし若旦那がどうしてもいらつしやるつていふなら、私も一緒に連れてつて下さらないかしら」

「は、は、は、は。香氣な奴ぢやなあ。二人でのこのこアメリカ三界なぞへいかれちや、私が第一困るがな。それよりもいつそ思ひ切つてお前敬之助のおかみさんになつてくれるか」

「そりや私、私のやうなものでもよけりや、私いつでもおかみさんになりますわ」

その時には笑談ですんだが、それから一月ばかりの間に、富貴の湯のおかみさんと尾澤屋との間には、何にか話が進行してゐるやうな様子であつた。そのことがいつかぱつと仲間うちへ知れたので、市丸はもう行く先々で何のかのと頭からからかはれた。それが厭さに、彼女はしばらくの間、病氣だといつて座敷を休んだりした。

さうしてゐるうちに、どうしたことか、敬之助はぱつたり淺間へ來ないやうになつてしまつた。市丸も變だと思つて、度々電話をかけてみたが、いつも敬之助は店にはゐなかつた。

だんだん人傳てに様子をきいてみると、敬之助はもう半月も前から何か用があつて、東京へいつてゐるのだといふ。それならそれで何んとか消息がありさうなものだと思つて、市丸はひどく不安な氣持ちでゐると、そこへ今度はとんでもないニュースが入つてきた。

東京へいつてゐるのは、敬之助ひとりと思ひの外、やはり淺間で出てるる妓で、春次といふ若い藝者が一緒だといふことがそれとなく分つてきた。春次といふのは、その時分市丸と張り合つてゐるた妓で、その妓も敬之助にはひどく惚れてゐた。その春次が一緒と聞いて、市丸はもうすつかりがつかりしてしまつた。

市丸にはいくらいはれても、どうしてもそれがほんたうのことゝは思へなかつた。第一どんないきさつでさうなつたのか、まるで見當がつかないのであつた。淺間は狹

い土地なので、何かあれば右から左に分つてしまふやうなところであつた。それなのに、あの敬之助が春次を連れて東京へいつたなぞとは、頭から信じられない話であつた。

後になつて分つたのだが、さういつた狂言をかけたのは、松の湯といふ家の女中頭のお龍といふ女であつた。お龍は渡りものゝ、凄腕でならしてゐるた女中で、いつか市丸が或客のことでお龍のいふことを聞かなかつたのを根にもつて、こんないたづらをした譯であつた。お龍は市丸が敬之助にひかされるといふ話を聞いて、何にかしら修羅が燃えてたまらないので、或日のこと敬之助と春次をこつそり諏訪へ連れだして、二人の仲をうまくとりもつてしまつた。敬之助もあれほど市丸のことを思つてはゐるながら、つひ春次の熱烈な情にひかされて、うかうかと深みへ入つてしまつたのであつた。お龍はさうなると二人を土地へおいては拙いので、尾澤屋の旦那までうまく唆かして、しばらくの間二人を東京へ落としてやつた。それをするには、どうしても市丸に傷をつけなければ、事が運ばないので、彼女は市丸のあらを拾つては、あることない

ことを旦那に告げ口をした。そんなこんなで尾澤屋では、市丸に對してひどく反感をもつやうになつてゐたのであつた。

事のいきさつを聞いて、若い市丸はもう生きてゐるのが厭になる位、悲觀してしまつた。彼女はそれから變にヒステリーのやうになつて、座敷へ出るのが何よりもつらくて耐らなかつた。雨が降つたといつては休み、雪がふつたといつては休みして、月のうちいくらもかせぐ日はなかつた。

市丸の母親のお京はそれをみかねて、いつもやつてきては意見をするのであつた。

「結局かうなつてみればお前、損なのはお前ひとりなんだよ。そりやお前にしてみりや、あのお龍さんが憎からうが、何をいつたつてお前相手は出先さんの姐さんなんだもの。それにあんな凄いい人だから、いくらお前が喧嘩をうつたつて、到底齒が立ちやしないのは分つてらあね。だからもうなかつた昔とあきらめて、このまゝ黙つて辛抱するのが一番だよ」

市丸はひいひい泣きだして、

「だつてお母さん、私、私、口惜しいんだもの。他のことなら何んだけど、今更こんな目にあはされてこのまゝ泣き寝入りになつちやつたら、私、もうこの土地で顔向けが出来なくなつちやふわ。藝者なんてものは、顔がありますからね」

「そりやさうだけどさ、よく事情を知つてる方はまたお前に同情もして下さるからね」

「いゝえ、私もう變な同情なんかしてもらひ度くないわ。私、一生に一遍でいゝから、あのお龍さんと、それから若旦那をあつといふ目に逢はせて、仇をとつてやり度いわ。それでなけりや、私もう死んぢやふからいゝ」

お京も手がつけられなくなつて、富貴の湯のおかみさんにも頼んで、なだめてもらつた。富貴の湯のおかみさんは太ッ腹な女なので、いつも笑つて、

「松ツちやんもまだ若いねえ。これからお前さん、長い間藝者をしてるうちにや、何十遍こんな目に逢はされるか分りやしないよ。何にも修業さ。そんなに思ひつめるがものはないやね」

「だつておかみさん、私、もうとても辛抱出来ないんですもの、もしこのまゝかうや

つてろつていふんなら、私、諏訪へでも、長野へでも住みかへさして下さいな。私、もうどうしたつてこの浅間にやゐられませんわ。第一朋輩の手前だつて私、恥かしいんですもの」

「ほ、ほ、ほ。男のひとりや二人寝取られたつて、何がお前さん、恥かしいことがあるもんかね。そんなふらふらした性の悪い若旦那に惚れたのが、お前さんの失策なんだもの、もとをいやあ、身から出た錆だよ。それもほんの當座のことで、一月か二月たつて御覽なね、悪い夢はひとりでに覺めちやふよ」

「い、え、おかみさん、私もう一生忘れませんわ。私、このことばかりは死んだつて忘れやしませんわ」と、市丸はひた泣きに泣いて、「私、誰れが何んてつても、私、きつと仇をとつてやるからい、わ。私……」

「ほ、ほ、ほ。恐いわねえ。そんなにお前さん仇がとり度かつたら、そんな男のことなんかでなしに、日本で何人といふやうな立派な藝者になつて、お龍さんや若旦那に見返してやつたらい、ぢやないか。何にしろ、かういふ時には、出来ないことでも、氣

を大きくもつてゐるに限るよ。ねえ、おつ母さん、さうぢやありませんかねえ。ほ、ほ、ほ」

市丸はそれからがらりと人柄が變つたといはれるほど座敷振りも違つてきた。彼女が藝に夢中になりだしたのは、そのことがあつて以來のことであつた。

仇がたき

歲月は夢のやうに過ぎ去つていつた。

市丸もさうはいつてゐるながら、敬之助との噂もいつの間にか消えていつてしまつたので、それから又三年ほど浅間に来た。

その間にもいろいろな出来事があつた。市丸があればほど恨んでゐた松の湯のお龍は、梅毒が頭へ上つたとかいふことで、松本の場末の病院で狂死してしまふ。春次も一度は浅間へ歸つてきたが、それから間もなく上田へ住みかへをするとかいつて、土地から姿を消してしまつた。

中でも一番不思議なのは、例の敬之助の行方であつた。彼はそれから度々松本へ歸つてきてゐたらしいのだが、市丸はむろん一度も逢はなかつた。いつぞや東京からの客を送つて、松本の驛へいつた歸りに、尾澤屋の店の前で大きな仕入れの荷を調べてゐたのが、どうも敬之助らしかつたが、市丸は態と知らん顔をして通つてしまつた。あれほどさかんだつた二八會ももう此頃では解散同様になつて、その時分のメンバーは殆んど顔をみせなくなつてしまつてゐた。なかでたつた一人、黒井といふ酒問屋の若旦那が、時偶思ひ出したやうに、富貴の湯あたりへ現はれるが、その人にきいても、敬之助の消息はまるで分らなかつた。

市丸はそれから三年目に、いろいろな事情のために東京の淺草へ住みかへをするこゝになつた。住みかへして間もなく、草津で逢つた松本のお客の話に、あれほど派手にやつてゐた尾澤屋も、もう此頃では時勢も變つたので今迄の營業方針ではやつていけなくなつて、モスや、銘仙一方の安物屋に轉身してしまつたさうで、さうなるといろいろボロも出て、先頃の恐慌以來めつきり店がいけなくなつたといふことであつた。

敬之助も自然店にゐても面白くないので、彼は今では大阪の或る問屋へ店員奉公をしてゐるのださうであつた。

市丸はそんなことを聞いても、もう別に氣持ちが動くやうなこともなかつた。若い時分にはあんなに復讐心に燃えてゐた彼女も、ひろい大都會へ出てきたせるか、昔とはすつかり心持ちも變つてゐた。それにその當時はもう一つ別に戀愛問題があつたので、猶ほ一層他人ごとには心がかむかなかつた。唯あんなに贅澤にして育つた敬之助が、知らぬ他郷で奉公をしてゐるのかと思ふと、何んだか氣の毒なやうな氣がして、いゝ氣味だと思ふよりも、ものゝ哀れをしみじみと感ずるのであつた。

敬之助との交渉はもうそれつきりで、それから既にもう十年の月日が流れていつてしまふやうな歲月のへだたりが市丸のうへにもやつてきてゐた。

その今日になつて、思ひがけもない時に、しかもいかにも突然に、敬之助が市丸の眼の前へ現はれたのであるから、彼女が吃驚するのも全くむりではなかつた。それば

かりではない、敬之助は生活に疲れたやうなみすほらしい恰好をして、しかも妹まで連れてやつてきたのであるから、實際市丸は、度膽をぬかれてしまったのであつた。敬之助はおみねがついで出す番茶をさもうまさうに啜つてゐるが、落ちつきのない腫をたえずあつちこつちへ向けながら、

「ねえ、松ツちゃん、僕、實はあんたに逢つて、折入つてお願いし度いことがあつてお邪魔をしたんですが、どうもお家の人のゐる前ぢや、何んほ圖々しくつても云ひ出せないんでね、ほんの十分ほどでいゝですから、何んとかしてもらへないでせうかと、おづおづいひ出す。

市丸は二人對向ひになるのは、何んとなく氣味がわるかつたが、しかしまあ大したことなからうと度胸をきめて、敬之助だけ二階の四疊半へ通した。二階は今寢床をかたづけられたばかりで、まだ掃除もしてなかつた。

市丸は小火鉢と座布團を出したが、敬之助はそれへも坐らずに、かたい割り膝をしながら、

「どうもほんとにおやすみのところへきて、とんだ御迷惑をかけちまひましたなあ。どうかまあ、昔のお馴染み甲斐に悪く思はないで下さい」と、むりに白い齒を出して笑ひながら「それぢやお忙がしいのに、あんまりお手間をとらせても何んですから、とにかく用件だけ申しませう。實はね、僕、甚だ突然ですが、今度變なことでしばらくの間、東京を留守にしなければならなくなつたんでね、ついてはあの妹の貞子が、どうにも足手まどひになつてしやうがないんで、甚だ御迷惑でせうが、一月ばかりお宅へ預かつてもらへないだらうかと思ひましてねえ。ほんとに御迷惑なのは僕にもよく分つてゐるんですけど、僕ももう脊に腹はかへられんのでねえ」

市丸はあんまりだしぬけなので、返事が出来なかつた。敬之助はその顔を臆病らしくそつとみて、

「いや、本来なら、郷國へ連れて歸つて、母親にでもあづけるのが一番いゝんですが、何にしろもう時間が差迫つてゐて、その餘裕もないし、それにあちらの方にもいろいろ事情がありましてねえ。ほんとに僕どうにもならんのですよ。僕も昔のことを考へ

ると、今更になつてあんたに、こんなことを頼めた義理ぢやないんですけれど……」

市丸も彼一人にしやべらせておくのも氣の毒になつて、

「あの、あなた、東京を留守にするつて、何處かへいらつしやるんですの」

「それがね、僕、一寸事情があつて、はつきりいへないんですが、とにかく僕朝鮮方面へいかなければならぬんですよ」

「朝鮮へ。何か御商賣の御用でもあるんですの」

「さあ、それがどうもはつきりお話が出来んですが……まあ、あんたからお洩らしするんですけど、僕、今つとめてゐるところで、實はその、少しつかひ込みをやりましてねえ、どうしてもその穴埋めが出来んですよ。それでね、このまゝにしてゐると、警察の方が煩いんで、どうしてもこゝ二十日ばかり姿をくらましてゐる必要があるんです。さうすれば、郷國の方の兄もまさか放つてはおけんでせうから、何んとかして尻拭ひをしてくれるだらうと思ふんでねえ」

「まあ、そんな御事情なんですか。そりやいけませんわねえ。一體今どちらへおつと

めなんですの」

「僕、今日本橋の或る織物問屋へつとめてゐるんです」

「もう長いこと、そちらに出てゐらつしやるんですか」

「え、もう彼此れ三年ほどになるんですけど、こんなヤクザなんで、まるで出世のつるを失つてしまひましてねえ。それに多分御存知だらうと思ひますけれど、僕を一番可愛がつてくれたあの父親も亡くなつてしまひますし、店もあんな工合で、もうどうにも立ちいかんもんですから、僕もすつかり前途に希望を失つてしまふし、此頃ではもう實際生きてゐるのがいやなつちやつたんですよ」

「まあ、ぢやお父さまはもうお亡くなりになつたんですか」

「え、父は一昨々年の冬、亡くなりました」

「まあ、私ちつとも知りませんでしたわ。私此方へ出てきてからは、松本の方の御様子もめつたに伺ひませんのでねえ。さうでございますか。そりやさぞお力落しをなすつたでせうねえ。ぢや今お店の方はお兄さんがやつていらつしやるんですか」

「え、まあ兄が相續人ですから、ひとりでやつちやりますけど、もう店も此頃ぢや散散なんですよ。借金は先から先とかさむし、つまり一日一日に没落していくやうな有様なんですよ。ですから僕ももう松本にゐるのがいやでねえ、父の葬式を出してから一度も歸つたことはないんですよ」

「でもあなた、ひとしきり大阪にゐらして大變に御都合がい、やうなお噂を伺つてゐましたがねえ。彼方はいつ頃お引上げになつたんですの」

「大阪ですか。いや、大阪でも僕やつぱり飲みすぎて失敗しましてねえ。それからちよつと名古屋にゐて、名古屋から東京へやつて來たんですよ。僕、こんなことをおしやべりすりや、どうせあなたも警戒なさるだらうから、一切黙つてゐようと思つて來たんですけど、あなたの顔を見たら、僕、もう嘘がつけなくなつちやつたんです。ほんとに僕羨ましいですよ。あなたはこんなに成功なすつて、もう此頃ぢや何處へいつたつて、あなたの名を知らない人はないんですよのねえ」といつて、敬之助はうすく涙ぐんだ眼で、門内をそれとなく見廻はしてゐた。つひ四五日前に三越から買つた有

職屏風が、その四疊半を又なく美しく華やかなものにみせてゐた。

落 魄

市丸は今こそ復讐に似た氣持ちを充分に感じなければならぬ筈なのに、彼女はどうしてそんな氣分になれなかつた。若旦那の落魄れたのといふものは、何處か憐れツほくてわびしいので、彼女はあべこべに一種の同情に似た氣持ちが多分に働きかけてくるのであつた。

「ねえ、あなた、もうお互に昔のことはいひつこなしにしませうよ。私ね。唯一つ伺つておき度いのは、あの春次さんのことすわ。今春次さんはどうしてゐらつしやいますの」

敬之助は眉根を暗くして、

「春次？ あゝあの妓ですか。あれは何うしてゐますかねえ。僕まるで消息を知らないのでですよ」

「あら、ほんとですか。もうあなた、今になつてお隠しになる必要はないぢやありませんの。白状しておしまひなさいませよ。あなた、大阪へ連れてらしつたんぢやありませんの」

「いや、いや、そ、そんなことはありませんよ。もうあなたも何も彼も御存知だらうと思ふから、お話ししてしまひますけど、僕ほんたうのところ、東京から松本へ歸つた時に、きれいさつぱり手を切つてしまつたんです。あの時分には松の湯のお龍もまだ生きてるましてね。すつかり皆の了解をつけて、僕、手を切つたんです」

「まあ、さうですかねえ。私、さうはきいてるなかつたんですけど、ぢやあの人はおなたと手が切れたんで、上田へ住みかへをしたんですの」

「え、そりやほんたうのことなんですよ。僕もほんの一時の迷ひで、あの妓には随分ひどい目に逢はされましたよ。東京へいつてる間も散々しほられて、そのうへに手切れたといつて、前後に五千圓もとられたんですからねえ。あればかりは今でもあきらめきれないんですよ。あの妓にしほられただけの金が今手許にありや、僕は一生黙

つて食へるだけの仕事が出来るんですがねえ」

「まあ、あの人そんな人でしたかねえ。つまりあのお龍さんて人がえらかつたんですかねえ。もうぢやあれつきり春次さんにはお逢ひにならないんですか」

「え、逢ひません。上田にゐる間にも一度か二度店あてに手紙をくれましたけど、僕返事もやらなかつたんで、それつきりになつてしまつたんです。それからだつて七八年になるんですから、もう上田にもゐないかも知れませぬねえ」

「ほんとに人間の世の中つて果敢ないもんですわねえ。あの時分淺間にゐた人達だつて、今ぢやどうなつてるかまるで分らないんですものねえ。殊にこの社會は動きが早いんでねえ」

「いや、あなただつてさうですよ。僕、大阪にゐる時分に、あなたが東京へ出たつていふ噂は聞いたんですけど、あなたがまさか名聲隆々たる市丸さんにならうとはつひ此間まで夢にも知らなかつたんです。それについて面白い話があるんですよ。僕ね、つひこのお正月にね、あなたがJ O A Kから放送をなすつたでせう。あの時にね、

ふいと町を通つてゐまして、あゝどうも聞き覚えのある聲だなどさう思つたんです。それからね、僕いつだつたか、「千鳥格子」つていふ映畫にあなたが自分で主演するつていふ廣告をみたんで、僕、妹と二人でいつてみたんですよ。さうしたら、畫面に出てくる顔が思ひもかけないあなたなんでせう。もう吃驚しちまひましたねえ。あの時分とは少しは變つてゐるけど、トーキーで出てくる聲の中に、いふにはれない昔のなつかしいひびきがあるんで、僕、ふつと涙ぐんでしまひましてねえ。かへりに僕、「千鳥格子」のレコードを一枚かつてきて、實は僕今でも時々かけて聞いてゐるんですよ。今度此方へおたづねするやうになつたのも、僕ビクター蓄音器會社へ聞いて、あなたのお住居を知つたからなんですよ」

「まあ、さうでしたか。そりやどうも失禮しましたわねえ。まあ、おかけ様で、私も今ぢやどうやら多少、世間の皆様にも名前を知つて頂けるやうになりましたんで、それだけは私ほんとに有難いと思つてゐますんですの。それもこれもみんな世間の皆様が後援して下さるからなんですわ。私、自力ぢやととても此處までは賣出せやし

ませんわ。ですからね、私自分ぢや何んだか今でも夢をみてゐるやうな氣がするんですの」

「いや、何よりも結構ですよ。淺間からあなたのやうな人を出したゞけでも、土地の光榮だといつていゝですよ。何も彼もあなた自身の努力のたまものです。僕も過去を考へると、ほんとにお恥かしくつて、實際かうやつて逢つてゐても、冷汗が出るやうな氣がするんです」敬之助は心から悔恨にたへないやうにいつて、しばらくの間うつむいて考へ込んでゐるが、やがて又ふつと我に返つたやうに、

「いや、時に、さつきのお話ですがねえ、どうか僕一生のお願いですから、妹の貞子を預つていたゞけないでせうか。僕、あんまり正直に白狀しちやつたんで、あなた、ほんとに僕つてものを恐ろしく思やしないかと思つてね、それが今急に氣がかりになつてきたんですよ。もしあなたに預つていたゞけないとなると、僕、ほんとにどうにも出來んのですからねえ」困惑の色はその顔へありありと描きだされてきた。

市丸もちよつと考へて、

「もしお預りするとしたら、幾日位なんですか」

「さあ、まあ、二十日間位で僕曲りなりにも、解決はつくど確信してゐるんですけど……」

「二十日間ね、さうしたらどうなるんですの、あなたが又迎ひに来て下さるんですか」
 「そりやむろんのことです。僕解決がついたらすぐに迎ひに来ますよ。先刻は、あの朝鮮へいくつてさういひましたけど、僕實はそんなに澤山旅費ももつてゐないんで、今後の形勢次第で、僕、東京の何處かに隠れてゐるようかとも思つてゐるんです。さうすりや又電話か何かで連絡もとれますしねえ」

「さうね、こんなことを伺つていゝかどうか分りませんが、一體その、おつかひ込みになつたお金つていふのは、どれ位なんですか」

「いや、それもあなた方から考へたら、ほんの僅かな額なんですよ。實は三百五十圓ばかりなんです」

「あなた、その金でお遊びにでもなつたんですか」

「いや、いや、どうしまして、もう今ぢや僕もそんな勇氣は少しもありませんよ。僕、ほんとのことをいふと、妹が此の夏、チアスをやりましてね、あんまり可哀想だもんですから、柄にもなく大學病院へ入れてやつたんですよ。その入院料に差支へたもんですから、僕悪いとは知りながらつひどうも……」

「まあ、そんなことにおつかひになつたんですか。ほんとにお氣の毒ですのねえ」

「ですから、店でも或る幹部の人は僕に同情してゐてくれるんです。従つて郷國の兄から何か支拂ひの保證でもつけてくれ、ば、僕、まさか警察沙汰にもしまひとは思つてゐるんですけど、併し一部の人間は妙に僕を疑つてゐましてね。大勢の店員にしめしがつかんから、此際斷然たる處分をしろといつて、上の連中に焚きつけてゐるんです。何をいつても悪いことをしたには相違ないんですから、僕ももう覺悟はきめてゐるんですけど……」

「でも三百五十圓位なお金で、まさかあなたを刑務所へ入れるやうなこともなさらないでせう。そんなことをすりや、お店の看板にも傷がつかますからね。私、實は申し

憎いんですけれど、かういふ稼業をいたしてをりますんでね。そんな警察問題なんかでもし萬一懸り合ひになると、大變に困るんですわ。何にしろ、世間様の人氣が私の資本なんですからね。私、その點をどうかあなたにも考へて頂き度いんですわ」
 「いや、御尤もです。そりや僕もほんとに申譯ないと思つてゐるんですよ。でも、僕たとへ警察沙汰になつた時にも、此方へは何の影響もあるまいと確信してゐるんですよ。僕とあなたと知己だなんて、そんなことを考へるものもありませんまいからね、僕そこを狙つて、實はお願ひに上つたんですよ」

市丸もその時にはあとの懸り合ひを恐れて實は預り度くなかつたのだが、さつき恥かしさうにしながら家へ上つてきた貞子の様子を思ひ出すと、何んだか唯むしやうに可哀想で耐らなくなつてきて、そのために心が動いた。もし自分が預らないといつたら、あの貞子は明日から路頭に迷はなくてはなるまい。まだ年端もいかないのに、郷國の家は工合がわるくなつてしまふし、父親は亡くなる、兄の敬之助たつた一人を頼りにして、こんな見ず知らずの東京で食ふや食はずで暮してゐるその境涯を思ふと、

市丸の氣性として全く黙つて放つてはおけなくなつてきた。しかも昔はあの派手な暮らして、家にも貞子は錦紗ばかり着て遊んでゐた。その當時の面影を覚えてゐるだけに猶ほ一層いとしまがかゝつた。

市丸はやがて腹をきめて、敬之助のいひなりに當分貞子を預ることにした。もし又何か面倒なことが起つたらいつも相談相手になつてくれてゐる金泉の女將に智慧をかしてもらへばい、とさう思つて、彼女は貞子のからだを引受けたのであつた。

敬之助はもう涙をこぼして喜んでゐた。どうかよろしく願ふといつて、彼は疊へ手をついて、顔さへ上げ得なかつた。

さうしてゐるうちにも、何かしら不安が迫るとみえて、敬之助はやがて歸り支度をした。彼は階下へ下りると、上櫃のところへさつきま、きちんと坐つて、しよんほりしてゐる貞子のそばへいつて、何やらひそひそ話をしてゐるが、貞子は急にしくりしくり泣き出して、袂で顔を掩つてしまふ。

敬之助も涙顔でそれを宥めて、

「貞子、泣くんぢやない。こんないゝをばさんのところへ置いて頂くんだから、お前うれしいだらう。お前じじう市丸さんのレコードを聞いて、逢ひ度い、逢ひ度いといつてたぢやないか。さ、もう泣くんぢやない。皆さんが笑つてゐらつしやるよ。さ、お前も皆さんによろしくお願ひするんだ。さ、頭を下けてね」彼はむりに笑ひながらさういつたが、その聲は涙でふるへてゐた。

市丸も涙ぐましくなつて、

「ねえ、お嬢さん、あんた、何にも心配なさることはありませんわ。たつた二十日かそこいらですもの。私がしつかりお預りしますから、松本のお家へ歸つた氣で、安心してゐらつしやいませよ。家にはこの通り雑技もゐますしね、お友達もたくさんあるんですから、ちつとも淋しいことはありませんわ」

さういはれると、貞子はなほ心細いやうに齒をくひしばつて泣き出した。しかし見知らぬ人達の前なので、彼女はせぐりくる嗚咽をやつと耐へて、泣き聲をたてまいとして喉のところを蒼白くふくらませてゐた。その様子がとてもいぢらしかつた。

敬之助は涙をみられるのを恥ぢてか、せかせか上框へ出て、靴をはきながら、

「おい、貞子、お前、泣くんぢやないつたら。昨夜もあんなにいつて聞かせたんぢやないか。どうしてさう聞きわけがないんだ」と、叱るやうには云つてゐながら、自分も慄へ聲になつてくる。

貞子はそのつと敬之助の上衣の裾を握りながら、何かいはうとしたが、彼が恐い顔をしてゐるので、そのまゝ又顔を伏せてしまつた。

「ぢや、松ツちやん、どうかよろしくお願ひします。僕ぢきに又迎ひに来ますから、何かのことは又その時にお話し、ますから」と、さういつて、彼はもうその場に居耐れないやうにあたふた格子戸を開けて出ていつてしまふ。貞子はしつかりと上衣を握つてゐたので、振り放される拍子に、何處か破けたとみえ、びりツとさける音がした。市丸もほろりとして、そのあとを見送りながら、

「ねえ、お嬢さん。ほんとにあんた心配なさることはありませんよ。お兄様はぢきに迎ひに来て下さいますからね。もし何んなら、家の常奴と一緒にお午ツから公園へい

つて、活動でもみてるらつしやらない。さうしたら氣が紛れるかも知れませんがね」
 貞子は兩方の袂で顔を掩つて、もう身も世もあられないやうに泣いじやくつてゐた。
 もし市丸がゐなかつたら、彼女はきつと裸足でとびだして敬之助のあとを追つたに相違なかつた。その悲しさうな泣き聲を聞いたゞけでも、市丸は脊中がうづくやうな氣がした。

檢番の人と戶外の露路のところでは話してゐたおみねは、その時、自分も涙ぐみながら臺所口から歸つてきて、

「ねえ、姐さん。今の方ね、一度公園の方へかけていらしたんですがねえ。又氣になるとみえて、その表の格子のところまでそつと引歸してきて、今しがたまで様子をうかがつてゐらしたんですよ。私みて、涙が出てきてしまひましたわ」

「まあ、ぢやそこへ引歸してみえたんですの。やつぱり別れが辛いねえ。私、お察しするわ」さういつて、市丸はそれなり化粧をしに鏡臺の方へ出ていつた。彼女もその時は、我にもなく貰ひ泣きをしてゐた。

夕嵐

その晩、市丸はお座敷で金泉へいつたので、お客が歸つてからあとで女將の部屋へ下りていつて、敬之助の話のこらす女將にして聞かせた。女將も眼を丸くして、

「まあ、ほんとに世の中つて廣いやうで狭いもんねえ。あんたほど有名になると、これでなかなか人づきあひがむづかしくなるわねえ」

「あら、いやだ。おかみさん、何も内輪同志であふりっこするところないわ。でもね、私、一番氣がかりなのは、貞子ちゃんなのよ。あんな人を預つて、私、かゝりあひになりやしないでせうか」

「さあね、そりや請合へないわね。そんなあんたつかひ込みなんかした人の妹さんぢや、いづどういふことになるか分らないよ。しかしそれにしたつて唯預かつたゞけなんだもの、大したことはないに極つてゐるわ」

「さうでせうか。もし警察沙汰にでもなると困ると思つてねえ。私よつほど斷らうと

思つただけど、——」

「だつてあんた、あんたとしちやい、人助けをしたことになるぢやないの。決してわるいこつちやないわ。陰徳あれば、陽報ありつてね。それに何んぢやないの。あんた、あんなに恨みに思つてた人が、かりにもそんなにおちぶれて、妹を預けにやつて来たんだもの。すつかり仇討ちが出来て、胸がすつとしたでせう。一方から考へりや、全くい、氣味だわね。だから私、いつもいふけど、この世の中つてもものは、ほんとによく出来てるわよ。悪いことをすりや、きつと報いがあるんだものね」

「ところが、をばさん、私ね、ちつともそんな仇をとつたなんて氣がしないのよ。そりや悪い氣持ちぢやなかつたけど、でも、私、何んだか可哀想でねえ。この人情にからむのが、私、いけないのね」

「さう、お前さんはいつでもそれで損をするんだけど、又そこがあなたのいゝところさ。かうなりや敵をあはれんでやる方が役がいゝわよ。それにもしその若旦那が、あん時あんたに對して、あんな薄情な眞似をしなかつたら、あんたも今のやうに賣り出

せなかつたかも知れないんだものね。さう考へりや、お禮心で妹さんぐらゐる預かつてあげたつていゝ譯よ」

「ほんと、ほんとにさうね。ものは考へやうだわね。私、あのことがあつたから、藝に身を入れるやうになつたんだし、それにあれでどれほど修業させられたか知れやしないわ」

「さうともさ。あれからぐつと氣心がしまつて、辛い修業をしたからこそ、今日の人氣が得られたんだわよ。云はゞ恩人だあね。ほゝゝゝ」

「さうですわ。もしあのまゝ、若旦那と一緒にでもなつてたら、今頃は私もボロをさけて東京中をうろろして歩いたかも知れないわねえ。私、何んて運がいゝんでせう。全く人間のことつてもものは分らないもんね。私あの當座はもう藝で立つて、何んとかして見返してやり度いと思つてたから、今から考へると、そりや私、よくあんな辛抱が出来たもんだと自分ながらしみじみ感心する時がありますわよ。やつぱりそのおかげで、私かうなれたのねえ」さういひながら、市丸は憂いつらひ昔のことどもを思ひ

起しながら、つひ涙に暮れてしまつたのであつた。

家へ歸つてみると、貞子はおみねにお風呂をつかはしてもらつて、奥の六疊へ常奴とふたりで小さくなつて寢てるた。市丸が歸つて來たもの音で、貞子はそつと起き上つたが、市丸はそれを押へて、

「まあ、貞子ちゃん、あんた、もう起きなくつてもいゝのよ。やつぱり寢床がちがふんで、およれないんでせう。でもぢつきに馴れますわよ。さ、もうおそいから、おやすみなさい」彼女は姉のやうな氣持ちになつて、心から慰めてやつた。

片羽鳥

貞子といふ子は、つきあつてみると、まことに性質のいゝ娘で、中々惻口でもあるし、年の割にしつかりもしてゐた。それに無口でいつもしよんほりしてゐるので、家のものは皆可哀想だといつて、骨身を惜しまず面倒をみてやつた。子供のこととて、四五日もすると、すつかり家の人も馴染んで、いくらか氣も晴れやかになつていつた。

敬之助からは十日たつても、十五日たつても、何のたよりもなかつた。あゝいつていつたのであるから、何かあつたら電話のひとつぐらゐるかけてよこすだらうと思つて、市丸も心待にしてゐるたが、あれつきり杳として音沙汰がなかつた。

約束の二十日がすぎると、市丸も稍氣がかりになつてきた。いつもは忙がしさに取り紛れて、貞子とも深い話をしたことはなかつたが、或晩のこと、實演の會から歸つてくるともうぐつたり疲れて、とても座敷へ出る元氣がないので、彼女は方々を斷つて珍らしく十時頃から寢床へ入つてしまつた。いつも宵ッ張りなので横になつてもなかなか寢つかれない。そこで彼女は階下で常奴と遊んでゐる貞子を二階へ呼び上げて、いろいろ話をきいてみたのであつた。

市丸は菊之家の吹き寄せなどを出して、貞子にも食べさせながら、
「ねえ、あんた、私いつからか聞かうと思つてただけど、あんた、こゝへゐらつしやるまでは、何處にゐるたの。東京にお家があつたんでせう」

貞子は寂しさうな顔をして、

「え、私、あの、阿佐ヶ谷にゐるたんですの」

「阿佐ヶ谷に、随分遠いところにゐたのねえ。それで兄さんには、今奥さんはないんですの」

「え、私、よく知らないんですけど、時々女の人が出来ちや、四日か五日位とまつていくんですの」

「まあ、そりや若い人？」

「さあ、何んでも二十四五の人でしたわ」

「やつぱし私達みたいな藝者？」

「い、え、さうぢやないんですの。看護婦をしてるとかいつてましたわ」

「きれいな人」

「え、……」

「まあ、お兄さんも油断がならないわねえ。その女の方は、あんたを可愛がつてくれ

て」

貞子は悲しさうな眼をして、頭を振るだけで何んにもいはない。

市丸は可哀想になつて、

「ぢやその人がお兄さんの奥さんの代をしてた譯なのね。それで、そこのお家は貸家なの」

「え、でもお家賃を拂はないんで、男の人がよくやつて来ちや、兄さんとけんかしてましたわ。私、ほんとに恐かつたんですの」

「まあ、さう。そいで、その女の人が来ない時には、御飯はどなたがたくの」

「あの、御飯なんか、炊かないんですわ。お兄さんはしじう家にゐないし、私ひとりなんで、私、一日中何んにも食べないでゐる方が多かつたんですの。でもね、お兄さんが、時々何處かからお金をとつてくると、私を西洋料理屋へ連れてつてくれたり、おそば屋へ連れてつてくれたりするんでね」

「まあ、ほんとにお可哀想にね。あんたぐらゐるな年で、よく一日御飯をたべずにゐら

れるわねえ」

「あの、馴れっこになると、そんなにお腹も空かないんですわ」

「學校は」

「あの、私、とても學校へいき度かつたんですけど、お兄さんが貧乏なんでやつてくれないんです」

「でも信州にゐらつしやる時分には、學校へいつてらしつたんでせう」

「え、私、松本にゐる時分には第三小學校へいつてたんですけど……」

「あなた、松本のお家には幾歳時分までゐらしつたの」

「あの、私、ほんとは一昨々年までゐたんですわ」

「ちやあちらのお家のことはよく覚えてゐらつしやるわね。私があちらにゐる時分には、随分お店もはんじやうしてましたけど、この頃はいけないんですつてねえ」

「私、松本にゐる時分には、お店にゐたんぢやないんですわ。私、淺間へいく道にお地藏様があるでせう。あすこの裏にゐたんですの」

「まあ、どうして。どうしてあんなとこにゐらしつたの」

「どうしてだか知らないんですけど、私もお店にゐた番頭のお家へ預けられてゐたんですの。ですからお店のお葬式も何んにも知らないんですの」

市丸は變なことをいふとは思つたが、いろいろその間には煩い事情があるのだらうと察して、別に深くもせんさくしなかつた。

「それにしてもほんとに皆さんお氣の毒ですわねえ。私がよく伺ふ時分には、お店の裏に大きな母屋があつて、土藏だけでも七戸前もあつたんですものね。私、あなたがあんまりお可愛い、んで、よくあすこのお座敷のところ抱ッこして上げましたわ。

あなた、覚えてゐらつしやる」

貞子は怪訝な顔をして、まじまじ市丸の顔ばかりみてゐた。まだ五つや六つではむろん記憶もなからうと思つて、市丸は笑ひながら、

「あなたもやつと片言で何か仰有る時分だつたから、覚えてゐちや下さらないでせうねえ。私、あの時分には、まさかこんなことにならうとは夢にも思はなかつたんです

わ。ほんとに世の中つて不思議なもんねえ……。それにしてもお兄さんはどうなすつたんでせうねえ。もうお約束の日もすぎちやつたんだから、何んとかたよりをして下さりさうなもんですわねえ」

それをいはれると貞子はしよんほり肩を落として、涙ぐんでしまふのであつた。

市丸もかうなると、何處へどう手を廻はしていゝか、見當もつかないので、全く困つてしまつたのであつた。あの時、萬一の場合を豫想して、もつと手をつめておけばよかつたが、つひ人情にかまけてうっかりしてゐたのが此方の手落ちであつた。もし音沙汰のない場合にはどうするといふ手筈を打合はせておけば、まだ始末がよかつたのであつた。しかしもう今となつては、それも及ばぬことであつた。

あゝはいつてゐるだが、ひよつとかしたら郷國の方からの助け船がうまくいかなくて、あの敬之助は警察の手で押へられてしまつたのではなからうか。もしさうだとすると、一體この貞子はどう處分すべきであらうか。つかひ込みなぞといふ犯罪がどれくらゐな刑期に該當するものか、そんなことは少しも知らなかつたが、とにかく懲役に

でもやられるとなれば、二年や三年はむろん娑婆へ出て來ないであらう。その間、自分がこの貞子の面倒をみてやらなければならぬとしたら、どうすべきものであらう。

市丸はさう思ひ出すと、何んだか眉毛に火がつくやうな氣がして、早速金泉の女將を迎ひにやつた。女將は忙がしい中をそれでも大急ぎでやつて來てくれたので、市丸は氣の毒さうに起きあがりながら、

「あら、おかみさん、ほんとにすみません。私ね、此方から伺はなけりやいけないんですけど、我儘をいつて御免なさい。私ね、今日實演から歸つたら、何んだか急に頭が重くなつちやつてねえ」

「いゝえ、もう毎度のことですから、氣にもいたしちやをりませんよ。ほゝゝ。お前さん、もう此間から大分無理がつゝいてるから、又體をこはしたんぢやないの。しつかりしなけりや駄目よ」

「有難う。別にさう大したことぢやないと思ふんだけど、何にしる疲れが出たのね。をばさん、それよりもね、大變なことになつちやつたのよ」と、いつて、貞子のこと

をいひだす。

女將は黙つてきいてるたが、笑つて、

「何によ、その事なの。私や又どんな一大事が起つたのかと思つておつ取り刀でかけつけて来たんだよ。あんた、いふことが大袈裟だからね。ほ、ほ、ほ。そんなことなら何にも心配することはないやね。もし警察へつかまつたつてことがはつきり分つたら、松本の方へさういつてやつて、あちらへ引取つてもらつたらいい、ぢやないの」

「さうね。さういふ手はあるわね」

「さういふ手もかういふ手もあつたもんぢやないわよ。お前さんだつてどうせ預る時にや、それくらゐな覺悟はきめてたんだらう。頼りない人だねえ」

「い、え、そりやまさかの場合には何とでもする氣でゐただけで、かうやつてひとつ釜の御飯をたべてみると、あの娘さんがいかにもい、んでねえ。私ももうすつかり人情がうつツちやつたのよ。そいだもんだから何んだか、そこに變なものが出来ちやつてねえ」

「そんなら猶更ぢやないか。これが手癖でもわるくつてさ、もてあましてるつてんなら、話は分るけど、そんな好きなものをいざこざいふとこはないぢやないの。こんなことで多少お金をつかつても、そりや仕方がないわよ。だから氣を大きくもつてりや、それでい、ぢやないの」

さういはれると、市丸は何んだか氣がつよくなつてくるのであつた。女將も話しずきなので、もう歸るかへるといつてゐながら、到頭十二時すぎまで話し込んでしまつた。

流れ星

それから四五日たつた或る晩、市丸が赤坂のある家へ遠出でいつてゐると、そこへおみねから電話がかゝつてきた。電話口へ出てみると、おみねはひどくあわて返つてゐて、

「あの、姐さんですか。どうもお呼びたてして相済みません、實はね、今何んですか、

松本の尾澤屋さんの旦那だとか仰有つて、お人がみえてるんですがねえ、どういたませう。何んでも至急にお眼にかゝつてお話しし度いことがあるつて仰有つてるんですけど……」

市丸は敬之助の兄の敬一郎がきつと貞子の話でやつてきたのだらうとさう思つたので、ぎくりとしながら、

「まあ、さう。そりや困つたわね。そんなら私大急ぎで此方をいたゞいてかへるからね、ちよつと待つて、もらつてくれない。あ、それよりもね、ちよつとお前金泉さんへ御案内してね、あすこで待つて、いたゞかうかしら。さう、それがいゝわね。さうしてくれない」

「はい、かしこまりました。そいぢや早速さういたしますから」

市丸は自分ひとりで逢つてもしへまなこともでもするといけなと思つて、金泉の女將に立ち會つてもらふことにした。何かむづかしい問題があると、彼女はいつもさうするのであつた。

その晩は十人ばかりのお客だつたので、中々もらへなかつたが、市丸は急に親戚のものが病氣になつたからとその場限りの嘘をついて、やつと歸してもらつた。早速お帳場で自動車をさういつてもらつて、それで浅草へ歸つていつたが、途々何かしら氣にかゝつて彼女はやたらと胸騒ぎがしてたまらなかつた。

金泉へいつてみると、敬一郎は二階の奥座敷へ通されて、たつたひとりでほつねんとしてゐた。市丸も浅間にある時分時々逢つてゐるので、古馴染みの一人であつた。しかし彼は弟の敬之助と違つて、妙に偏窟な男で、別に女道楽なぞをするでもなく、間さへあるとむづかしい哲學の本なぞを讀んでゐるやうな男であつた。敬之助よりも八つも年上なので、逢つてみると、頭は半分白髪になつて、變に顔違ひがしてゐた。ひととほり挨拶がすむと、市丸は女將にも上つてもらつて、一應敬一郎の話を聞いた。敬一郎がいふのには、弟からもあれから度々手紙が來て、どうしても三百五十圓ほどの金を融通してくれなければ、自分は生きてゐられないからといつてくるのだが、併し此頃は店も辛い一方で、それに昨年から生糸の相場もがた落ちがしてゐるし、

繭もわづか五分の一といふ馬鹿な暴落のしかたで、どうにも切りぬけやうがないので、そんな金の餘裕が出来る筈もないのである。敬之助が勤めてゐる先とは別に取引き關係もないのであるが、心配になるから實は昨日出京してきて、いろいろ先方とも妥協の方法を講じてみたが、どうもうまくいかない。そこで此方の問屋からやつと百五十圓だけ借りて、それを先方へ支拂つて、あとはまあこの月うちに何んとかするからといふことで、實は今曲りなりにも解決をつけて來たところだといふのであつた。

市丸もそれを聞くとほつとして、

「まあ、そりやどうもお骨折りでしたわねえ。でもお話しがついて何よりですわ。私も此間からとても心配になりましたねえ。もしうまくいかないで警察へでも連れてかれておしまひなすつたんぢやないかと思ひまして、おかみさんともいひくらししてましたんですわ」

「いや、どうもあんたにも大變に御迷惑をかけて、申譯もありません。先方ではもう警察へも届出てをるんで、全く始末にいかなかつたんですよ。でも此方の問屋の丸菱

の支配人さんが保證をして下すつたんで、やつとまあ話がついてねえ。何にしる尾澤屋も僅か三百五十圓の金さへ自由にならんですから、もうどだい話にならんですよ。ところで、今日お話伺つたのは、他のことでもないが、むろんあんたは敬之助の居處を御存知でせうなあ」

「さあ、それが私、うつかりしてゐて、知らないんですの」

「へえ、そりや困つたなあ。實は私も昨日から方々をさがしとるんですが、まるで分らんのですよ、ですからいろいろな交渉も私一人でやらんならんで、猶此方が不利益になつてしまふんですよ」と、いつて、懐から大きなシースを出して、その中から幾通かの手紙を餉臺のうへ、ぬきだしながら、「いつも手紙をよこす時には、この通り阿佐ヶ谷の居處からよこしてをるんで、昨日も私、そこへいつてみたんですよ。ところがもう一月も前にこの家は開け渡してしまつたさうで引越し先はさつぱり分らんのですな。さういへば、處は阿佐ヶ谷としてあるが、これこの通り、スタンプは本郷になつてゐたり、澁谷になつてゐたり、方々から投函してをるらしいんですな」

「まあ、ほんとにねえ。此間私の家へゐらしつた時にも、初めは朝鮮へとかるらつしやるつてさういつてましたけど、あとではもし出来ることならこの東京うちに隠れてたいつてさう仰有つてたんですわ。ですから東京うちにゐらつしやることは確かですわね。この八日にお出しになつたお手紙は、淺草としてありますわね。八日つていへば、つひ五日ほど前ですわねえ」

「どうも困つたなあ。居處が分れば、先方と妥協のついた話もして、安心させてやり度いんですが、あんたが知らないとなると、私ぢや見當のつけやうがありませんからなあ」

「さうですわねえ。困りましたわねえ。あちらだつて早く安心なさり度いでせうから、あなたのところへはほんたうの居處をおしらせにならなけりやならないと思ひますけどねえ」

「いや、もう初めつからこの話はどうも變なんですよ。何にか他にもいろんな事情があるんですな。私はさう睨んでをるんですよ。今度のつかひ込み事件だつて、何か女

のためにあんな不始末をしでかしたらしいですものなあ」

「さうですかねえ。さう仰有れば貞子さんのお話しなんか伺つてみても、何かあるらしいのは、私も實は感づいてゐるんですけど、でも相手は素人さんだつていふぢやないんですの」

「さあ、私はもう六七年來一切彼奴の行動には關係せんことにしてをるので、まるで何も知らんですよ。いろいろ聞くと不愉快ですからなあ。今度のことだつて私、いつそ放棄つておかうかと思つたんですけど、警察沙汰にでもなると、あとが困ると思つたもんですからね。それで到頭一杯くつちやつたですよ。ほんとに仕様のない奴だ。大阪以來もうこれで家へ迷惑をかけるのは、七八回にもなるんですからなあ」

市丸も唯笑つてみせるより他はないので、膝のうへで手帛をもてあそびながら、

「あの、それであなた、貞子ちゃんにはお逢ひになつて下さいましたの」と、話をそらす。

敬一郎は急に苦々しい顔になつて、

「いや、一體あの子をあんたのところへ預けるなんちふのが、既に私には腹が立つのですよ。第一あの子を今更あんたに引合はせられた義理ですか」

市丸は腑に落ちないので、

「でも、若旦那もよくよくお困りになつたからなんですわ。それはどうかわるく思はないで下さいましな。私、ほんとに貞子ちゃんがお可哀想だと思つたもんですから、お預りしましたのよ」

「いや、自體あの子は貞子といふんぢやないんですよ。ほんたうの名はお糸といふんです。あなた知らないんですか」

「まあ、ぢやいつ頃お名前をおかへになつたんですの」

敬一郎は呆れたやうな顔をして市丸の眼のところをみてるたが、やがて苦笑ひをし

て、
「いや、それでやつと分りましたよ。ぢやあんたは、何んにも知らないんですね。どうもさつきから妹さん、妹さんといはれるんで私も變だと思つてたんですが、あ

りやあんた、私の妹でも何んでもないんですよ。妹の貞子はあんたが東京へ出られると間もなく亡くなりましたしてねえ。今あんたのところへ御厄介になつてゐるのは、ほら、あの淺間にあるた春次ね、あの春次と弟の間に出來た子なんですよ」

市丸はそれを聞くと、

「えッ」と、いつて、顔色をかへてしまつた。

敬一郎は氣の毒さうに笑ひながら、

「それでね、實は春次の方から變な三百代言のやうなものを向けてやかましくいつて來たんで、亡つた父が自分で引取つて、店の三造といふ番頭の家で育てさせたんですよ。それを父の葬式の時、敬之助が松本へ歸つてきて、一緒に連れていつた譯なんです。ですから第一妹の貞子とは年も三つばかり違ふし、顔だつてまるで似てるやしませんよ」

市丸はさういはれるとさすがにあいた口がふさがらなかつた。

しかし今更そんなことで氣持ちを悪くしてはじまらないので、敬一郎に今後のこ

とを相談すると、敬一郎も始末に困つたやうな顔で、
 「どうも甚だあんたにはお氣の毒ですが、今更あの子を松本の方へ引取るつていふ譯
 にもいかんですから、敬之助が迎ひにすればよし、もしさうでなかつたら、私が戸籍
 の方は何んとでもしますから、何處かの藝者屋へ下地ツ子にでも賣つてもらふんす
 な。無残なやうですが、しかしもとく春次の子なんだから、さういふ運命に落ちる
 のも不自然ぢやないでせう」

さういはれると、市丸も女將もどうにもしやうがなかつた。

敬一郎は晩の十時四十五分の列車で松本へ歸るといふので、二人はそれを引留めて
 どうするといふ譯にもいかないので、到頭はつきりした話はきめずにそのまゝ別れて
 しまつたのであつた。

市丸が家へ歸つてくると、もう貞子は奥の六疊で何事も知らずに、ぐツすり寝てる
 たが、市丸はそつとその顔をのぞきにいつた。市丸は何かなしにぞツとして、いつま
 でもその顔を見守つてゐることが出来なかつたのであつた。

噴煙の果

丁度去年の十一月の末であつた。大島の三原山に於て頗る奇抜な方法で噴火口へ投
 身自殺を遂げた青年があるのだが、その當時の新聞も別に大した記事にもしなかつた
 ので、恐らく讀者諸君も御存知なからうと思ふ。それが例の敬之助であつたのだが、
 それを知つてゐるのは、市丸と金泉の女將と私だけであらう。

それは十一月の二十七日の午後のことであつた。三原山の噴火口に近い火口茶屋へ
 一人の青年が他の見物人と一緒にこのこ上つて來たが、その男はボータブルの眞新
 らしい蓄音器を一臺提けてゐた。大島にしても肌寒いこの時候に、麻の夏洋服を着て、
 鳥打帽をかぶつて、いかにも疲れたやうな恰好で登つてきたが、茶屋へつくと、正宗
 の塩詰を命じて、それをさもうまさうに飲みだした。

その日は海も山も暴れてゐて、殊に例の火口原の附近は雲とガスに覆はれて眞面に
 は歩けないやうな荒天だつたので、見物人もほんの數へるほどしかなかつた。そこで

その男はさも楽しさうに蓄音器をかけて、しきりにちびりちびり飲んでゐた。茶屋の主人も變つた男だとは思つたが、大勢の見物人の中にはいろいろ珍種もあるので別に氣にもとめなかつた。此頃ではポーターブルの機械をもつてやつて来て、火口原のあのひろびろとした沙漠でダンスなどをしてはねつかへるお嬢さんなども珍らしいくないので、茶屋の人達も別に驚かなかつた。

その男は何枚も何枚もレコードをかけて聞いてゐるたが、それは市丸のものばかりであつた。茶屋の主人も退屈まぎれに話をしかけて、

「あなた、市丸さんのものばかりやつておいで、すが、他のはないんですか」と、からかひ半分にいふと、その男は笑つて、

「いや、他のものももつてきたんですが、皆宿へおいて來ちやつたんですよ。僕はね、妙な性分で、この市丸といふ女の聲が一番好きなんです。もういつからか三原山の天頂でこれを聞き度いと思つてゐるんだが、こんな大暴れの日、かうやつて聞いてゐると又格別ですなあ」と、いつて、又盃をあける。よくみると、彼はもう兩方の眼

に一杯涙をためてゐるのであつた。

茶屋の主人も笑つて、

「いや、どうも變つたお道樂ですなあ。まあどうか御ゆつくり」と、いつて、奥へ入つていつてしまつた。

その男は約二時間ばかり休んでゐる間に、壘話を五本も平らけてしまつた。それでも別に酔つた風もないので、よく飲む男だと思つてゐると、彼は風の晴れ間をみて、

「あの、まことに恐入りますがね、僕ちよつと噴火口までいつて來ますから、どうかこの機械を預つておいてくれませんか。歸りにもつていきますから。あのそれからお勘定はいくらです」

勘定は五圓ばかりになるので、彼はそれをバラ錢で拂つて、そのまゝ、のこの茶屋を出ていつた。丁度その時學生の團體がのほつて來たので、茶屋ではまさかのこともあるまいと思つて出してやつたのだが、それが不覺であつた。

その男は學生達の群とあとになり先になりしながら火口へ近づいていつたが、火口

の縁へ達すると、とある岩のうへへどかりと腰を下ろした。

學生達はがやがやいひながらおづおづ火口をのぞいてるたが、途端に後の方で、なにか譯のわからない喚めき聲が聞えたかと思ふと、一人の男がハイハードルでもやるやうな意氣込みで、學生の群を突つきつて火口の方へ一散にかけてきた。そして駈けながら彼は帽子をとつて、にこにこ學生の方へ會釋をしたが、

「さあ、みてたまへ。飛び込むぞッ」とはつきり叫んだまゝ、火口の縁から濛々たる噴煙の中へふうわりと躍り込んだ。

「あッ」と思つた時にはもうその男の體は下から吹き上げてくる颯風にあふられて、麻の上着に顔を包まれながら、兩手をひろけたまゝで、千何百尺の火口底へ向けて礫のやうに墜落していつたのであつた。

その翌日、市丸のところへは、署名のない一通の手紙がとゞいた。それは敬之助の最後の遺書であつたが、しかしその手紙は可笑しいほどユーモアたっぷり書いてあつて、少しも悲しさうな氣振りはみえなかつた。

實はこゝにその全文をかゝりたいのだが、もう限られた紙數もつきるので、残念ながら内容だけをかいつまんでお話しすることにする。

敬之助は貞子を市丸のところへ預けるとその翌日から東京中を隠れて歩いてゐたのであつた。宿屋なぞへ泊る金もないし、又却つてそんなところへ出沒すると警察の眼が恐ろしいので多くは新市區の神社や寺なぞへ野宿をして歩いたのであつた。それでもやつぱり貞子のことや市丸のことが思ひ切れないので、分一松の前へも何度となく様子をみにやつて來たのであつた。

そのうちに約束の二十日もすぎたので、彼は店の名義を利用して、銀座の某蓄音器店からポータブルを一臺籠ぬけ詐偽をやり、それをもつて伊豆の大島へ渡つたのであつた。

「もう僕もいよいよ總勘定をつける日が來たから、店の方の問題などはどうでもよくなつてゐます。松本の兄にも三百五十圓といふ負擔力はなからうと思ふので、つまりあの問屋からモスなり、銘仙なりを買ふ小賣屋さんが結局僕のつかひ込みの穴を埋め

てくれることになるでせう。三原山の火口の中までは警官も入つて来られないでせうからね。唯心配になるのは、あの貞子です、貞子はあの通り可愛い子ですから、あなたも決して悪くはしてくれまいと思つてゐます。あなたに預けておけば、僕も安心して死ねます」

さう書いてゐながら、彼は貞子の身のうへについてはひと言も事實を語つてはゐなかつた。それから看護婦をしてゐるとかいふ陰の女のことについても、何も書き残してはゐなかつた。唯詐偽をしてきたボータブルの蓄音器はもう不用になつたから、改めて大島の警察から引取つてもらふやうに銀座の蓄音器店へ手紙を出したとさう書き添へてゐた。

市丸もその遺書を見ると、却つて敬之助の心情が可哀想になつて、泣けて泣けてしやうがなかつた。哀れッほいことを訴へられるよりも、やけのやん八になつて書いてゐるその手紙の方がはるかに悲しかつた。最期まで貞子のことが打明けられずゐるその心持ちにも、涙ぐましい何ものかゝあつた。

市丸はかうなると一層貞子が離せなかつた。たとへ憎い春次の子と分つてゐても、彼女はこのまゝ貞子を警察へ突き出すやうな無慈悲なことは出来なかつた。で、彼女は松本へ手紙をやつて敬一郎から貞子の戸籍をもらひ、改めて自分の家へ引取り、行くゆくは藝者に出すつもりで、養育してゐるのであつた。

此間も金泉でその話が出て、

「ねえ、おかあさん、私ね、いろいろ考へたんだけど、なまじつか家へおいとくと此方が甘えちやつて、いゝ藝者にやなるまいと思ふから、私いつそ松千代さんのところへ年季にやらうかと思つてんのよ。その方が當人のためですからね」

「それもいゝわね。私も此間からさう思つてゐたんだよ。松千代さんみたいなきつい人に育て、もらつたら、きつといゝ妓になるわ。さうなさいよ」

「そいで、私、出来るんなら來年の春から雛妓に出してやり度いんだけど、名前は何んとしませうね」

「そりやあんた、むろん春次とする方がいゝわよ。その方があんたの眞心がとほるわ。」

もしもとの春次さんて妓が生きてるとしたら、今度はその人の方が泣く番だわね」
私も端で聞いてるて、何んともいへない爽やかな人情味を感じたのであつた。

「そいで、あの貞子は春次つて妓に似てるのかね」と、訊くと、市丸はちよつと眼を伏せて、

「私ね、敬之助さんの兄さんから打明けた話を聞いた晩にね、家へ歸つてからしみじみ貞子ちゃんの寝顔をみたのよ。さうしたらね、その時にや、思ひなしか、春次さんにそつくりだと思つたんですけど、もう此頃ぢやまるでそんな氣はしませんわ。どうかすると、あゝ眉のところか春次さんに似てるなと思ふやうなこともありますが、やつぱりあの子には備はつた人徳があるんですわね。そんな時にだつて、私ちつとも厭な氣はしませんわ。唯もう私、可愛いくつてね。あの子ばかりは何んとかして、いい藝者にしてやり度いと思ふんですの。親に似ぬ鬼ツ子つてことをいひますけど、親の方が鬼なんだから、あの子はどうしたつて佛性なんですわねえ。今から考へると、尾澤屋の若旦那もわるい人ぢやありませんでしたわ。せめてあの子を私に預けて安心

して死んでゐらしただけでも、私、功德をしたと思ひますの。あの子をおいて別れてゐらつしやる時に、私、御兄妹にしちやね、あんまり情愛がありすぎると思つたんですけど、その筈ですわねえ、立派な親子なんですものね。私、三四日うちに熱海へいくんですけど、あすこから三原山の煙をみたらどんな氣がするだらうと思ひましてねえ。……」

市丸はもう泣かないといつてるながら、しまひには言葉をとぎらせてしまふのであつた。

(完)

須山小唄 [大正篇]

一

欄干らんかんから外そとを覗のぞいてみると、つひ眼めの下したは彼此かれこれ五十尺しやくもあらうかと思おもはれるやうな
斷崖だんがいになつてゐた。喜代香きよかはいつも雑巾ざふきんがけをしながらひよいと我われにもなく外そとへ顔かほを
出だしてみると、眼めがまはるやうな恐おそろしい氣持きもちちに襲おそはれるのであつた。その斷崖だんがいの
裾すそには花隈川はなきがはの激流げきりうがまるで白布しろぬのを晒さらしてゐるやうに、ところどころ眞白まっしろな奔湍ほんたんをつ
くりながら滔々たうたうと流ながれてゐる。向岸むかふしは切ツ立たつたやうな前澤山まへざはやまの懸崖けんがいで、その中腹ちゆうふくの
ところを小和田こわだへ通かよふ國道こくどうがとほつてゐる。此間このあひだの大雨おほあめでもう紅葉もみぢもすつかり枯かれ落お
ちてしまつたので、險けしい山骨さんこつがあらはれて見えて、いかにも冬ふゆざれたもの寂さびしい
風景ふうけいであつた。それに今は半里程はんりぢやう川上かはかみの方ほうで、大きな水力電氣すゐりよくでんきのダムを築造ちくぞうしてゐる

ので時々ハツバをかける音がどかんどかんと聞えてくる。そのどよみは谷から谷へ響いて、とてももの凄いなって響いてきた。

喜代香は眉尻をふるふる慄はしながら、ほんやり向岸の方をみてゐた。二丁ばかり川下には、白ペンキで塗つた大きな鐵線橋がかゝつてゐて、そのうへを村の人らしいのが二人ほど傘をさして渡つてゐる。

一緒に雑巾がけをしてゐた朋輩の小糸は廊下の曲り角のところて手を休めて、「おや喜代香姐さん。又雨が降つてきたわよ。ほんとに厭なつちやうわねえ。」といふ。

喜代香も我に返つて、四邊を見廻しながら、「あらほんとねえ。どうしてこの頃はかう降つてばかしかるんだらう。」
「きつと八又池の天龍上人がわるさでもしてゐるんでせうよ。ほ、ほ、ほ。この雨は私きつと雪になると思ふは。これで二日も三日も降られりや世話はないわね。この不景氣に、それでなくたつてお客の足が止つてゐるのに、雪でもふりやもう此の温泉場

は問題ぢやないわよ。ほんとに笑ひごつちやないわ。」

前澤山の植林をした谷間には、雨の脚が煙のやうになつて動いていく。綿のやうな雲は、尾根から尾根へ足早に匍ひかゝつて、みてる間に、四邊は暗くなつてくる。山ひとつ向ふには、盤越線の隧道があるので、そつちからはその時、何とも云へない佗びしい汽笛の音が響いてきた。

喜代香は又雑巾をしほつて、そこいらを拭いて廻りながら、

「小糸さん。ほんとに此頃はどしたつていふんだらうねえ。そりや世間一般に景況がわるいのは分つてるが、こんなぢや暮れが思ひやられるわ。私も随分長い間藝者をしてるが、こゝのやうにお座敷の拭き掃除までさせるとこは初めてだわ。全く氣が利かない話ぢやないの。」

「といつて、あんた、住みかへをしようと思つたつて、借金がついてまはるから、全く首でも縊つて死ぬより他に仕様がないわ。今朝も新聞に殺人的不景氣なんて書いてあつたけど、新聞屋なんてうまいことをいふもんね。」

喜代香はやつと自分の持場だけ拭いてしまふと、大きな欠伸をひとつして、
 「ねえ、小糸さん。どうせ今夜もお茶を挽くに極つてるんだから、もうついでに雨戸
 も閉めちまはない。おうッ寒い。急に何んだか底冷えがして来たぢやないの。あんた
 のいふとほり今夜はきつと雪ね。」さういひながら、彼女は戸袋の方へ廻つて、そこか
 ら雨戸を一枚一枚繰り出した。小糸はそれをがらがら片端から閉めていつた。
 二人はやつと二階だけ形づけてしまふと、階下の水洗場へ下りてきて、そこで別湯
 になつてゐる温泉へ入つた。薄暗い電燈がしよんほり點つてゐる中で、肩まで温泉へ
 つかるとそれでもいくらか氣持ちが直つてきた。
 「ねえ、小糸さん。あんた、いつこ、へ来たんでしたかねえ。」と、喜代香は手拭でへ
 ろりと顔を洗ひながら訊く。

小糸も隅の方で鬢の下のところをさしごしやりながら、

「私、私はね、一昨年の九月に来たんだから、もう二年になるわね。」

「その前には、福島にゐるとかいつたわね。」

「え、さうよ。私、福島の花水樓つて家の内箱でゐたの。今から考へると、あの時分
 はとても御全盛だつたわね。私のやうなこんなお多福でも、月にや二百圓から稼いだ
 んですからね。」

「ほんとにねえ。私もその時分にやとてもよかつたわ。まるで夢のやうねえ。」

「姐さんは、その時分、何處にゐらしたの。宇都宮？」

「え、さう。私が磯原へ住み替へをしたのは、一昨年の八月だから、やつぱり二年に
 なるわねえ。ほんとに早いものねえ。私こ、へ来てからもうあんた、半年からになる
 わよ。」

「さうねえ。丁度あれは六月だつたから、もう半年ねえ、私今でも覚えてるわ。こ、
 の家のお帳場で、手見せをしたでせう。あの時に姐さん、松のみどりを弾いたわねえ。
 とつても達者なんで、私達吃驚しちやつたのよ。あの時分にや、友奴さんや、花香さ
 んや、綾千代さんなんかもゐて、こ、の家も随分賑やかだつたわねえ。」

「あの人達も、もう方々へ住み替へしちやつて、今頃はほんとに何處で何してゐるだ

らう。どうせこんな世の中になつちや、何處へいつたつてうまいことはないに極つて
るけど、やつぱりこんな晩にや思ひ出すわね。」

「でもね、友奴さんだけはとてもし、んですつてさ。あの今郡山でとても賣れてる
んですつて。いつかお客様がそんなことをいつてらしつたわ。」

「あ、そんな話を聞いたわねえ。誰れだつてよけりや、それに越したことはないわ。
こゝの家だつて、もうちつと何うにかしてりや、お客のない家ぢやないんだけどね
え。かういつちや何んだけど、つんまり引込み思案すぎるのねえ。八人もるた抱妓を
たつた三人きりにしちまふんだもの、世間體だつてよくないわ。」

「さうねえ。それにお女將さんがあんまり、人が好すぎるのね。まるで素人なんです
もの。あれぢや駄目だわ。」

二人よると、つひやつぱり家の陰口なぞがき、たくなるのであつた。

喜代香は流しへ出て、今度は脊中を洗ひながら、

「でもあんた、さう思はない。私ね、こんなことをしてゐたら、今に藝者なんてもの

は世の中からなくなつちまふんぢやないでせうか。この土地だつて、ほら、前のカッ
フエ・クロネコを御覽なさいよ。あすこはこの不景況に毎晩あの通り賑やかなんだも
のねえ。あんな異人みたいな女の方が時代に向くのね。この頃ぢや町の人までがいく
んだもの。昨夜もねえ、番頭さんが遊びにいつて、何んだかとても面白かつたつて
いふわ。あんなことをしてゐて、そりや遊ばせかたがうまいんですつてね。」

「そりや姐さん、どうせエロ一點張りなんですもの。あんな洋装をしてりや、どんな
ことだつて平氣で出来ますわ。蓄音機をががあやつて、譯の分らない踊りなんかや
つてりや、お客は喜ぶんですものね。私、淺猿しいと思ふわ。」

「そりやさうだけど、でもいつそあの方が氣樂でいゝかも知れないわね。私もならう
かしら。」

「いやアだ。姐さんほどの人が、そんなことをしちや勿體ないわ。あゝいふとこで稼
ぐ人は、體がよくなくちやあねえ。姐さんのやうに粹づくりぢや向かないわよ。ほゝ
ほゝ。」

「さうかしら、でも私、この頃随分肥つて来たわよ。これ御覽なさい。腕なんか太くなつたでせう。」喜代香はむつちりとした眞白な二の腕を湯槽の縁へのせてみせる。それは種痘のあとひとつない餅肌であつた。

小糸は笑つて、

「つまり苦勞がないからね。私なんざ、苦勞があつたつて、肥る一方なんだもの。私こそちいたらたつたの方が向くかも知れないわ。いつそお帳場へ頼んで、お茶を挽いてる晩にやカッフエへ出るんだわねえ。さうすりやお小遣ひ位とれるかも知れないわ。」

「ほ、ほ、ほ。全く世智辛くなつたわねえ。そんなことを考へるだけでももう駄目な證據よ。あらもう前ぢややつてるわ。あのレコード何んての。」

「あれ、あれは姐さん「唐人お吉」ぢやないの。駕籠でいくのはつてのよ。」

「あんた、よく知つてるわね。私も覺えやうと思ふんだけど文句が分らないんでね。」さういひながら、硝子窓から外をみると、もう山懐に抱かれた温泉町はいつの間

にか、寂しい夜になつてゐた。二人はやがて上り場で襟化粧だけして、藝者部屋へ歸つてきたがその時には、向ふのカッフエでは「君戀し」をやつてゐた。

二

その晩は、それでも不思議にお座敷が三つほどたてつけにかゝつてきた。いつにないことなので、小糸と春千代は元氣よく出ていつた。喜代香も橋際的美奈本といふ料理屋から名ざしでかゝつてきたので、支度をすますと、自分で三味線をもつて出懸けていつた。

お客といふのは、こゝから一里ばかり川下にある楠田といふ町の連中で、皆顔馴染の人ばかりであつた。何んでも馬市か何かの相談で、わざと寄合ひをこゝへ持ち出したきたのらしかつた。

喜代香は別に氣のおける客でもないの、いつものやうに樂につとめてゐた。併しかう客がないと、やつぱり誰れの顔を見ても懐かしいやうな氣持ちがするので、彼女

も何かと親切に相手になつてやつた。唯この手合は酒に酔ふと、やたらと安來節ばかり弾かせるので、それがやりきれなかつた。

終電車が十一時二十分なのでそれに間に合ふやうに皆は歸つていつた。喜代香も坂ひとつ下りればぢきななので、停車場まで送つていつてやつた。もうその時分には、雨が雪にかはつて、人通りのない坂道は一面に雪布をしいたやうに眞白になつてゐた。

中に二人ぐづぐづに酔つた客がゐる、これから喜代香のゐる龍田旅館へ引返して、もう一杯飲み直さうなぞといつて、しきりに煩くまはりついたが、喜代香は二人の懐合ひを知つてゐるので、それをやつと體よく外して、電車へ乗つけて、

「ぢや、左様なら、明日又ね。待つてゐるわよ。」なぞと色よい捨て臺詞をいつて到頭別れてしまつた。

喜代香はそれからたつた一人で又坂を上つて、龍田旅館の方へ歸つていつたが、その時彼方の街道の方で、ぶうツぶうツと二聲三聲警笛の音が聞えたので、吃驚してひよいとみると、霧のやうな雪にかき暮れた須山橋のうへを一臺の箱型の自動車、前

燈をぎらぎら輝かしながら此方へ渡つて来る。

どうせ今頃やつてくるからには、須山へ来るお客に相違ない。さう思ふと、何處の家へ落着く客とも知れないのに、喜代香は何んとなく氣持ちが明るくなつてくるのであつた。いづれにせよ、自動車でくるやうな客はきつと藝者をあけて騒いでくれるので、喜代香にしても座敷の数にはなるのであつた。

坂の中途のところへ立つてみると、その自動車はギアを入れて騒々しいエンジン音を谷中へ響かせながら坂を上つてくる。もう雪が二寸からつもつてゐるので、時々タイヤが滑るかして、車體は軽く右左に首をふつてゐた。

やつとのことで坂を上つて、そのまゝ町へ入つていくと、その自動車はやがて右から三軒目の龍田旅館の前ですうツと停つた。喜代香は「おや、家へきたお客だよ」と、さう思つて、自分も急ぎ足にとつと、そつちへ歩いていつた。

電信柱のところからみると、自動車から下りたのは、長いオーバーコートを着た會社員のやうな瘦せつほちの男であつた。無論顔見知りのない旅の客らしく、別に荷物

らしい荷物ももつてゐないやうであつた。もう一人鳥打帽を被つた三十五六の折襟服の男が後へ立つてゐるので、それも伴れかと思つてみてゐるとその男は自動車の運轉手であつた。

喜代香は傘を横ツちよにして、自動車の後から門を入つていつた。藝者部屋へいくのには、そこから石段を四五段下りて臺所口を左へ入るので、喜代香はそこで傘をつほめて、何の氣なしにひよいと上を向いてみた。と、その時、どうしたのか、鳥打帽を被つた運轉手は、その石段の下り口へ来て、さも怪訝さうに喜代香の方を覗き込んでゐる。こゝ、いらの運轉手なら、大概顔を知つてゐるのに、その男はまるで見知りのない顔であつた。

喜代香はそれでも軽く會釋をして、そのまゝ格子を開けて中へ上つてしまつた。

小糸も春千代もまだ歸つてゐなかつた。長火鉢のところには、下地ツ子のお豊といふのが、だらしない恰好をして小説本を讀んでゐるが、眠さうな聲で、
「お歸んなさい」と、いふ。

喜代香は手足が冷えて耐まらないので、長火鉢のそばへいつて坐りながら、
「ねえ、豊ちゃん。お前さん、すまないけど、一寸美奈本さんへいつて、私の箱をもらつて来てくれない」と、いふ。

お豊は小さな欠伸をしながら立上つて、横ツちよへ曲がつた銀杏返しを手で直しながらそのまゝ戸外へ出ていく。

戸外では自動車が歸つていくとみえて、騒々しいエンジンの音が又聞え出した。ヘッドライトが障子へさつさつと閃めいてゐるのをみると、そこいらで車を廻してゐるのらしかつた。

喜代香はもう今にも座敷がかゝつてくるかと思つて、長火鉢の前で煙草ばかり吸つてゐるが、一向その氣振もない。大概の客は上ると先づお風呂へ入つて、その間に酒の支度にかゝるので、座敷から女中が通して来る迄に三十分とはかゝらないのが例であつた。それなのに、四十分たつても向ふからは何の音沙汰もなかつた。

喜代香は何だか變に氣拔けがして、長火鉢へ炭なぞつぎたしたりしてゐると、そこ

へ廊下の方ではたばた足音がして、女中頭のおもとが入つてきた。

「おや、喜代香さん。なんだもう歸つてるの、今夜はお珍しくお出かけで、さぞお忙がしいでせう。ほ、ほ、ほ、ほ。」

喜代香も笑つて、

「あら、姐さん、ほんとに今夜は何うも變よ。小糸さんや春ちゃんもまだなんですつてね。家へもお客様が上つたんでせう。」

「え。何んだかね、遠方の方らしい人だけど、變に氣のつまるお客でね。何んでもお役所の方か何んかでせう。笑談ひとついはないで、むツつりしてらつしやるんで、どうにも取付き憎くつてね。お風呂はどうですつていへば、さアといつて考へ込んぢまひなさるし、お酒はつて訊くと、まあ、一本つけてもらうかな、それとも止さうか、かうなのさ。厭になつちやうわねえ。」

「まあ、そんなお客なの。私ね、きつとお座敷がか、つてくるだらうと思つて、實は着換へもしず待つてたのよ。そいぢや駄目ね。」

「ところがさ、今夜は何處まで變なんだか分らないのよ。あのお客様を送つて來た運轉手ね。あの人かね、もう今夜はこの雪ぢやとても歸れないから、ひと晩客にしてとめてくれつていふのよ。だからね、いつものやうに階下の六疊へ通したら、いふことがい、ぢやないの。僕は金なら少し位もつてるから、客並に扱つてくれ。送つて來たお客に聞えちや困るから、奥二階の座敷へ通してくれつてかうなのよ。でね、番頭さんも仕方がないから、今そつちへ通すと、今度は是非あなたに逢はしてくれつてかう來たのさ。」

「まあ、あの運轉手さんが？」

「それがね、あんた、一寸小肥りに肥つたとてい、男なのよ。何んでも郡山から來たんだつていふけど、一度もみたことのない人なのよ。さうしてね金がないと思はれるといやだからつて、十圓のお紙幣をお前さん二枚出してね、それを私に預けとくつていふんだもの。私困つちやつわ。」

さういはれてみると、喜代香も何んだか變な氣持ちがしてくるのであつた。さつき

自分が家へ歸つてきた時に、あの運轉手はしきりに自分の方を覗いてみてるた。その時にも妙だとは思つたが、さうやつて客になつて上られてみると、猶更唯ごとではなかつた。

「姐さん、運轉手だつて何んだつて、お金さへ拂やお客ですものね。ぢや私一つでもかせぎになるから出ますわ。」

「ほ、ほ、ほ。ほんたうさね、この不景氣にひとつだつて嫁ぎや、お帳場だつてよろこぶからね。きつとあの人、お前さんの後姿か何んかみて、岡惚れしちやつたのよ。でもいくら運轉手だつて、あんな男振りなら、お客にして構はないわ。お花さんなんか二度もみにいつたんだもの。ぢや喜代香さんすぐに來てね。」

喜代香はやがて一寸顔だけ直して、お豊のもつて歸つて來た三味線をもつて、裏梯子から、奥二階の方へ上つていつた。廊下へ出ると、ぞつと底冷えがして、喜代香も酒がさめかけてゐるので、思はず胴ふるひをしてしまった。

奥二階の十一番といふ座敷に灯がついてゐるので、喜代香はその前へいつて

「今晚は、此方ですか。」といひながら、すうつと障子を開けてみた。

と、中には餉臺を前にして、襦袢を着た男がしよんほり坐つてゐる、番の女中は銚子のかはりでも取りにいつたとみえて、そこには誰れもゐなかつた。

喜代香は一足座敷へ入ると、その時、どうしたのか、悸乎として足がすくんでしまつた。彼女はまさかと思つて、もう一度その男の顔を見たが、何んだか頭がぐらぐらツとして、「あら、あんた、清さん！」と、叫んだつきり、そのまゝ、そこへ兩手をついてしまつた。

男も大きな眼をみはつて、じろじろ喜代香の方をみてるたが、やがてさも嬉れしきうににいつと笑み崩れて、

「やあ、やつぱり君だつたねえ。お八重さん、しばらく。」といふ。

喜代香はひと膝を餉臺の方へ居坐り寄つて、

「ほんとに清さん、私、誰れかと思つたわ。まさか私、あなたがねえ。」と、いつて、兩方の眼に一杯涙をためながら「ほんたうにどうしたつていふんだらう。今頃あなた

がねえ。一體あなた、何うして、こんな處へ來たの。それが私……」
 「いや、お八重さん、何うしても、かうしてもないさ。僕はもうこの二年の間、君の行方をさがしぬいてゐたんだ。ほんとにこんなところで、だしぬけに逢へたんで、僕まるで夢でもみてるやうな氣がしてならないんだよ。まあ、何はともあれ、無事でゐてくれて、僕あ、こんな嬉しいことはないんだ。」と、いつて、男もほろほろ涙をこぼすのであつた。

喜代香は下唇をかんで、やつと涙を押し耐へてゐた。彼女は嬉しいよりも、何んだか怖い方が先へたつたのであつた。

三

この雪の降る夜更けに、忽如として須山温泉へ現はれてきた清さんといふこの自動車の運轉手は、喜代香にとつては切つても切れない因縁のある男なのであつた。

清さんは、丁度今から二年前、この喜代香が宇都宮の土地を賣つて旅の女になるまでは、八幡町で、大きなギャレーヂを経営してゐた土地きつての車輛主なのであつた。もともと清さんの家は、先代からのもの持ちで、宇都宮では誰れでも知つてゐるやうな家柄であつたが、清さんが應慶大學へ入つてゐる間に、自動車に凝つて、到頭そのために中途退學をしてしまつたので、親達も、そんなに好きなものならといふので、彼だけ分家して、ギャレーヂを持たせたのであつた。その時分にしては珍らしい、シボレーの新型の車を十臺もおいて、清さんは随分手広く商賣をしてゐた。主に花柳界が常得意なので、一體が派手で、ひとしきりは驚くほど儲けもしたのであつた。

清さんは學生時代から男振りがよかつたので、町でも娘達の噂の種になつてゐた。ところが彼はどうしたものか、さうした氣は少しもなくて、子供のときから機械ばかりいぢつてゐた。初めは寫眞、それから自轉車、その次がモウターいぢりといふ風に、漸次と手があがつて、到頭自動車で落着いた譯であつた。ギャレーヂをもつてからは、一時飛行機にもこつてゐたが、それだけはたつた一人の母親が泣いて止めたので、やつとあきらめたのであつた。

喜代香もその時分は丁度二十一で、東京の下谷から宇都宮へ住み替へしてきたばかりであつた。彼女も長唄と踊りが得意で、土地の若手の中でも賣妓の一人であつた。鹿沼の製麻會社の大株主である鈴木榮助といふ金持ちが旦那で、その時分は可成榮耀榮華もしつくりしてゐたのであつた。

清さんと喜代香とを結びつけたのは、自動車屋の同業組合であつた。その頃、組合も景氣がよかつたので、何かといふと土地の八百駒といふ料理屋で寄り合ひをやつた、その時にはいつも喜代香が招ばれるので、彼女もいつとはなく清さんと馴染になつてしまつた譯であつた。それでも二人の間には別にどうといふこともなく、唯平の客として逢つてゐたのであつた。喜代香の方では、組合でも羽振りのいい、清さんのことではあるし、若い妓達が皆何の彼のといつて騒ぐので、いつも大事にはつとめてゐた。

そのうちに或夏のこと、組合では鬼怒川温泉で納涼會をやることになつた。その時には郡部の方の得意先も招待したので、總勢七十人ばかりの大連であつた。喜代香

も無論お約束で、前の日の午過ぎから役員達と一緒に、仙勝館へいつてゐた。

宴會は晩の七時から初まつた。組合長の演説があつたり、支部長の挨拶があつたりしたので、座が寛ぐまでに可成り時間がかつた。さういふことの嫌ひな清さんは、もう馬鹿々々しくなつて、じり／＼してゐた。そこへ鹿沼の支部のもので、清さんの店から中古のシボレーを買つた久能木といふ男が盃をもつてやつて来て、これが又鹿爪らしいことをいつて、盃のやりとりを初めた。

この久能木といふ男は平常から酒癖のわるい男なので、清さんもい、加減にあしらつてゐた。そのうちに漸次酒が廻つてくると、その久能木は、清さんの店のトリツクに引懸つて馬鹿高い品を買つたなぞとかういふ客席ではいへどものをいつて、變につつかつて来た。それは實際根も葉もないことで、酔つばらひの常として、つまり柄のないところへ柄をすけてクダを巻き出したのであつた。

若旦那育ちの清さんは、さういふことに耐られるほど商人になりきつてゐなかつた。それでも初めのうちは相手にするがものもないと思つて、我慢してゐたが、その

うちにあんまり云ひつのであるので、清さんもさすがに腹を立て、二言三言云ひ争つたかと思ふと、いきなり立ち上つて、學校時代に仕込んだ柔道の手でその久能木を杯盤のうへへ投げ倒してしまつた。久能木は破れた燭徳利で、額に怪我をして、血まぶれになるやうな騒ぎになつてしまつた。

同業者の間にも、清さんに對してさういふ感情をもつてゐるものばかりはゐなかつた。清さんの店が繁昌してゐるのを兼ねてからやつかんでゐるやうな仲間もゐた。そこで會場は二派に分れて、口論に花がさいて來た。

喜代香はそれをみると、とにかく清さんがゐるでは喧嘩が大きくなると思つたので、氣を利かして彼を階下へ連れていつた。清さんは中々いふことを聞かなくて今夜はどうあつても皆の前で黒白を分けてけじめをつけるなぞといきまいて手におへなかつた。喜代香はこのうへ又血をみるやうなことがあつては、清さんの方が不利益になると思つたので、やつと宥めて、

「ねえ、あなた、幸ひ車が來てゐるんですから、あれへ乗つて、今夜はこのまゝ、宇都

宮へお歸んなさいよ。あなたが酔つてゐらつしやらなけりやい、けど、あなたゞつて今日は相當召飲つてゐるんですもの。私のいふことを素直に聞いてさ、とにかく車にお乗んなさいよ。」と、いつて、宿の前へ來てゐる清さんの店の車へ、彼を無理矢理にのせて、運轉手に早くこゝを引揚げるやうにと耳打ちをした。

二階では清さんを遁がしたのを知つて、四五人の氣の早い連中ががやがや云ひながら階下へ下りて來た。

その權幕が物凄いのので、喜代香もこれは事が面倒になると思つて、自分もつひその車へのつてしまつた。

清さんは今市までくると、やつと少し酒が醒めて

「やあ、喜代香、ほんとに今夜は君には氣の毒をしたなあ。つひどうも蟲のゐるどろがわるかつたもんだから。」なぞといつて、しきりに詫びるのであつた。

喜代香は笑つて、

「ほゝゝゝ。そんなこともう何うだつていゝぢやないの。唯ね、私、あんな田舎の支

部の人なんか正面きつて渡り合つちや、あなたのお店の顔にかゝはると思つてね。私、出過ぎた仕方だつたかも知れないけど、あなたを遁がしてあげたのよ。どうせ酒がさめりや何んでもないことなんでせうけど、あのまゝあんたが彼處に被居りや、きつと喧嘩に花が咲いてどんなことになるか知れせんわ。」

「うむ、氣の荒い連中が多いんだからねえ。併しそれにしても、この尻はわるくすると君のところへいくね。僕もどうも少々若氣の至りだつたなあ。もう一寸我慢してりやよかつたんだが……」

「いゝえ、そりやあなた、當りまへよ。傍で聞いてる方も澤山あるんですからね。誰れだつてあゝしつツこく云はれりや腹がたちますわよ。田舎の人つてほんとに愚痴なもんね。」

清さんは兩腕を組んでじいツと考へ込んでるたが、やがて何んと思つたか、自分でも腹を極めたやうに、

「ねえ、喜代香さん。君にや迷惑かも知れないけど、これから日光へでもいつて、今夜ひと晩ずらからないか。これから宇都宮へ歸つたら、又電話がかゝつて來たり何かして、とても煩いだらうと思ふんだ。だからね、僕、今夜はどうあつても、行方を晦ます必要があると思ふんだ。」

さういはれ、ばそれも尤もであつた。いづれあゝいつた手輩のことであるから、あのまゝで濟む筈はない。宇都宮へ電話をかけてもう一度清さん呼び戻せとか何んとか煩いに相違ない。さうなると又面倒なので、今夜何處かへずらかるのも一つの方法だつた。併し喜代香にしてみれば、旦那持ちの體である。清さんとたつた二人で、身を隠してはあとの噂が煩い。いくら長い馴染みであるとは云へ、もしものことがあつたら土地で顔がつぶれると思つて、それが恐かつたのであつた。

清さんはどういつても何うしても聞かなかつた。で、喜代香も何うにも出來なくなつて到頭それから日光へ廻つて、いつもよくいく杉本といふ旅館へ車をつけさせた。その晩、どうした、拍子だつたか、喜代香はいつもの彼女にも似氣なく、ふらふらツと清さんと浮氣をしてしまつたのであつた。尤も彼女も大分飲んだので、可成酔つ

てもゐた。たつた二人で對向ひになつてみると、何んだか彼女はとうから清さんに岡惚れしてゐたやうな氣持ちもしてくる。岡惚れしてゐたのが、妙に内向してしまつて、兩方ともに手も足も出ないやうな形になつてゐるやうにも思へて來た。さうしたことからつひも後へ退けなくなつてしまつた。

同業者組合の方のごたごたはそれから三四日たつて、警察の署長の口き、で、やつとうまくをさまりはしたが、納まらないのは喜代香の方であつた。清さんとひと晩雲隠れをしたことが旦那にばれたので、早速手切れが云ひ渡された。併しもうその時分には、喜代香も覺悟をきめてゐたので、別に未練もなかつた。彼女は二度三度と逢瀬が重なるうちに、もう全く清さんとは別れられないやうなところまで踏み込んでしまつてゐた。

清さんは随分道樂もした方だが、まだ何處かに坊ッちゃんらしい初心なところが残つてゐて、そこが却つて喜代香をぐいツと引つけたのであつた。それに年は若いし、男前はいいし、彼のものになつてみると、喜代香は實際、年寄つたものと旦那なぞとは比べものにならないほど面白かつた。打込めば打込むほど彼女には味が出てきた。彼女は商賣に出てからこんなに一人の男に夢中になつたのは、初めてであつた。

四

清さんには喜代香より二つうへのおかみさんがあつた。それに今年三つになる可愛い、おすみちゃんといふ娘もあつた。それが喜代香には惱みの種であつた。自分が深くなればなるほど彼女としてはおかみさんや、おすみちゃんが可哀想で耐らなかつた。そんなものはどうなつたつて構ふものかと思ふことはないではなかつたが、いろいろな噂を耳にすると又どうにも氣の毒で耐らなくなつてくる。彼女は一體がさういつた性格の女なのであつた。

清さんはもう無我夢中で、殆んど家の方は明けどうしで、店も人に任せたつきりになつてしまつた。喜代香もさうなると末が思はれるので、幾度か泣いて忠告もした。しかしもうさうまでになると、眼のさめる清さんではなかつた。彼は自分の情熱の動

くがまゝに流れていくといつたやうな若旦那氣質が何うしても抜けなかつた。おかみさんのお芳さんは本家のお母さんとの間へ夾つて、血の出るやうな苦勞をした。あんなにあつた財産も漸次と左前になつていくし、店の方は日一日に商賣が落ちてくるのでお芳さんはもう何うにも仕様がなくなつて、或晩のことわざわざ喜代香を米本といふ小さな鳥屋へよんで、たつた二人つきりで打明け話をした。喜代香もしみじみとしたお芳さんの言葉ですつかり感激して、二人は手を取合つて泣いたのであつた。それは小春治兵衛とそつくりの話であつた。

喜代香はそれから間もなく、自分は決心をきめて、こつそり磯原へ住み換へをしてしまつたのであつた。それも尋常一様の手段では到底別れられないと思つたので、態と清さんには何んにも云はずに、長唄の師匠の追善があるので一寸東京へいつてくるからとさういつて、そのまゝ姿をかくしてしまつたのであつた。

磯原へ来てからは、何ともいひやうのない悲しい日がつゞいた。遠く別れてみると、清さんが身を切るやうに戀しかつた。つまらない義理立てをして、こんな情ない

身になつたのが口惜しいと思ふ日もあつたが、併しさうなると、彼女はもう昔を今に返す由もなかつた。いつそこつそり手紙でもやつてと思つて、何遍か巻紙も出してみたが、それでは自分の義理がたゝなかつた。こんな遠くにある、月に一度やそこいら逢ふのなら、おかみさんだつて許しても呉れるだらう、さうも思つてみたが、どうにもその義理のしがらみを超えるだけの度胸が彼女にはなかつた。

そのうちに月日は夢のやうに過ぎ去つてしまつた。喜代香は磯原にもゐられなくなつて、そこから今度はこの須山温泉へ住かへをして來たのであつた。今でも彼女は決して清さんのことを忘れた譯ではないので、時々はもう一度どうかして宇都宮へ歸り度いと思ふこともあつたが、併しこゝまで落ちてくると今度は身についた借金がいふことを聞かなかつた。

喜代香はさうした清さんに、今夜思ひがけもなく出遇はしたのである。思ひがけなくといふよりも、全く神事のやうないきさつで逢つてしまつたのである。喜代香が夢かと疑ふのも全く無理はなかつた。

喜代香はしきりに涙ばかり拭きながら、

「ねえ、清さん、ほんとにあんた、どうしたの。どうしてこんなところへ被來つたの。それが私どうしても腑に落ちないのよ。」と、涙聲でいふ。

清さんも盃をおいて、

「いや、それはいろいろ話をしないと分らないが、實はね、僕も全く意外だつたんだよ。今日ね、偶然郡山の停車場で拾つたお客がね、これから須山温泉までいくらで乗せていくつていふもんだから、僕もね、初めての土地ぢやあるし、それに道程も分らないんで、口から出任せに五圓なら行きませうとかういつたんだ。ところがね、お客はそれでいけつていふんで、乗せて來たのさ。さうして君、こゝの家の門の前で車を止めて、客を下ろしてると、そこへ偶然通りかゝつたのが、君だ。どうもよく似た人だなあと思つて、僕はあんまり不思議なんではばらく様子を見てゐたんだが、どうみても君に違ひないんだ、そこでね、實は度胸をきめて、客にして貰つた譯なのさ。」

「道理で私も變だと思つたわ。こゝいらの運轉手さんなら、大概顔を知つてゐるのに、まるで馴染みのない人が、私をじろじろみてゐるんでせう。私、何んだか氣味がわるくなつてね、實は家へこつそり遁け込んでしまつたのよ。」

と、いつて、喜代香は寂しく笑ひながら清さんのさす盃を受けて、「それにしても、一體あんた、どうしてそんな郡山なんかになるたの。それが私にや猶ほ分らないわ。」

清さんはさういはれると眼をしばだたいて、

「分らないだらう。そりや分る譯はないさ。それを分つて貰ふためにや、長い話をしなけりやならないが、とにかく君、僕もこの二年の間に、この世の中のあらゆる苦勞はしつくしたといつていゝね。君がだしぬけに宇都宮から姿を隠してしまつてからつていふもの、僕はもう一時は全く氣狂ひだつたね。とても正氣の沙汰ぢやなかつた。」

「濟みません。私だつて、私だつて生きてゐる瀬はなかつたわ。」

「いや、そりやさうだらうけど、僕はあの時にやさうは思はなかつた。もう一途に君が恨めしくてね、何うかして居處をさがして、僕は君をピストルで撃ち殺してやらう

とさう思つてゐたんだ。その筈さ、僕は君がてつきり別に男をこしらへて遷けたものとさう思ひ込んでゐたんだからね。ところが君、家のお芳の奴がね、里へ歸るときに初めて打明けてかうかうだつて話してくれたんでね。」

「あら、ぢやあんたおかみさんと別れたの。どうしてさ。」

「いや、どうしてもかうしてもないさ。お芳の奴もすつかり體をわるくしちやつてねえ。實は肺がわるくなつたんで、里の方から引取りに來たのさ。」

「肺をね。尤も先からほつそりした粹な體つきの方でしたからね。そりやまあ、ほんとお氣の毒ね。そいで少しはい、方なの。」

「さあ、お芳にも僕ももうまる一年消息をしないからなあ。別れる時にや随分わかるかつたから、今頃はもうこの世にやるないかも知れないよ。」

「あら、そんなことをいふもんぢやないわ。一年たよりをしないなんて、あんたもほんとに薄情ね。それよりもおすみちやんはどうして。おかみさんと一緒なの。」

清さんは黙つて下を向いてゐるが、ごくりと生唾をのんで、

「おすみは、おすみは、疾うに死んぢやつたよ。」と、ぶつきらほうな調子でいふ。

喜代香は思はず餉臺のうへへ乗りだして、

「まあ、亡つたの。ほんと。……」

「うむ、君が宇都宮にゐなくなつてから、丁度三週間ばかり經つてからだ。僕がもう毎晩のやうに家を空けるもんだからとても君、あとを追つてね。「お父うちやん」「お父うちやん」ていつちや、泣くんだよ。そのうちにふつと熱を出してね。それがもとなつて、肺炎で、たつた三日ばかりでとられちやつたんだ。……」

「まあ、……」喜代香は二の句がつけないやうな顔をしてゐた。

清さんも耐らなくなつたか、男泣きに泣いて、

「それから、それから、僕はもう自棄になつちやつたんだ。店の方も到頭滅茶々にしちやつたし、持つてゐた車は片端から押へられちまふしね。それに君、お母までが中風でいつちやつたんで、もう僕あすつてんになつちまつたんだよ。そこでね、もういよいよ世の中に見限りをつける時がやつてきたと思つて、お芳を里へ預けると

すぐに、たつた一臺残つたシボレーへ乗つてさ。つまり自動車ルンペンだね。街道を町から町と流して歩いて、君の行方を捜して歩いたんだ。人の噂にきくと、何んでも水戸の方へいつたといふんで、僕は先づ水戸へいつてみたんだ。併しまるで雲をつかむやうな話で、さつぱり手づるもないんで、水戸から今度は助川、四ツ倉、小名の濱とかう流れ歩いて、實はつひ一月ばかり前に郡山へやつてきたのさ。」

喜代香は呆れて、

「ぢやあ、あんた、もう宇都宮にはお店も何にもないの。」

「うむ、何にもない。僕のもつてゐるのは、フォードの車が一臺つきりなんだ。宇都宮から乗つて出た奴は今年の春乗りつぶしちやつたんで、やつと工面をして今の車を手に入れたんだ。それこそ君、家財道具も何にもなしさ、唯車だけが身上なんだよ。」

「へえ、あなたがねえ。それで今郡山ちや何處かのお店へでも入つてゐるの。」

「あすこに平和タクシーつてのがあつたらう。あすこへ籍だけはおいてゐるのさ。つまり、ギャレーヂの屋根代だけ拂つて、あとは自前さ。辛いといへば、辛いが、併し

こゝまで落魄れると、結句乞食と同じで、呑氣でもあるよ。」

そこへ廊下の方で足音がしたので、清さんはふいと話をやめたが、入つてきたのは、女中頭のおもとであつた。

喜代香は涙を拭いて、

「姐さん、どうもすみません。私、銚子をいたゞきにいかうと思つてゐて……」

おもとは笑つて、

「いゝえさ。私ね、先刻から二度も三度もそこまで来たんだけど、あんまりしんみりした話らしいんで、お邪魔になるといけないと思つてね。ほゝゝゝゝゝ。」

「すみません。實はね、姐さんだからもう打明けてお話ししますが、この方はね、私が宇都宮で出てゐる時分に、大變にお世話になつた方なんですわ。二年ごしにひよつくらお眼にかゝつたもんですからねえ。」

さういつて喜代香は、清さんの身のうへをざつとかいつまんで話した。おもとも身につまされて、

「ぢや、いつかもうずつと先にあんたに聞いたあの方なのね、あんた、私に話したぢやないの。土地きつてのお家柄だとかつてさういつたのを、私まだ覚えてるわ。」

「あら、そんなこといつたかしら。どうも相済みません。」

喜代香はいくらか照れて、態と銚子を取り上げた。

五

その晩、喜代香は女中頭のおもとが心得てくれたので、久振りに清さんと一緒にひと夜を明かした。二人は寝る間も惜しいやうに、先から先と別れてからあとの話をした。ふと気がついて、雨戸のうへの明取りをみると、そこにはもういつの間にか、雪に明るんだ曉がほの白く催してゐた。

その翌朝は珍しく二尺からの積雪になつてゐた。前澤山の姿も昨日とは見違へるやうにかはつて、花隈川の激流はまるで繪のやうな美しい雪景色になつてゐた。

喜代香は臥床の中で慄へながら、

「とつても寒いわねえ。あんたこれぢやどうしたつて郡山までは歸れないわね。お客様はどうなさるんだらう。」

清さんも煙草を吸ひながら、

「さあ、昨夜のお客は實に變な人でねえ。車へのつてから、こゝへ来るまで殆んど口をきかないんだよ。さうかといつて景色をみる譯ぢやなし、かうやつて腕組みをして、何かしきりに考へてばかりるんだ。僕も何んだか氣味がわるくなつちやつてねえ。」

「さうですつてねえ。おもと姐さんもそんなことをいつてたわ。でもどうせ歸りにや又お伴をするんでせう。」

「歸りの約束はしてないんだが、併しとにかくこの雪ぢや駄目だよ。自動車なんてものはいくぢの無いもんでね。この山道で二尺も積つたら、第一スリッブしてどうにもならないからね。」

「スリッブつて何あに。機械がどうかなるの。」

「いや、スリッパつてのはね、タイヤが滑ることさ。さういふ時の用意に、鎖を巻くことになつてゐるんだけど。」

「あ、さうね。雪の日には、タイヤへ鎖を巻いてゐるわね。それでもやつぱし滑るときには滑るんでせう。危いわねえ。あんた、そんなのに、歸らないだつていゝぢやないの。私、歸し度くないわ。」

「僕だつて歸り度かないさ。折角二年振りて君をさがしてたんだものね。」

「だからもしお客様が歸るつていつたら、別の自動車をさういつて、歸しやいゝぢやないの。此の土地にだつて四五臺はあるんですからね。」

「うむ、この下にギャレーヂがあるね。昨夜この家の番頭さんに口をきいて貰つて、あそこへ僕の車を預けてきたんだよ。」

「あら、さう。額に傷のある怖い顔をした小父さんが来たでせう。あの人ね、去年の夏、ここから猪苗代の方へ出る街道で、山くづれへ乗り上げてね。とてもひどい怪我をしたんですのよ。」

「へえ。危いねえ。とにかく自動車の運轉手つていふ奴は、いゝ商賣ぢやないよ。僕ももう十年ぢかく乗つてゐるが、此頃ぢやそろく厭になつてきたね。他に何かいゝ商賣がありやいつても泥足を洗ひ度いね。しかし僕のやうなヤクザな人間は、他に能がないんだから情ないよ。はゝゝゝ。」

階下ではそろく女中達が起き出したとみえ、彼方此方を開ける物音が聞え出した。喜代香はすつかり冷え込んで、がたくく慄へが来て仕様がなかったので、清さんの手を握りながら、

「ねえ、あんた、一緒に温泉へ入らない。この温泉はとても温まるのよ。」

「さあ、入つてもいゝな。」

「どうせお客様は、一組つきりしかないんだから、香気なもんよ。お風呂で何んなことをしたつて平氣なんだもの。」

二人は床を離れて、そのまゝ浴場の方へ下りていかうとしたが、その時、階段の下からは番頭の定さんといふのが、何うしたのか、慌たゞしく上つてきて、

「お早う御座います。」と、清さんに挨拶をしながら、「ねえ、あなた一寸お顔を拜借し度いんですが。」と、唯ならぬ顔でいふ。

清さんも慥乎としたやうに眼ばかりぱちくりやりながら、廊下の隅へいつて二人は話をはじめたが、時々警察々々つていふ言葉がひそひそ聞えてくるので、喜代香も心配になつてそつちへいつてみた。

清さんは喜代香の顔をみると、さも困つたやうに、

「ねえ、お八重さん。君、今も話した昨夜のあのお客ね、あの人に何うしたのか、警察からツキが廻つてるんだつてさ。」

喜代香もぎくりツとして、

「へえ、何うしたつていふんだらう。何か筋のわるい人なんでせうか。」

定さんはそれを引取つて、

「さあ、それが何うも分らないんですがね、實はたつた今しがた、この先の島口の駐在所から電話がかゝつてきましたね。昨夜宿帳を出したこれ／＼のお客は、東京の方

から手が廻つてるから、そのつもりで、嚴重に注意しててくれつて、さういつて来たんですよ。島口からちや一寸三十分はかゝりますからね。もうぢきに警官がやつてくるだらうとは思ふんですけど……」

「いや、いづれにせよ、どうも變なお客だと思つたんですよ。荷物はひとつもなしさ、それにあなた、まるで口をきかないんですよからね。」

「家へ来てからもさういへばほんとに變でしたよ。何を聞いたつて、ろくに返事もしないんですからね。といつて盗賊をしさうな風體でもないし、心中ものにしちや相方がるないし、一體何をやらかしたんですかねえ。」

喜代香はもう一人で極めて、

「私きつと、費ひ込みだと思ふわ。昨夜ちらりと様子をみたんだけど、ありや會社か何かへ出てゐる人に違ひないわね。そいで勤め先のお金か何んか持ち逃げして、こんなところへ落ちて来たんだと思ふわ。私ね、下谷にゐる時分にも、やつぱしあんな人に出會したことがあるわ。そんな時にや、何んでも會社のお金を五千圓も持ち逃げして

ね、捕つた時にも百圓のお紙幣を一杯もつてましたわ。」

「さあ、費ひ込みにしちや、どうも昨夜の様子が少々腑に落ちないね。さういふ人はきまつて、藝妓か何んか揚げて馬鹿騒ぎをするもんだがね。そんなことでもしなけりや、良心が咎めてゐられないらしいんでねえ。」

さういつてゐるところへ、又階下からおもとがどうしたのか十能をもつたまゝ、血相をかへて上つて来て、

「定さん、定さん！」と、呼びながら、階段の中途から上を見上げて、

「定さん、あんた一寸来てよ。三番のお座敷の、三番のお客様が……」と、云ひかけ

て、あとは言葉がつかない。

定さんも眉をふるふるツと慄はして、そのまゝ階下へかけ下りていつて、おもと、何かさゝやき合ふと、二人はだしぬけにばたばた向ふへ駈けていつてしまつた。

清さんも喜代香も心配にはなつたが、さうかといつて、此方から出かけていく譯にもいかなないので、それなり浴場の方へ下りていつた。浴場には人影もないので、二人

は平氣で着物をぬいで熱い湯へとび込んだ。

「ほんとに何うしたつていふんだらうねえ。そんな變なお客をのつけるなんて、あんたも随分廻り合はせがわるいわね。」

と、喜代香がいふと、清さんは貸手拭で顔を洗ひながら、

「いや、どんなお客だつて、僕のためにや一生の恩人だよ。もし昨夜この須山へ送つて來なけりや、もう一生君には逢へなかつたかも知れないからねえ。」

「さういやあさうだけど……」

「唯何んだね、もし何かわるいことをしてお尋ねものにもなつてゐる人だと、一寸縁喜がわるいなあ。そんな人に引合はされたんぢや、未が思ひやられるね。」

「あら、そんなことないわ。どうせもうかうなりや私だつて別れられないのは覺悟してゐるんだもの。誰れに引合はされたつて同じよ。さうぢやない。」

「さあ、唯まあ氣持ちの問題だね。とにかく昨夜のお客は僕にとつちや有難い結びの神様だよ。僕あ一生恩に被るね。」

「あんた、その言葉を忘れないでね。いつまでもその氣でゐてくれると嬉しいんだけど、男つてほんとに浮氣なもんですからねえ。」

「おい、おい、逢つた翌朝からもう因縁がつくのかい。厭だなあ。それぢや約束が違やしないかね。」

「あら、御免なさい、私、さうぢやないんだけど、何んだか、心細くなつたのよ。」

二人はゆつくり温つてやつと上つた。喜代香は一度藝者部屋へ歸つて、化粧をしてそれから清さんの座敷へいくことにして、そのまゝ浴場の入口で別れた。藝者部屋へ歸つてみると、そこではもう上を下へ返して大騒ぎをしてゐる。寢呆け眼をした小糸や、春千代が寢間着のまゝ、火のない長火鉢のまはりへかたまつて何か大聲でがやがや饒舌つてゐた。

喜代香が入つていくと、小糸は待ちかまへてゐたやうに、

「あら、姐さん。お早う。姐さん、何うして。裏二階のお客が大變だつてぢやないの。」と、浴せかけるやうにいふ。

喜代香は自分の鏡臺の前へいつて坐りながら、

「大變で、どうしたの。警察から巡查さんが来て連れてつたんでせう。」

「あら、そんなどこぢやないわよ。私今、定さんに聞いたんだけど、毒をのんで自殺をしたんだつていふぢやないの。」

喜代香はあけかけてゐた化粧箱を膝のうへ、取落としながら、

「えッ自殺を？」

「あら、姐さん、まだ知らないの。呑氣ねえ。あのね、かうなんですつてさ。今朝ね、島口の警察からだしぬけに電話がかゝつてきてね。昨夜来たお客に一寸用があるからつてんで、お帳場でも吃驚してね、おもと姐さんがそつと裏二階のお座敷へ様子を見にいつたんですつてさ。さうしたらね、あのお客は臥床の中でもう冷たくなつてゐたんですつて。」

「あらまあ、厭だよ。ぢや死んでたの。」

「それがね、どうも血も何も出てゐないんで、毒薬でものんだんだらうつてことにな

つたんですつてさ。今巡査さんや、温泉の取締りの安田さんが来たりして、彼方ぢやとても大騒ぎをしてるわよ。」

喜代香はそれをきくと、どうしたのか急に胸騒ぎがしてきた。何かそんなことに關聯して、もしや清さんが懸り合ひにでもなると大變だとさう思つたのであつた。死んだ人は死んだ人でいゝとして、それよりも何の罪もない清さんが氣の毒であつた。このまゝ警察へでも引かれていくやうだつたら何うしよう、さう思ふと、もう彼女はるたゝまれなくなつて、着換へもそこそこに大急ぎで、又清さんの座敷へ上つていつた。

座敷には清さんはるなかつた。で、おづおづ裏二階の三番の座敷の方へいつてみると、そこには顔見知りのある年老つた矢野といふ巡査と、取締りの安田さんと、それから女將さんから、番頭の定さんまでが立重つて、縁端のところへ立つてゐた。ひよいとみると、清さんは次の間の衣桁の陰へ坐つて、何か巡査に取調べられてゐるらしかつた。

喜代香は足音を忍びながらそつと階段口から覗いてみたが、紙襖の彼方には、銘仙の夜具の裾がみえてゐるだけで、死んでゐる容の姿はどうしてもみえなかつた。

六

喜代香はほんやり清さんの座敷で待つてゐても仕様がなないので、又藝者部屋へ歸つて来た。皆は物見高い年頃なので、何度も何度も裏二階へ様子を見にいつたらしかつた。そこへお豊が息をきりながら歸つてきて、

「ねえ、姐さん。やつと私みて来ましたわ。あのね、表二階の八番のお座敷のね、裏のところの小窓があるでせう。あれを開けると、よくみえるわよ。皆が縁端へ立つてゐるんで、邪魔になるけど……」

「あら、あすこの小窓からみえて、死んでるお客も。」

「え、毛のもしやもしやした頭だけめえますわ。」

「あんた、ちびの癖に達者ねえ。春千代さんみにいかない。」

小糸はまるで祭の見世物でもみにいくやうないきだつた。皆がどやどや出ていつてしまふと、喜代香も坐つてゐられなくなつて、やがて自分も表二階へいつてみた。と、皆は八疊の次の間へ入つて、そこにある小さな窓の硝子戸を細目にあけて代るがはる覗いてゐる。喜代香もそこから伸び上つてのぞいてみたが、成る程、そこからだと、眞白に雪の積つた屋根を越えて裏二階の座敷が眞正面によくみえた。その間が五間ほどしか離れてゐないので、縁端に立つてゐる人達の顔が雪の照り返しで、變に蒼ざめてみえるのであつた。巡查が動く度に、座敷の眞中にいた夜具がみえて、髪の毛をもしやもしやにした死人の頭が、枕から半分すり落ちてゐるのがよくみえた。

「あのお客は洋服を着てるのねえ。あすこにほら、ズボンがかゝつてるわね。」とお豊がいつて、「あの、荷物も何ももつて來なかつたんですつてね。私、昨夜顔をみたわよ。脊丈のすんぐりした、金齒を入れた人だつたわよ。」

小糸は喜代香の方を向いて、

「姐さん、昨夜はあのお座敷ぢやなかつたんですつてね。ほんとによかつたわね。もしかあのお座敷へいつてりや、姐さんもあすこへ呼ばれて調べられるとこだつたのね。」

喜代香は今度は障子の陰になつて、清さんの顔がみえないので、何んだか心配で耐らなかつた。

それから一時間ばかりたつと、やつと取調べがすんだとみえて、清さんは眞蒼な顔をして、座敷へ歸つてきた。清さんはしきりに頭をふつて、

「あ、厭だ、厭だ。朝つばらから死人なんぞみせられて、縁喜でもない。おいお八重さん、あついのを一本つけて貰つてくれないか。」と、陰氣な眼つきをしていふ。

喜代香は帳場へいつて、銚子をさういつた。帳場もひどくごたごたしてゐて、まだ朝の支度もしてないので、喜代香は自分で爛をつけて、焼海苔と香のものをもらつて、それを二階へ運んだ。

清さんは立てつゞけて四五杯のんで、やつといくらかほつとしたやうに、

「やあ、どうもこの家もとんだかゝり合ひになつたもんだねえ。僕はまさかあの人が死なうとは思はなかつたよ。」

「ほんとねえ。一體何うしたつての。私その話を聞かうと思つて、楽しみにしてたのよ。何うして死んだんですの。」

「いや、それがね、まだ詳しいことはよく分らないんだが、警官がいふのにはだね。何んでもあの人は、東京の下谷あたりの病院へつとめてゐる助手なんださうだよ。それがね、看護婦と出来合つて、何かいさくさがあつたあけく、その女を絞殺してね。それで君、こゝへ高飛びをして来た譯なんださうだ。」

「へえ、ぢや人殺ろしをして来た人なのね。」

「當人の手帳にはね、合意のうへで心中をしたんだつて書残してあるんだが、東京の警察からは殺人犯として手配をして來てゐるんださうだ。かういふことは全く當人でなけりや分らないがね。」

「それであのお客は毒をのんだんですつて。」

「いや。のんだんぢやない。靜脈へ君、薬を注射して死んだんだよ。とても君、落着いてやつたものさ。ちつとも取亂しちやるないからね。あの様子でみるとよつほど女とは深い關係だつたらしいね。よつほど思ひ込まなけりや、あんな立派な死方は出来やしないよ。僕にも經驗があるがね。」

「あら、何うしてさ。あんたもそんなことをしたの。そんなことすばずば私の前でいつていゝの。」

「いや、それも君故さ。僕あどうしても君の行方が分らないんで、あれはさう、昨年の暮だつたなあ。白川の公園でいつそもう死んぢやはうと思つてね。何遍か首をやつてみたんだが、どうにも死ねなくてねえ。實際人間はいざとなると、中々思ふ通りにやいかなんだよ。」さういひながら、清さんはもう涙ぐんでくるのであつた。

喜代香も眼をしばたいて、

「又さう無暗に死なれちや、困つちやふわ。死ねないところに味があるのよ。でもあのお客だつてまさか死ぬ時になつて嘘もつかないでせうから、きつと心中なのよ。私

やさう思ひ度いわ。きつと何よ、女と心中してみたが、いざとなるとやつぱり一緒にや死ねなくて、たうとうこんな處まで落ちて來たのね。そこへいくと女は思ひ切りがいゝのね。あつさり死んぢまふんですものね。」

清さんはやたらと頭をふつて、

「いや、もうお八重さん、そんな話はよさうよ。朝つばらからとても氣が沈んぢやふからね。それよりも、僕どうしようなあ。今日はとても歸れないし……」

「だからこのまゝ居續けしちまひなさいよ。お勘定のことなんか、私が何うにだつてするわよ。」

「僕は、金はもつてるんだ。そんなことはどうだつていゝんだが、つまりこれから先のことさ。」

「先つて。」

「いや、僕はね、もうかうなつたら、せめて君のゐる土地へ一緒に住み度いんだが、それぢや君が困るだらうなあ。」

「あたしが何うして困るの。」

「だつて君、僕のやうなものがついてるぢや君も商賣がしにくかないかね。それが僕心配なのさ。」

「そんなことないわ。しにくゝつたつて、そこは私が何うにでもするわよ。私だつて始終あんたに逢つてられりや樂しみがあるんですもの。」

「さういつてくれると、僕も全く生き甲斐がある譯なんだが……併しね君、この土地ぢや僕の商賣は出來やしないやね。車持ちで稼いでも、とても食つちやいけさうもないね。」

「さうね、昔のやうな景氣なら何んだけど、今はね。ほんとにこゝいらはひどいのよ。とてもお話にならないんだもの。」

「さうすると、やつぱりこの土地にゐるつて譯にやいかないんだな。ふむ、……」と、清さんは思ひ餘つたやうに嘆息をついて、又盃を取り上げた。

障子の腰硝子からみると、戸外では又激しい横ふぶきになつて、向ふ岸の山の姿

も、橋の姿もまるで見えなくなつてしまつた。白い靄のやうな吹雪の底からは、花隈川の水音だけが滔々とひびきあがつてくるのであつた。

七

喜代香が龍田旅館から郡山の町へ住み替へして来たのは、それから二月ばかり経つてからであつた。あの變死事件があつてからは、龍田旅館も一層客が落ちて、もう何うにもやつていけないので、女將は最後に残つた三人の藝者も手放すことにしたのであつた。

小糸はそこから五里ばかりの奥の野々木といふ山間の町へ賣られていつた。そこはほんの小料理屋らしく、藝者といふよりも酌婦といつた方がいゝ位のものであつた。春千代は容色がわるいので、中々買手がつかず、喜代香が郡山へいくまでやつぱり龍田旅館の藝者部屋へごろごろしてゐた。

喜代香は郡山の松葉家といふ家と話は出来たが、それも極めてわるい條件で、全く

踏んだり蹴たりであつた。喜代香は出来ることなら分け位で出たかつたのだが、何にしろ此方には着物はなし、貫祿もないので、それこそほんの丸抱への、安ッほい藝者で出たのであつた。それも清さん故であつた。

その代り清さんとは毎日でも逢へた。清さんは花柳地から三丁ばかり離れた平和タクシーへ屋根借りをしてゐるので、割り合ひに樂な體であつた。一日に三度も出ればどうやら一人の口は養つていけるので、結局安氣であつた。それに町の病院の院長がひいきにしてくれるので、これが一番の上得意であつた。よく町から五里も三里もはなれたところへ往診をするので、それだけでもいゝ稼ぎになつた。

喜代香とは隣町の村田屋といふ小料理屋で逢つた。そこで逢ふ時には、いつも喜代香がたてひいてくれた。よんど金のない時には清さんのゐる狭い二階へ遊びにやつてくることもあつたが、やつぱり人の口が煩いので、成る可く二人は外で逢ふことにしてゐた。逢へば逢ふほど二人の仲は深くなつていくばかりであつた。

そのうちに喜代香にはひよつこりいゝ運が廻つてきて、町きつての醤油問屋の丸八

といふ店の若旦那がふつと彼女に熱を上げてきた。初めは冗談のやうにしてつきあつてゐたが、だんだん相手が本氣になつてくるので、喜代香の方が却つて恐くなつてきたのであつた。

丸八の若旦那は始終海月といふ待合へやつて来た。その女將は中々俠氣のある面白い女だつたので、喜代香の氏素性をきくと、ひと肌ぬいでくれるつもりで、いろいろ陰になり日向になり働いてくれた。喜代香の方ではさういふ客がついてくれれば、顔もよくなるし、従つて金まはりもよくなるので、嬉しいには嬉しかつたが、唯困るのは清さんのことであつた。

清さんも初めの間は聞き分けがよくて、

「いや、そりや君、君はさういふ稼業なんだもの。どうせ何う思つたつて、何うにもなりやしないんだから、まあ、精々稼ぐさ。」などといつてくれたが、體が以前のやうに勝手にならなくなると、清さんはそろそろ焦れだしてきた。もう身についてゐるものは車一臺だし、それに昔はあんなに榮耀にして育つて来た坊ッちゃんだけに、いざ

となるとつひやつぱり何糞ツといふやうな我儘な氣持ちが出てくるのであつた。

喜代香はいつもこつそり逢ふと、泣くやうにして、

「ねえ、あんた、もうしばらくのことなんだから、辛抱してくれない。私だつてそりや辛いよ。せめてね、自前にでもして貰つて、抱妓の二人ぐらゐも置けるやうになりや、私、もうあんたを家へ引取つて、決して苦勞はかけないだけだね。……」

「いや、もう僕あ、君の出世のお邪魔になるといけないから、思ひ切つて別れるよ。どうせ僕は自動車ルンペンなんだからね。流れながれて落ちゆく先はさ。いくらあせつても、あと五十年も六十年も生きられる娑婆ぢやなしさね、いつそ成るやうに成つたらそれでいゝんだらう。」

「またそれをいふ、私あんたにそんな口をきかれると、死ぬより辛いわ。あんただつて、慶應大學を卒業した人ぢやないの。自動車ルンペンなんて、あんた自慢にやらないわ。それよりもいつそもう泥足を洗つて、勤め人になつてくれると、私ほん

とに嬉れしいんだけどなあ。」

「は、は、は、は。客づきあひが高尚になつてくると、君も中々えらいことをいふね。勤め人か。それもよからう。併し僕あもう駄目だよ。乞食三日すりや、忘れられないからね。僕にやもうそんな高慢ちきな希望なんかこれッぱかしもないよ。」

「ほんとにあんた、この頃すつかり人柄が變つちやつたわねえ。私時々情なくなることがあるわ。昔のあんたを思ふと、まるで變つちやつたんだもの。」

「そりやその筈さ。僕あモダン雲助なんだからね、は、は、は、は。まあ、い、い、い、さ、今度逢ふまでに僕も決心をきめよう。僕だつて君に別れりや、氣持ちだけでも、樂になれるんだからね。いつまでも君にぶら下つて、君を苦しめてゐるのは實際罪な話さ。僕さへ思ひ切りや、君はどんどん出世していけるんだものね。女は全く徳だよ。」さういふ彼はもう眼が据つてゐた。

喜代香はもう泣くより他はないのであつた。

清さんだつて決してそんなことを本心からいつてゐる譯ではなかつた。彼は喜代香

に別れて、ギャレーヂの二階へ歸つてくると、いつものオイル臭い煎餅布團にもぐり込んで寝てみるが、どうしても眠れなかつた。來し方行末のことを思ふと清さんは泣けて泣けて仕様がなかつた。

清さんの胸には宇都宮時代のことが歸つてきた。十臺から車輛をもつて、手廣くやつてゐたあの時分には、全く世の中が明るくて無上に生き甲斐があつた。それから打續くあの家庭の煩累。それもこれもみんな自分の心柄からだと思ふと、ゐてもたつても耐らないやうな悔悟の切なさで心臓が絞られるやうであつた。

遠く過ぎ去つた日の夢はもう再び歸つては來なかつた。あの時はあゝであつた。あの時はかうであつたと思ひ出すと、息がつまるやうであつた。それから二年にあまる流浪の生活、それは清さんにとつては一生忘れられない悲しい日の連続であつた。戀しい喜代香の行方を尋ねて、彼は町から町を萍のやうに流浪してあるいたのであつた。母は死に、病妻には別れ、子供には死別れ、しかも家も何もまるでなくなつてしまつた彼は、實際もう喜代香一人がこの世の頼みの綱であつた。

「あゝ自分がわるかつた。今夜だつてあんなにまでいつて喜代香を泣かしてしまつたのは全く自分がわるかつた。もし今あの喜代香に捨てられでもしたら……」さう思つただけでも彼は身柱から水を浴びせかけられるやうにぞうツとしてくるのであつた。清さんはもう寝てゐられなくなつて、がばとはね起きると、そのまゝ又戸外へとびだしていつた。もう一度喜代香に逢つて、心から詫言をいはうと思つて、彼はとほと松葉家の方へ歩いていつた。寂しい夜更けの町には軒燈が紅く寒靄に浮んで、何處かで犬が吠えてゐた。その中を清さんはしくしく泣きながら歩いていつた。喜代香は先々と次の座敷へ廻るので、家にはゐなかつた。さうなると、今度は丸八の若旦那のことが俄かに氣になつてきて、つひ彼のよくいく海月へ廻るやうなことになる。清さんは海月の裏露路に佇んで、一時間も二時間も喜代香が歸るのを待ちつくしてゐるのであつた。もう曉の霜が白々と置く頃になつて彼は又夢遊病者のやうにギャレーヂへ歸つていくのであつた。

さうした夜が幾晩となくつゞいた。それでゐながら、喜代香に逢ふと、又つひ云争ひの花が咲いてしまふのであつた。

八

丸八の若旦那と喜代香の間は益々深くなつて、それから一月ばかり経つと、彼女は海月の女將の働きで、竹花家といふ自前の看板をもたせてもらふことになつた。彼女は抱妓も二人ほどかゝへて、もう相當にやつていける見込みもついたのであつた。さうなると、今度は清さんの方が却つて寄りつけなくなつてしまつた。喜代香の方では決して清さんを疎かにする譯ではなかつたが、つひ體が忙しいために、三度に一度は約束を破る。それが云争ひの種になつて、清さんは怒つて短刀を持出すやうなこゝとさへあつた。そんなことは今迄にはつひぞないことであつた。

或晩のこと、清さんは仙臺行きの列車がつく頃に、停車場で客待ちをしてゐると、可愛らしい女の子を連れられた夫婦連れの客が下車して来て、珍らしく須山温泉へやつて

くれといつた。

清さんもあれからは一度も須山へいかないので、何んだかひどく懐かしい氣持ちで、山の方へ向つた。二三日小雨がつゞいて、道の工合はあんまりよくなかつたので、注意に注意を重ねて運轉していつた。

その客といふのは、東京の商人らしく、細君の方は細りした病身らしい女であつた。バックミラーへうつる様子をみてるると、主人の方はとても子煩悩らしく、自分の膝のうへ、しつかりと娘をだきしめて、まるで甜めるやうにして愛撫してゐた。

その娘はやつと五つか六つぐらゐの丸ほちやな可愛盛りの子であつた。時々むつちりした手を出して、父親の耳を引張つたり、顎を打つたりして甘えついてゐた。

それをみてるると、清さんはいつになく死んだ娘のおすみのことを思ひ出した。生きてゐれば丁度あの年頃である。あんな可愛らしい子であつたから、今生きてゐたら、どんなに自分を慕ふであらう。そんなことはこれ迄あんまり考へたことはなかつたが、その晩は何んだかしきりにおすみのことが思ひ出されてならなかつた。さうい

へば、あのお芳も今頃は何うしてゐるであらう。あれからこゝ一年も消息がないのであるから、或ひはもうこの世の人ではないかも知れない。もう別れるといふ日に、涙で洗はれた蒼ざめた顔をしてすすぐと臺所口から出ていつたあの後姿が今でも焼きつくやうに心に残つてゐる。あの女も決して憎めない女だつたなと思ふと、清さんは何かしらもう胸が一杯になつてしまつた。

須山へ来てみると、相變らずそこは寂れてゐた。昔馴染みの龍田旅館へ彼は車を横づけにして、態と勢よく、「お客様ですよ。」と、聲をかけながら、車からぴよいと飛び下りた。

と、玄關からは番頭の定さんがとんで出て来て、清さんには、

「よう、これはお珍しい。」と、いつて、客を迎へる。

客はトランクを二つ持つてゐるので、清さんはそれを玄關の式臺へおろして、そのまゝ車の始末にかゝつた。

番頭の定さんはやがて又出てきて、

「清さん、ほんとにしばらくでしたねえ。今日は又お客様を有難う。どうです、今夜はあんたも久しぶりに此方泊りにしたら。」と、いつてくれる。

清さんもふつとその氣になつて、

「やあ、この前はとんだ御迷惑をかけて申譯もありません。今夜のお客は大丈夫ですよ。は、は、は。」と、笑ひながら云つて、又その晩も車を下のギャレーヂへ預けて、龍田旅館の客になつた。まだ九時だつたが、彼は何かしら歸るのが厭になつてしまつたのであつた。

此前に泊つた横二階の八疊へ通されると、彼は障子をあけて、裏二階の奥の座敷の方を覗いてみた。そこではお客があるとみえて、珍らしく、藝者達が大勢あがつて、金比羅船々をやりながら、さも面白さうに狂踏亂舞してゐる。この不景氣にやつぱりあゝして金をつかふ客があるのかと思ふと、清さんはいくらか反感めいたものを感じてゐた。

そこへひよつくり女中頭のおもとが出て来た。彼女もなつかしさうに、

「まあ、ほんとによく被來つて下さつたのね。又お客様を有難う。私ね今、定さんから聞いてびつくりしてしまつたんですよ。あんまりお見限りなんでね。時々はどうかお客様を御案内して來て下さいよ。ほ、ほ、ほ。ほんとに慾張つてゐるわねえ。」

「いや、どうもまるつきり御無沙汰をして申譯ありません。僕もつひ御縁がなくてね。」と、いひながら、「併し御繁昌で結構です。今夜なんぞは大した出來ぢやありませんか。」

「え、まあ、おかけ様で。あんた御存知でせう。今夜はね、それ、喜代香さんね。あの人が郡山から七人ばかりお客様を連れて來て下さつたんですよ。あの人も此節郡山ぢや大した賣れツ妓なんですよ。私すつかり見違へちまひましたわ。こんなことをいつちや何んだけど人の運でものは分らないもんですわねえ。」

それを聞くと、清さんは一寸顔色をかへたが、態と何喰はぬ顔で、
「あ、喜代香さんが來てゐるんですか、あの人もこの頃はすつかり賣り出してしまつて

ねえ。ほんとにいゝ鹽梅ですよ。」

「あらまあ、他人みたいな顔をして、憎らしいねえ。此頃はどうなんですの。やつぱりあんた可愛がられて被居るんでせう。二人してしめし合はせて、須山落ちなんか怪しかりませんわねえ。あとで私、喜代香さんに一寸通しておきますわ。」

清さんは變にきつとした顔でそれを手で押へて、

「いや、おもとさん。どうかそれはよして下さい。今夜は旦那と來てゐるんですからね。ひよつとしてそんなことで失敗りでもすると又あとが煩いですから。」

「あの丸八の若旦那が、レコなんですつてね。あの人も大した腕ですね。あんなのを捕へるなんてね。ほゝゝゝ。」

さういひながらおもとは酒をとりを下へ下りていつてしまつた。

清さんは襦袍に着かへて、やがて温泉へ下りていつた。丁度生憎今自分が送つてきた客達が入つてゐるので、遠慮しようかと思つたがもう退ツ込みがつかないので、そのまゝ隅の方へ入つていつた。

客達もにこにこ笑ひながら、主人は、

「やあ、君も今夜は須山泊りか。」などと、言葉をかけてくれる。

清さんはその主人がむくむく肥つた娘の子を抱いて入つてゐるので、つひいゝんなことをいつてあやすやうなことになつてしまつた。娘も人見知りをしないので、自動車のをぢちやんなぞといひながら、いたいけない口でいろんなことを饒舌る。

風呂から上つてからも、清さんには何んとなくその娘のことが忘れられなかつた。酒を飲みだすと、さうした氣持ちは益々濃くなつてきて、自分の娘のおすみのことを先から先と思ひ出さずにはゐられなくなつてきた。

おすみは自分が茶屋小屋へいつて夜更かしをして歸つてくると、いつも眼をさまして、お父ちやまと一緒に寝るといつて駄々をこねた。抱いて寝せてやると、彼女はさも安心したやうに自分の乳などをさぐりながらすやすやと寝入つてしまふのであつた。

又家を出るときには、きまつて後を追つた。その時分は子供を愛するなぞといふ氣

持ちはさして濃くなかつたので、彼はいつもおすみに辛く當つた。あんまり慕つたりすると、平手でびしやりと頭をはつて、火がつくやうに泣くのを平気で置きッばなしにして家をとびだしてしまつた。

殊に死ぬ少し前に、清さんは一度ひどくおすみを折檻したことがあつた。丁度ちよこちよこする盛りなので、彼女は如露をもつて店を遊んで廻つてゐるうちに、ちよいと拍子に轉んで、車の前燈の硝子を壊はしてしまつたのであつた。清さんは生憎蟲のるところがわるかつたので、お芳が泣いてとめるのもきかずに、おすみをガッリン倉の中へ押しこめてしまつた。

その時の泣き聲は、今でも身内に錐を揉み込むやうに心の耳へ聞えてくる。「おとうちやま、勘忍してよう。もうちませんから、勘忍してよう。息もたえだえにさう叫びながらおすみは倉の中で狂ひ廻つてゐた。

清さんはそのまゝ家を出て、歸つて來たのはもう午前の二時過ぎであつた。それでもおすみは眼をさまして、晝間のことを忘れて自分の寢床の方へむくむくと匍ひ寄つてくる。「あゝ、あんなにまで俺を慕つたものを、あんなことをして酷い目に逢はせなければよかつた。あのおすみももう二度と再び俺の眼の前には歸つて來ないのだ。あの子は死んでしまつたのだ。」

さう思ふと清さんはもう氣が狂ひさうだつた。あの子は死んだのだ。もう一生歸つて來ては呉れないのだといふ意識が既に二年も経過した今日になつて、初めてくつきりと、のぶかく清さんの胸へ刻まれてきたのであつた。それは清さんにしてみれば、生れて初めての感情であつた。清さんは情痴の世界の苦惱の他に、もつともつと切ないこんな苦惱のあることを、やつと初めて知つたのであつた。

酒の酔ひが廻つてくるに従つてさういつた切ない氣持ちは益々濃く絡りついてきた。何かなしにぱつと眼が開いたと思つた彼には、おすみの死のことばかりがあべこべに殺到してきた。彼はそれを忘れやうとして、やたらと盃の數を重ねた。

裏二階の方では、時々雛妓のきやあつと喚く聲が聞える。さうかと思ふと、今度はしみじみとして長唄の一節が聞えてきた。溪流と音を争ひながら、更け渡つた夜の障

子に傳はつてくるその艶めかしい聲を聞いてみると、清さんは耐らなくなつてきた。それはたしかに喜代香が唄つてゐるのであつた。しかも彼女の得意の「賤機」であつた。

清さんは立ち上つて、廊下へ出てみた。空にはほうつと寒靄が下りてゐた。深い夜の闇をすかしてみると、向ふ二階にはあかあかと障子に灯影が映つて、喜代香のうたふ聲は綿々として咽ぶがごとくにそつちから聞えてくる。

おもとは心配して、

「ねえ、あなた、ほんとにあちらへお報らせしなくつていゝんですか。何んだが變ですわねえ。私、又あとで喜代香さんに何かいはれると厭だから、一寸さういつてきませうよ。」

といふ。

清さんは涙をほろほろこぼしながら、

「いや、おもとさん。僕はね、僕はね、もう喜代香と別れてしまつたんだよ。今日は

ほんとに偶然こゝで逢つたんだからどうかこのまゝ僕を無事に歸してくれ給へ。又この家で、何かやり出すと、第一こゝの家へ御迷惑をかけなけりやならないから、ねえ、君、大急ぎで會計をして来てくれ給へ。頼むから。」といふ。さういふ彼はまるで學生のやうな口調になつてゐた。

おもとも随分止めてみたが、清さんはどうしても歸るといつて聞かないので仕方がなしに勘定書をもつてきてやつた。清さんはきれいにそれを拂つて、やがてふらふらしながら龍田旅館を出ていつてしまつた。

清さんは先刻のギャレーチへ来て、自分で支度をして車へ乗つた。彼は温泉の入口の坂を下りて、須山橋へかゝつたが、靄の中にさつと映つていく二つの前燈の光の中に、絶えず何か白いものが搖曳してゐるのを見た。それはよく眼をとめてみると、いとしいおすみの幻であつた。おすみはよく着てゐた白いスウェッターを着て、キヤーブレーターの前のところをちよこちよこ彼方へいつたり、此方へいつたりしてゐるのであつた。ひよいと此方に向いたかと思ふと、彼女は愛くるしい顔をして、にい

ツと笑ふのであつた。清さんは泣きながらそれを見つめてゐた……。

九

その翌日龍田旅館では番頭の定さんが表の戸を開けてゐると、そこへいつも町からやつてくる新聞配達が飛んできて、

「番頭さん。昨夜は大變なことがあつたよ。あの、一本松の角の崖でな、お前、自動車は川へ落ッこちてね。運轉手が一人死んだまつたよ。」と、大きな聲でいふ。定さんも寝ほけ眼をこすりながら、

「なんだ、自動車が落ちたあ。トラックか、それともお客様の乗る車かね。」

「あの、客の乗る箱のやつだよ。あすこは高さが五丈もあるで、もう箱もなにもぺちやんこになつて岩の間へ落ッこちてるだ。ふんといええことをしたもんだなあ。だから自動車はうっかり乗れねえだ。俺らのやうに親から貰つたこの足でてくてく歩くのが一番危くなくてえ、だな。は、は、は。」さういひながら彼は上の町の方へいつてし

まつた。

朝になると、その自動車の椿事は一層詳しく傳へられてきた。一本松の崖といふのは、温泉から六丁ばかり下なので、物見高い連中は、態々見に出懸けていつた。その自動車が昨夜無理に龍田旅館を出かけていつたあの清さんの自動車だといふことがやつと判明したのは、その朝の九時過ぎであつた。清さんは把手の折れたので顎から脳天まで突きぬかれて、無論即死してゐたのであつた。町からも警官がやつて来て、今の河原の方から岸傳ひに現場へ入つて、それぞれ手配をしてゐる最中だといふことであつた。自動車はもう到底引揚げられないにしても、せめて清さんの死體だけは揚げなければならなかつた。おもとはそれを聞くと、腰をぬかして、

「まあ、……」と、いつたきり、玄關の板敷へ張りついてしまつた。

「それだから私が、あんなに止めたのに、あの人ツたらどうしてもいふことを聞かないんだもの、ほんとに仕様がな。それよりもね、おかねさん。お辰さん。裏二階へいつてね、あの、喜代香さんをそつと呼び出して、そのことを話してきておくれよ。私

やもういやだ。昨夜、私、あの人が歸つてから、喜代香さんにさういつたのよ。さうしたら、喜代香さん何んだかとても泣いてたわ。だからもう私、あの人の顔をみるのがいやだもの。」

おかねは仕方がなしに裏二階へ上つていつた。喜代香は丁度お風呂へいくところで、廊下のところではつたり出逢はしてしまつた。おかねがそのことを話すと、喜代香は、「えッ……」と、息を呑んだつきり、くたくたと柱へつかまつてしまつた。しばらくの間は眼をくるくるさせてせいせい息ばかり弾ませてゐるが、それなりわツと聲を出して泣き出してしまつた。

喜代香はそれつきりお風呂へも入れなくなつて、裏二階の六疊へ臥床をしかせてどツと寝ついてしまつた。丸八の若旦那も清さんとの間の事情をうすうす知つてゐるので、午過ぎまで時々枕許へ来て介抱してやつたが、一緒に連れてきた客達がどうしても三時迄には郡山へ歸らなければならぬといふので自分も不意ながら皆と一緒に歸つていつた。後には喜代香の家の抱への貞子といふ妓が残つて看病してやつた。

喜代香は食べるものも喉へ通らなくて、おまけに八度ちかい熱まで出て来た。彼女は絶えずうつゝのやうに讒言ばかり口走つてゐた。昨夜清さんがひと眼でも逢つてくれたら、こんな事にはならなかつたのにと、それを繰返しくりかへし云つてゐた。喜代香は清さんが自殺をしたものだと言ふ信じきつてゐたのであつた。龍田旅館のもの達も皆さう思つてゐた。

喜代香はそんなことでやがて間もなく丸八の若旦那とも別れて、今ではもとゐた磯原へ歸つてきて、そこで喜代次と名乗つて出てゐる。此頃ではあんまり酒がすぎるので、座敷が荒つほくて時々えらいしくじりをやることもあるが、それでも潮風にさびたやうな聲で須山小唄などを唄はせると、哀深い情趣のある女であつた。

雪の前澤、須山の橋を、

ちよいと渡れば、湯の香が招く、

あの妓戀しや、置炬燵。

などと歌つては今でも彼女はほろりと涙ぐむのであつた。

(完)

蕩 兒 [明治篇]

露氣をふくんだ大空には、その時十三日ばかりの大月が磨ぎ澄ました刃金のやうに照り輝いてゐた。人通りの途絶えた街路には物音もたてぬ秋の夜風がひそくと吹きみちて、濃い黑影を地に印した家並の陰を時折煙のやうな塵柱があてもなく彼方此方へ蠢いてゆく。二筋に長く列つた軒燈の光も今は冷たく影薄れて、しんと更けた静けさの底からは何處かの店裏で十二時を打つ時計の音がしみ入るやうにひつそりと響いてきた。

松之助は棒のやうになつた脚を引摺りながら自分の影とたつた二人でその街路をとほとほと歩いて來た。この三日間といふもの久振り酒と女の巷に耽溺し續けてゐたので、頭はどん底から痲痺してしまつたやうに軽い。酔ひざめの割りにははつきりした氣持ちなので、自分では確かな歩調で大地を踏んでゐる心算でゐるながら運ぶ足は一

歩一歩まるで宙に浮いてるやうだつた。ともすると空ききつた腹は底の方からしくしく痛みだして、それでるながら酒臭い暖びが出てくる度に胃のなかで饒ゑてる液体が今にもぐつと突き上げて來さうにむか／＼と嘔氣を催してくる。

濱町の通を行き盡くしてしまつてやつとのことで女橋まで來かゝると、彼はもうとても我慢がしきれなくなつて、いきなり露に濡れた橋の欄干へ縋り寄りながらそのうへ、胸を壓しつけるやうに體を凭せかけた。と、一緒に頭が急にくらくらツとして今まで抑へてゐた胸苦しさが一時に込上げてきたかと思ふと、彼は多愛もなくがくりと首を折つて、その儘満々と溢えた満潮の河面へ苦い液體をした、か吐き落とした。一度もどすとまた次々と胸の吃逆がはけしくなつて、到頭しまひには氣持ちははつきりしてゐるながら、けえ／＼喉を鳴らす度に今にも心臓の鼓動がとまるかと思はれるやうな苦悶が頭の頂邊から足の爪先まで襲ひかゝつてきた。十分間もさうやつてゐるうちに體はぐつたりと心から疲れ果て、いくら身を悶えても胸を絞つてももうその時には胃からは何も出て來ないやうになつた。唯自分の喉から出るとは思はれないやうな

凄じい呻聲だけが静まり返つた橋下の薄闇がりへ嚮して行つた。

ふと顔を擡げると眼の前には四つ行逢つた河筋の眞向ふに大川の河面がひろ／＼と展がつてみえる。水のうへ五尺ばかりの處には眉をなした河霧がほんやり浮んで、斜に射しかゝる月光は油の如くに澱んだ河のうへを一帶にほうつと明るませてゐる。地獄の埧塙のやうにそゝり立つセメント會社の煙突も灰色に淡く霞んで、夢みるやうな對岸の小さな灯影も、中洲から箱崎河岸へかけてちろ／＼と瞬く窓々の灯も一樣にその河面へゆらりゆらりと揺めいて、簾聲や汽笛のかしましい晝の賑はしさに引換へ、無言の冷たい夜があらゆる物の陰に深沈と浸潤し盡してゐるのである。

松之助は、始終見馴れてゐながら今夜に限つて何處となく様子の變つてみえる四邊の光景を見渡してゐるうちに、何とも知れぬ冷たい戦慄が脊筋からぶる／＼と細かく湧きあがつてくるのを覺えた。過ぎ去つた三日間の狼籍な記憶がその時卒然と心に歸つて來て、今やつと初めて悪夢から覺醒したやうな氣になつた。

「あ、俺はこの三日の間何をして暮らしてゐたのだらう。」さう心の中で呟くと、彼は

忽ち眼の前が黒い面紗で押包まれたやうな恐怖を覺えて、更に強い戦慄に襲はれずにはゐられなかつた。

彼は一昨々日の夕方丁度四箇月振りて日本橋の仲通りにある生みの親の店へ尋ねていつたのであつた。親の家は仲通りでも二流と下らぬ山形屋と云ふ骨董店で、彼は長男で、しかも三人きりしかない兄妹のなかのたつた獨り息子だつた。我がまゝ一杯に育てられた身の報いで、中學校を卒業するとすぐから習ひ覺えた悪遊びが到頭骨まで食ひ入つて、彼はこの三四年の間、箸にも棒にもかゝらぬほど放蕩をした。根が富裕な家なので、初めのうちはいろくんに企んで面白いやうに金も廻はした。さういふ時にはきまつて悪い取巻きがつくもので、カフェーまはりや、球突場まはりをして歩くやうな若者が彼の周圍には幾人となく付き纏つてゐた。今でこそ唾も吐きかけないが、通二丁目の紙屋の息子、請負師の息子、それにまだ碌なものも書けぬ癖に文士顔をしてゐるやうな呉服屋の息子などもみんなその頃は彼の無二の親友だつた。さういふ手輩が今日は葭町、明日は柳橋と散々に彼を引廻はしてそれでなくてさへ益々募ら

うとしてゐる彼の遊惰な心を一層深みへ追ひ落としした。

そのうちに道樂は段々と兩親にも知れ渡る。鏝一文彼の自由にはならなくなる。日日の行動も兩親の厳しい監視の下に置かれるやうになると、取巻きの連中は又彼をそのかしてさまざまな悪事を教へた。店のものは片ツ端から持ち出させる。番頭や小僧の懐はいびり倒す。しまひには父親の實印を盗み出させて高歩の金まで借りさせるやうなことになるので、さすがの兩親も持て餘して、山の手で堅い酒屋をしてゐる親類先へ預けたり、押込み同様に家へ監禁してみたりした揚句、到頭ほんとに愛想を盡かして今年の夏のさなかに愈々勘當を喰はしてしまつたのであつた。父親は全く絶望して世間體ばかりでなく、廢嫡の手續をしたうへ七生までの勘當をすると云つていきりたつたのを、母親は涙ながらにやつと思ひ止まらせ、ひよつとして生れ落ちからの浮浪の徒の仲間入でもしてはといふ懸念から二十圓づつの宛がひ扶持だけは月々呉れることにして、到頭生みの家を追ひ出されてしまつたのであつた。

松之助も勘當と聞いてはさすがに手も足も出なかつたが、自分をちやほや持てなし

て呉れる女達や友達のあることを思ふとそれでも幾らか氣が強くなつて、却つて両親達の前で、

「勝手にしなくつてさ。僕だつてもう一人前の男だ。いつまで、お父つあんの脛なんか嚙つてゐるもんか。外國へでも飛んでいつて、豪い人間になつて歸つて来るから、その時になつて見損つたのを、悔んで貰ひ度くないもんだ。」

などと不貞腐れな毒口を叩いて、母親や、妹達の涙を後に見捨て、ぷいと家を飛び出してしまつた。

初めのうちはその頃深間になつてゐた小いくと云ふ葎町の妓の家へ轉け込んで何不自由のない幾日かを送つてゐたが、そのうちにいつかその妓とも面白くなくなつて、彼は葎町の土地にふつりと足を絶つてしまつた。譬へ自分の妓であつても心底から松之助に惚れてはゐなかつたものと見えて、別れ際などはさばさばしたものだつた。殆んど着のみ着のまゝの風で、幾らも入つてゐない小さな財布を懐手をした掌のなかへ固く握りしめながら華やかな色町を追はれてゆく時にはさすがの松之助も腹立た

しいやうな情ないやうな果敢ない心持ちにならずにはゐられなかつた。

それから頼りない流浪の日が續いた。友達の家や、少しでも引懸りのあるやうな家を方々と泊り歩いて、或晩などは淺草の奥にある労働者相手の木賃宿へ泊つたりした。薄情なのはこの世間のならひで、そのうちにはかうなり果てた松之助の身の上に同情を寄せるものも漸次と減つて、たとへ訪ねていつても友達たちは向ふから遁け隠れをする。或ものなどは自業自得だなどと云つて彼を眼の前に引据ゑて腹立たしげに面罵するやうなものも出来てきた。松之助はその時になつて漸う苦い涙と悔いとを知つた。

長年店へ勤めてゐた銀次といふ番頭の世話で、箱崎町の裏露路の中にある年老つた賣卜者の家の二階を借りて移つたのはつひ十日ばかり前のことであつた。最後に訪ねられたその銀次は人形町のさる小間物屋に勤めてゐて、自分の身のまはりにも事を缺くやうな身分ではあつたが、もう拾羽織の欲しい今の寒空に、浴衣の上へ襟垢の光つた棒縞の單衣をたつた一枚かさねて、髪も鬚も穢ろしく伸びた青い顔をしながら、

松之助がぶらりと訪ねて来た姿を見た時にはさすがにしみじみ可哀さうになつて、いくら道樂の果とは云ひながら仲通りで十間間口を踏まへた山形屋の若旦那がと思ふと律義な彼はどうしてもひと肌ぬがずにはゐられなかつた。朋輩や主人から少しづつ金を融通して貰つて早速近間にその穢らしい安貸間を探し、ひとまづそこへ松之助を落着かせて、先方では賄ひはして呉れぬと云ふので取敢えず自炊の出来るやうに小さな七輪や土釜や瀬戸ひきの小鍋などを間に合はせにと、のへてやつた。そして自分の外出着にしてゐるたまがひ結城の袷や、綿入り獨鈷の角帯のやうなものまで持つて来て脂汗の匂ひのしみ込んだ單衣をぬぎかへさせたのであつた。

松之助はその親切が嬉しくして、生れて初めて人の情といふものを心の底まで味はつたやうな気がした。それでもまだ矢張り育ちがさせる我儘が残つてゐて、心で思ふ十分の一も口へ出しては禮が云へないのであつた。

銀次は寸の合はぬ自分の着物を着て、黄紙張りの破壁の前へ薄寒さうにつくねんと坐つた松之助の恰好をみると、急に涙ぐんだやうな眼つきになつて、

「ねえ若旦那。これでやつとお眼が覺めましたらう。私かまだお店へ御厄介になつてゐた時分には、あなたはよく夜よなかに自動車なんかで歸つてゐらしつちや小僧達の戸の開けやうが遅いと突如打つたり叩いたりなすつたもんです。私なんぞも幾度あなたの拳固を頂いたか知れやしません。今こんなことにおんなさるのも全くあの時分の報いなんです。旦那は氣丈な方ですから兎に角、お内儀さんがこんななりをして被居るあなたを御覽なすつたら何と云つてお泣きなさるでせう。あの優しいお心を察しますと、私や自分ながら涙が零れて來ます。……私もお店の方のお暇を頂いてからは自分の事にばかりかまけて居りまして、つひ一二度しきやお伺ひもしませんのですから、今更お内儀さんにお眼にかゝつてあなたのお詫びをするやうな事も一寸出來兼ねますが、まあ併しそのうちに何うにかなりませうから、どうかもう暫らく御辛抱なすつて、あなたも笑つてお店へお歸りになれる、私もせめて自分の顔が立つといふやうなことになるすつて下さいまし。御辛抱さへ續けばなにも旦那だつてさういつまであなたを御勘當なすつてお置にもなりませんまいから。……」

と、鼻聲になつて途絶れとぎれに云つた。

松之助は人の情に縦らなければ、もうどうしても生きて行けない今の境涯を思ふと、思はずほろ／＼と涙を零した。そして若し店の近處へでも行つた折には一寸寄つて、今月分の仕送りの二十圓を貰つて来てくれと云つて、強ひて銀次の手前だけでも取繕はうとしたのであつた。

一昨々日の夕方になつて松之助は突然店からの使者を受けた。丁度その時彼は風呂へ行つてゐたので、使ひのものには逢はなかつたが、それが置きのことして行つた一封の書面を見ると彼は薄々豫期してゐた時節が到来したのを覺つて、まだ封も切らぬ先から雀躍して喜んだ。それは妹のお君からの書面で、別れてから後のことが二尋ほどもこま／＼と書きしるしてあつたが、要するに母が一度逢つてよく存念を聞き糺し度いと云ふからこの書面を見次第に店へ来て呉れと云ふのであつた。松之助はたどたどしい文言を辿つてゆくうちに、年頃になつた可愛い妹の横顔や、色の蒼い苦勞性な母親の顔などがくつきりと眼に映つて来て、もうそろ／＼薄暗くなりかゝつた穢ろ

しい部屋のなかで思はず涙にくれながら嗚咽にむせんだのであつた。

日がつつぷりと暮れると彼は思ひ切つて仕度をして宿を出た。燈影のかゞやかしい水天宮前から電車通りを歩いて芽場町へ出たが、漸次と親の家の方へ近づいてゆくに從つて彼の胸は異様にふるへてきた。勘當されてから三度ほどこつそり店の前を通つてみたことはあるが、いざ通ひ馴れたあの母屋の裏覗戸をくゞるのかと思ふと彼はさすがに氣臆れしない譯にはいかなかつた。で、到頭腹を据ゑて裏通にある軒のひくい、一軒の蕎麥屋へ飛び込んで、餘分な金の使へない懐なので、冷たいもりを肴につんと鼻へ来るやうな酒を二本だけ呷つた。

貧しい酒に勢をつけられて絶えて久しい我家の前へ立つた頃には、もう四邊はすつかり夜になつて、老舗の多いそこの町は妙にしんと静り返つてゐた。山形屋勝手口と書いた軒燈はなつかしい光を灰汁で洗ひ込んだ潜戸の外面にほのめかしてゐたが、彼は長い間躊躇した末、やつとその把手へ指を入れて恐るおそるその戸を開けた。なかは小暗い石舗道になつてゐて、片側は店の方の臺所口、片側は土藏で、その突當

りが籠燈籠のほんのり點つた裏玄關の小格子になつてゐた。足音をひそめてこつそりその小障子の前まで歩いてゆくと、その時突然上框の障子がすうつと開いて、なかからは妹のお君が白い顔を半分だして、恥しきうな嬉しきうな慄へ聲で、

「兄いさん？」と、呟いた。

松之助はそれを聞くとかつとして、我れにもなく態と横柄に構へながらつかく上框へあがつた。

「あら、兄いさん。そつちぢやなくつてよ。母様は二階にゐらつしやるのよ。」お君は自分には構はずその儘奥の方へ入つて行かうとする彼の袂を後から掴んで、そつと階段の方へ引いていつた。

松之助は四箇月振に上りなれた我家の階段をあがりながら胸がわく／＼して思はず足を踏み滑らせようとした。

「まあ、危い。」お君ははつとしたやうに口のなかで叫んで、柔い胸で兄の肩を後から支へるやうにした。松之助の眼にはその咄嗟云ひ甲斐もない涙が滲んで來た。

二階の八疊は勘當されない前は松之助の居間になつてゐたので、絨氈をしいた間内には机も本棚もその他さまざまな裝飾品のやうなものまで昔のまゝに置いてあつた。天井には自分の好みで取りつけた電燈の絹笠が昔ながらの贅澤な薄桃色の光を透かして、その下に据ゑた桐胴の火鉢の周囲には誰と誰が坐るのか三枚の絹座布團が人待ち顔に敷かれてあつた。

松之助は明るい光のなかで、妹と顔を見合はせるのが恥かしさに態と顔を背けながらそのひとつへそつと坐つた。そして箱崎町の佗び住居や、今迄方々と流浪して歩いてゐた間の宿りとは似てもつかぬなつかしい間内のさまをそれとなく偷みながら今更のやうに生唾を呑んでゐると、妹もさすがに氣憶れがしたと見えて、正面をきつて挨拶をしようともせず、いつともなくこつそり階下へ降りて行つてしまつた。

暫らくすると又足音が聞えて來て、やがて伯父に當る氣むづかしやの老人と母親とが前後して入つて來た。そして差向ひに座へつくとちよつと挨拶を交はしたゞけで、三人の間には少時の間異様な沈黙が流れた。松之助は顔を伏せたきりぶるぶる慄へる

唇をじつと噛みしめてゐた。

伯父はしばらくすると腰から自慢の珊瑚珠の根付けのついた煙草入をとつて、煙管さしの鞘をほんど引き抜きながらはじめて口をきつた。

「どうぢや、松。お前も大分長らく家を出てゐるが、今度こそちつとは眼がさめたらうな。それとも矢張りさうしてぐれぐれしてゐる方が面白いか。」その壓しつけるやうな聲は或る反感をもつて松之助の胸に強く響いた。

松之助は身動きもしずに黙つてゐた。

伯父は煙管に火をつけながら、

「どうぢや、さうして家を出てみたら世間といふものが少しは分つたらう。親の家へ厄介になつてゐた時分と違つて、その日の飯もろくに食へんやうな今のさまでは餘り面白いこともあるまい。」

松之助は上手を越すやうなその言葉を聞くと、持ちまへの不貞腐れな氣がむらくくと湧いてきた。一度はじつと押し耐へてみたが、頭の薄禿けのした皮肉らしい伯父の

顔がちらりと眼に映ると到頭我慢がしきれなくなつて、

「いや、面白くないこともありせん。家にて窮屈な思ひをするよりも、かうしてたつたひとりやつてゐると體が自由で却つて面白いこともあります。」と、つひ心にもないことを我れにもなく口走つてしまつた。

伯父は煙を吐きながらきつと松之助の顔を見据ゑたが、その眸光は異様に輝いてゐた。それでも態と薄笑ひをみせるやうに唇を斜にひきゆがめて、

「お前は酒を飲んでゐるんだな。ふむ、勘當されてゐながら酒の飲めるやうな度胸ならさぞ面白いことも多からう。」と、彼は針を含んだ鋭い調子で云つた。

三人はそれつきり又飽氣なく口を噤んでしまつたが、松之助には伯父の言葉よりも母の眸光が一番辛かつた。彼は低く首垂れてゐながら壺のやうに落ち込んだその母の瞳が涙に濡れ輝きながらきつと自分の上に注がれてゐるのを痛いほど明らかに感じてゐた。そしてその注視は皮膚を透し、骨を徹し、心の奥底までもぢり／＼と疹くやうに滲み徹つてゆくのであつた。

伯父はしばらくするとやけに煙管をはたきながら静かな聲で、
 「實は今日お前を呼んだのは別のことでもない。今朝銀次がやつて来ての話にお前も
 此頃では大分性根も入換つたやうだから、どうか旦那のお取做しで又もとのやうに家
 に入れるやうにして呉れとたつて云ふもんだから、私もつひその氣になつて、一應お
 前に逢つたうへその相談もしてみようと思つて實はわざ／＼呼んだんだ。お前とても
 いつまでそんな苦しい思ひをしてゐたくはなからうし、それにお父さんもお母さんも
 お前の事ぢや随分心配もしてゐられるのだから、此際私が仲へ入つてもしうまく事が
 纏まるやうならまことに結構だと思つてその腹もきめてみたが、しかし私は、今の様
 子を見てもうすつかり愛想が盡きてしまつた。勘當された親の家へ久振りで歸つて來
 てるながらお父さんは如何ですとひと言訊くぢやなし、私達にまでつけつけ亂暴な口
 をきくばかりか酒をひつかけて來るなどは呆れて言が云へん。そんな性根ぢやもうと
 ても先行見込みはないに極つてゐる。見込みのないものに骨を折る必要はない。なま
 じ私が仲へ入つてみた時に却つて山形屋の看板へ泥を塗るやうなことを仕出來すに極

つてゐるんだから、私はもうこれつきりふつりと手を引きます。……」

その時、母親は傍から何か云はうとしてひと膝のり出したが、伯父は「もう諦め
 なさい」と云ふやうに眼顔でそれを制しながら、又煙管に火をつけて、

「それにお前とてもそんなに外にゐるのが面白けりやもう今更ら家へ入れて貰ふ必要
 もあるまい。泥水に染んだものは一生泥水のなかで終るがいゝさ。親もなけりや家も
 ないと思へばどんな事だつて出来る。……」

松之助はそこまで聞くと耳があんとして體ぢうの血が一時に頭へのほるやうな氣
 がして、

「えゝ、さうですとも。私にやもう親もない。家もない。もう野倒死をしたつて一生
 家へなんか歸つて來やしません。私ももう何も伺ふことはありませんから此れで御免
 蒙ります。」と、泣き聲で云ひ放つと彼は自分でも耐らなくなつて、いきなり氣狂のや
 うにふらく／＼起ち上つた。そして呆氣にとられた伯父や母親の方へぎよろりとひとめ
 流眸をくれて、その儘ばたく／＼と階段を駆け降りてしまつた。

上櫃の處で下駄を突懸けようとしてゐると二階の方から、

「松之助、松之助」と呼ぶ母親の鋭い聲が聞えて、細めに開いた正面の紙襖の隙間からは二人の妹が憎えたやうに眼だけ出して此方を見てゐる。松之助はたゞ夢中で土藏の前を駆けぬけて一散に表通へ飛び出してしまつた。

それから何處をどう歩いたか自分でもまるつきり覚えてゐない。やつと心が靜まつて、物事がはつきり考へられるやうになつた頃には、彼はもう小網河岸の暗い通から蠣殻町の方へ向つて歩いてゐた。大波のやうな興奮が消えてしまふと跡には燃え崩れた灰のやうな果敢ない心持ちが残つて、母親の眸光を思ひ出したゞけでも彼の頬には熱い涙があとから、あとから留めどもなく流れて來た。自分の不孝な振舞ひは兎に角、些細な言葉の行違ひから、折角家へ歸れる大事な機會を逸してしまつたことや、年長つた母親の激しい絶望を思ふと彼はもう自分の心臓を鞭にかけられるやうな悔恨に嘔まれずにはゐられなかつた。

水天宮の角まで來懸かると、彼は人込みのなか、ら、突然、

「若旦那、若旦那。」と、呼ぶ聲を聞いた。

驚いて振顧へると、それは鳥打帽を眼深かにかぶつた銀次だつた。商ひ歸りと見えて荷を入れた大きな風呂敷包みを脊負つてゐる。

「若旦那。今日はお宅から何かい、お便りが参りましたらう。今お歸りですか？」と、にやにや嬉れしさうに笑ひながら云ひかけた。

松之助は態と眞顔になつて、

「い、便りつて何だい、金でも來たのかい？」と、しらぐしい聲であべこべに訊き返した。

「い、え、そんなことよりまだぐつとお目出度い話なんです。今日お店からお迎ひが來やしませんでしたか？」

「い、え。何故さ。」松之助はこんな律氣な親切な男に嘘をついては濟まないと思ひながらも、その場合どうしても今夜のいちまきを話すに忍びなかつたので、到頭心にもないことを云つてしまつた。

銀次は怪訝な顔をしてじつと松之助の方を見てゐるが、

「可笑しう御座んすな。ぢや何かお差支へでも出来て明日にお延ばしになつたのかしら。いや、實はね。」と、彼はその儘松之助の方へ寄り添つて耳打ちでもするやうに、

「私、今朝ちよつと通四丁目まで参りましたもんですから、その序にお店へ寄つて、お内儀さんにお眼にかゝりまして、此間からのいちまきをすつかりお話し申しあげたんで御座んすよ。と、お内儀さんも大層お喜びになりましたね、さうなつたのも皆お前のおかけだなんて私まで大變な頂戴物をしちまひましてね。今夜早速あなたを家へ呼ぶからつてえ仰せでしたから私も實は朝つから大喜びでゐたんで御座んす。今お得意まはりをして歸りに一寸箱崎町へ寄つてみましたらあなたは夕方からお出懸けだと云ふんで御座んせう。こりやてつきりお店へお出でなすつたに相違ないと思ひまして、實は又今晚遅くにでももう一度伺つて見ようかと思つてゐるところなんで御座いますよ。」

「さうかい。そりやまあいろく骨を折つて呉れて有難う。」松之助はちよつと頭を

さけて、「そんなことなら明日にでも何んとか云つて来るかも知れないが、しかし……私は家からの使ひよりも今夜は金の方が欲しんだ。少しばかりないと全く困るんだからねえ。」何のあてもなく唯心に浮んだまゝ、を彼は嘆息のやうに口へ出して呟いた。

銀次はそれを聞くと俄かに思ひついたやうに、

「あゝ、さう、さう。私や嬉しさに取紛れてすつかり忘れて居りました。今朝お内儀さんからお手當をお預りして來ましたんですが、あれを差上げなけりやならなかつた。」

「えツ手當？」松之助は何んだか銀次の言葉がひどく意外に聞えたので、前後の考へもなく大きな聲を出してしまつた。

「あの、それ間代の前金やら、貸布圍の前拂ひやら、私の手におへねえものは皆後へ廻してありますので、それを申上げて、實はお金を頂いて参りましたんです。若し何んなら店に置いて御座んすから一寸お立寄りな。」

松之助は云はれるまゝにそれから銀次の店へ寄つて一封の紙包みを受取つた。その

あとで明日を約して彼は又たつた一人になつた。水天宮の角まで歸つて來ると、彼の道の小陰に立止つて懐のなかでそつとその紙包みを開けてみた。なかには忘れもしない母親の手蹟で「銀次どの山形屋内」と書いてあつて、觸つたら切れさうな五圓紙幣が八枚入つてゐた。松之助はそれを見ると急に眼を輝やかして、この四箇月の間碌に觸つたこともない滑らかな紙幣の手觸りをいつまでも味はつてゐた。

金を見ると急に氣が變つて、久しぶりに旨い飯でも食はうと思つてつひ葭町の細路次のなかにある鳥屋の暖簾をくゞつたのが過ちで、彼は酒の酔ひと抑へきれぬ自暴自棄が手傳つてその晩到頭もとの情人の小いくに逢ふやうな事になつてしまつた。女のまへで彼は口ではもう勘當がゆりたやうなことを云ひ續けてゐながら、泥酔した彼の頬には始終涙が流れてゐた。

「酔つてもお母さんの管を巻くくらゐになりやあなたも立派な山形屋の若旦那だわ。ほんとに頼もしいわねえ。」と云つた小いくはそれで薄情のしかへしをされたやうなものだつた。

その晩は小いくの顔で昔馴染の待合へいつて、大盡をきめてゐた時分の女の移香を身にしめながらぐつすり寝た。その翌日も一日そこで飲み明かして、夜遅くなつてから、

「又焼木杭だわねえ。」などと甘え寄る女の言葉を酔つた耳に聞き捨て、やつと俥でその家を出た。待合の勘定は女に引受けさせたもの、何やかやの拂ひが嵩んで、その時には四十圓の金ももう半分も残つてはゐなかつた。

その晩到頭それから箱崎町の陋屋へ歸る氣にはなれなくて、彼は昔豪奢な遊びをしてゐた時分の夢に浸りながら、吉原へ送られて行つた。自動車の警笛や、妓達の笑ひ聲や、絃歌のざわめきを聞くにつけても幻影は心のなかで美しく凝つて、仲之町を歩いてゆく時には銀次から借りたまがひ結城の袷が、昔着馴れたお召の襲ねのやうにしつとりと肌を吸ひつくやうにさへ覺えられたのであつた。

その晩彼は格子先へ來て悲しげな鉦を叩きながら和讃を誦する娘巡禮の聲や、流しの三味線に徒らな涙を誘はれながら、とある穢ろしい河岸店の二階に寝た。白粉の

斑らにはけた安女郎の寝顔をみても、そこから二里と距たらぬ處に、自分の不孝を案じ煩ひながら、このひと夜をまんじりともしず泣きあかしてゐる母親のあることばかりが思ひ出されて、どうしても眠らうと云ふ氣にはなれなかつた。

その翌日の今日はもう全くの自暴自棄で、朝から方々の飲み屋を飲み歩いた揚句、最後の一錢がなくなつた今やつと寝どころを求めて詮方なしに箱崎町の宿をさしてさまよひ歸つて來たのであつた。……

殆んど一時間ばかりも寒い風の吹きあける橋の欄干へ突俯してゐるうちに胸苦しさもだんだんと癒つて來たので、彼は又そろそろ月影を踏んで歩きだした。紅い交番の灯だけが見える土洲橋を渡つて、三丁目の角を左へ折れると彼の借りてゐる賣卜者の家はそこから二筋目の細路次のなかにあつた。片側は棟割りになつた穢らしい二階家だつたが、それでも他の片側は粹なつくりの仕舞た家などもまじつてゐて、彼の家はさうした家と家との底間のやうになつた處にあつた。四邊は深い眠りに包まれてゐて、溝板や羽目板に射す光だけが眞晝をあざむくやうに明るく、すぐ眞向ふの家では

赤兒の夜泣きする聲がきれ／＼に洩れて聞えてゐた。

彼は人を憚るやうにこつそりわが宿の戸口へ忍び寄つた。そしてはぎ板をした雨戸を二度ほどこと／＼と叩いたが、眼敏い老人夫婦なので、なかではすぐさま人の起き上る氣勢がして、やがて上端の障子を開ける音がしたかと思ふと婆さんの聲が、

「誰方ですい？ 誰方ですい？」と、二聲ばかりひつそりと聞えた。常々から喘息の持病をもつてゐるので、その聲は啖がからむやうにひどくしや嘎れてゐた。

「私です、松です。」松之助は哀願するやうに答へたが、それと一緒になかでは樞を落す音が聞えてがたく軋む雨戸がそのまゝ、すつと開いた。

松之助がぬうつと入つていくのをみると、縞目の分らなくなつたやうな布子の寝衣をきた婆さんは呆れたやうにその顔を見まもつて、

「まあ、あんた何處へ行つてゐたやねえ。一昨日から毎日二度づつ銀さんがみえるだけんど、いつもお留守で、もうえらく心配してゐましたが、ほんとにまあ香氣な、……」と、四邊をもぞくさしながら後向きになつて、「ほんとに何處へ行つてゐなすつたや」

ね？」

「いや、一寸急用があつて、その、横濱の方へ行つたもんですから。」松之助はどきまぎしながら答へた。

「そんならそれで一寸葉書でもお呉んなさりやえ、のに、何の音沙汰もしずにぶいと出ておいでなすつて、その儘歸つて來なさらねえもんで、家の爺さんまでがえらく心配してました。」

「どうも済みません。」松之助はさう云ひ捨て、その儘爺さんが商賣に出る時の疊み臺や、提灯などの上げてある棚の傍から鼻のつかへさうな階段をぎし／＼のほつて行つた。

「もう火種もありませんから、お湯が入るやうだつたら階下の鐵瓶のを使つて下さい。」と、婆さんはぶつ／＼口小言を云ひながら後始末をして、ほの暗い豆ランプのともつた奥の間の寢床の方へ歸つて行つた。

二階へあがつて手さぐりにやつと電燈をつけると、松之助は喪心したやうに部屋の

真中へがくりと腰を落としてしまつた。天井の低い、ゆがみか、つたやうな汚らしい間内の様子を見ると全く精も根も盡きはて、破れ障子に映る自分の黑影を眺めただけでももう聲をあけて泣き度くなつてしまつた。昨日に變る境涯がつく／＼恨めしかつたが、しかしかうした處でもせめて寢起きの出来る屋根のあるのがまだしもだと、その時には心の底でしみ／＼思つたのであつた。

坐つてみると俄かに眼のまはるやうな空腹が迫つて來たので、彼は部屋の隅の方にある七輪の上の土釜を開けてみた。なかには家を出るときその儘にして行つた飯が底の方へこびりついた儘残つてゐるので、もう堪へ性なく茶碗によそつてほろ／＼した冷たいその一塊りをさもうまさうに貪り食つた。そしてひと粒残さず食べてしまふと、彼は綿のよれ／＼になつた固い貸布團を引出して來てそのなかへもぐり込んでしまつた。初めのうちは階下から聞えてくる婆さんの咳き聲が耳について、一昨日からの出來事や、明日から先はどうして暮らさうなどといふさま／＼な悔恨やら、心細さやら、悲しさやらが胸を重く壓してゐるが、そのうちにいつか疲れが出てぐつすりと

深い睡りに落ちてしまつた。夢は見も知らぬ女や、出来事のうへを多愛もなく彼方此方へ飛んで廻つた。

その翌朝、もう日が高くなつてから彼はやつと眼を覺ました。今朝この銀次が寢込みに踏ん込んで来るに相違ないと思つたので、彼は其儘離れ憎い寢床からすほと飛び起きて、すぐさま顔を洗ひに行つた。そして三四日來の汚れた垢をすつかり洗ひ清めたやうな氣になつて二階へ歸つて來ると、階下からは婆さんがぶすぶすいぶる火種をもつて上つて來た。それと一緒に俄かに激しい空腹を覺えて來たので、彼はやがていつになくいそぐした様子で朝飯をつくる支度をしはじめた。

押入れのなかのビールの空箱をあけてみると残りの米ももう少くなつてゐる。彼はそれをぢかに土釜へ入れて、階下の流しで磨いで來るとやがて眩懸になつた北向の窓へ七輪を持ち出して、ばたくと氣永に火口を煽ぎだした。

その朝は晩秋にしては珍らしい霜でも置きさうな寒さが吹く風の底に流れて、蒼々と澄み渡つた空には蜘蛛手に張られた電線の上を二三羽の鴉が啼きつれながらうす寒さうに大きな輪を描いてゐた。先隣りの地境ひにある無花果ももうすつかり葉をふるひ落として、大川の方で鳴る氣笛が庇間を眞直につきぬけてすぐ間近にひびいてくる。露路内では飴屋の鉦の音に連れて時折子供達の喚き立てる聲が騒々しく聞えて來た。

松之助は昨夜よりはすつと軽い氣持ちで四邊をみまはしながら何を思ふともなくぼんやりしてゐるが、そのうちに彼は三間を距たらぬすぐ眞向ふの二階にふと常とは變つた或事實を見出してそれとなくそつちへ視線を惹かれた。その二階は小體ながら粹に作られた普請で、六疊に四疊半ぐらゐるの間取りになつてゐるのであらう、此方向きには蒲鉾形のこまをいれた華奢な欄干をもつた縁側がつゞいて、まだ張り替へてから間もないらしい障子が眞白に朝の光を輝かしてゐる。松之助が此處に引移つてからこのかた毎日々々雨戸が閉まつたまゝになつてゐるのが、今日は珍らしく隅から隅まで繰開けられて、しかも雨戸の鴨居には手綱染めに絞りを置いた艶めかしい女の長襦袢がふらく風にゆられながら懸けてある。そして戸袋際には行李の上は大形の旅行鞆が積んであるのも仔細ありけで、今迄誰れの住家とも氣にとめてゐなかつたゞけに、

松之助の好奇心は頻りにその二階へ引きつけられて行つたのであつた。

彼は飯の炊けるのを待ちながら時々そつちへ眼を配つてゐた。と、暫らく経つて障子のなかでかすかな咳拂ひの聲が聞えた途端に左手の座敷の障子がすつと開いて、そこから銀杏返に結つた二十四五の年増が格子縞の寝衣に伊達巻をぐるぐる巻きにした儘のしどけない姿で楊子を啣へながらついで出て來た。そして暫らくの間欄干の處へ突立つて齒を磨きながら恥しげもなく此方を眺めてゐるが、松之助の姿をみつけるとその女はひどく吃驚したやうに眠むさうな眼をきよとりと据ゑて、いきなり齒磨だらけの唇をにつと綻ばせた。

「若旦那。若旦那ぢやなくつて？」その女の聲ははつきりさう云つた。

松之助は悸乎としてこつちからも瞳を据ゑた。なるほど若旦那と呼びかけるのも道理で、その女は彼が盛んに葭町で遊んでゐる時分によく一座した奴と云ふ藝者だつた。

「お、奴さんぢやないか。」松之助はさう叫んだきり呆氣にとられて二の句がつけなかつた。

つた。

「あら、矢張り若旦那だよ。まあ、あなた一體どうしたつて云ふのさ。」奴も呆れたやうに笑つてゐるが、「兎に角あとでお邪魔に伺ふわ。鳥渡待つて頂戴。」と、云ひ捨て、彼女はその儘ばたばたと縁側の突當りの階段口へ姿を隠してしまつた。

松之助は夢ではないかと思ひながらまたほんやりしてゐた。奴といへばお俠な氣性と長唄で賣つてゐる女で、生れは吉原の臺屋の娘、雛妓の時から仲之町で仕込んで、葭町へ出てからも一流で通つた賣妓だつた。去年の春時分盛んに招んだ時のことを思ふと、今こんな身の上に零落れ果て、破れ團扇で七輪の下を煽いでゐるみすほらしい姿を見られたのが穴にも入り度いほど恥かしくなつて、飯が蒸れか、つたのを幸ひに彼は耳の附根まで眞紅になりながら、七輪を窓から降ろして障子をぱつたりしめてしまつた。そして奴が來る前にせめてそこらを片附けて置かうと思つて、折角こしらへかけた味噌汁も其儘にして、銀次がいつぞや持つて來て呉れた佃煮を菜に、半熟の飯をふう／＼吹きながら貧しい朝飯をやりかけてゐると、その時、階下の入口の格子戸

ががらりと開いて、

「若旦那はお歸りになりましたか？」と云ふ銀次の勢込んだ聲が聞えて來た。彼はそのまゝ、上框へあがり込んでしばらくの間婆さんと何事かごとく話してあつてゐるらしかつたが、やがて階段をあがつて來て、松之助の顔を見るといきなり、皮肉に、

「お早う御座います。一體まああなたは何處を歩いて被居つたんです。」と、叫んだ。松之助は慌て、茶碗を置きながら、

「いや、一寸用があつて、……」あとは口のなかにある飯と一緒にぐつと呑み込んでしまつた。

「御用ですつて？ 嘘を仰有い。私はちやんと知つて居ります。此間の晩お渡し、たあのお金で遊び廻つて被居つたんでせう。」銀次はいつにない引緊つた顔をして、きつと松之助の顔を見据ゑた。

かう圖星を指されてみると、さすがに松之助ももう一言もなかつた。昨夜までのことに就いてはすつかり後悔しきつてゐるので、自ら氣も小さくなつてゐた。いくら云

ひくるめようと思つても、そんなら此間の金を出して見せろと云はれ、ばそれ迄なので、彼はもう黙つてゐるよりほかはないと思つた。

銀次は彼の顔を凝視したまゝ、少時の間何から云ひだしてい、か分らないやうに眼ばかりばちばちさせてゐたが、やがて、「ほんとに若旦那にも困るぢや御座んせんか。……」と、云ふのをきつかけに、この幾日の間胸のなかに鬱してゐた憤懣やら、訓戒やら、愚痴やらを一時にまくしたてはじめた。人間が律氣に出來てゐるだけに云ふことは人一倍くどかつた。

その云ふ處に依ると、彼は松之助に出逢つた翌朝早く前後の様子をもう一度確めるために仲通りの店へ訪ねて行つたのであつた。そこで松之助の母に逢つて聞くと、前夜聞いたのはまるで反對に、もう家の方の首尾は散々になつてゐる始末なので、彼は今更のやうに仰天して、その足ですぐさま箱崎町の宿へ駆けつけてみた。案の定宿にはゐない。さうなると前夜何の考へもなく金を渡したことなどがひどく後悔され、それに又松之助の母親が、

「あんなかつとする子だから、ひよつとかして取返しをつかないやうなことでもして呉れなければいゝが……。」

と、云つた言葉も思ひ出されて、急に居ても立つても耐らないほど氣懸りになり出したので、彼はその日店の方の用もそこくにしてそれとなく心當りを方々と尋ねて廻つた。

その日はそれで暮れて、その翌日になつても何の手懸りもない。思ひ餘つて店の朋輩にまで相談をかけてみると、年老つた番頭は、

「なあに、何處かふらく遊び歩いてるなさるのさ。懐が空になりや歸つて來なさるにきまつてらあね。」と、事もなげに云つて呉れたので、やつとそれに力を得て、今朝まで實は首を長くして待つてゐたのだと云ふ。

「ねえ、若旦那。」銀次はすつかり筋道を喋舌つてしまふと、やがて思ひ入つた調子になつて、

「今更云ふんぢや御座んせんが、あなたも餘りな方ぢや御座んせんか。どうにかして

あなたのお爲めになるやうに、私がこれまで骨を折つて働いてゐるのに、あなたは私の腹を少しも買つちや下さらねえんです。折角お宅へ歸れる橋渡しをして上げりやすぐぶち毀しておしまひなさる。あんな御親切の籠つたお金を費つてそれで遊んでお歩きになるなんて私にやどうしてもあなたのお考へが分らねえんです。これで私の顔もすつかり潰れてしめえました。もう私だつていつまであなたはいゝやうになつちやるません。……ねえ、若旦那。今こんなことを申上げたつてお分りになりますまいが、ちつとは親御様方のお心にもなつて御覽なさいまし。昨日仲通へ伺つた時にもお内儀さんは態々お臺所まで出て被來つて、私がこれこれまだ若旦那にお眼にかゝれませんで申上げると、黙つて聞いて被居つた口からたつたひと言、「私達もこんなに年を老つてしまつて、何時どんな事があらうも知れないのにねえ。」と、仰有られた時にや私やもう耐らなくなつて、……。」

正直な銀次はそこまで云ふと雀白の出來た肉の薄い頬にほろほろと涙をこぼして、言葉が出なくなつたやうに口をもぐもぐさせながら俛首れてしまつた。そして忙しく

瞬きをしながら聲をふるはして、

「亡つた愚母のことを思ふと、私やもう勿體なくなつて、……」と、呟いたつきり頭しくく、聲を絞つて泣き出した。

松之助も胸が一杯になつて、恥しけもなくはふり落ちる涙を頻りに手の甲で押拭つてゐた。家からは追はれる、世の中からは疎まれる、三界に頼る人はたゞの一人もなくなつてしまつたやうな心細さが犇々と迫つて来て、今までに覚えぬ悔恨の念が眼の前を暗くしてしまつた。

二人は俯向いたきり無言のまゝで長いこと對座してゐた。

階下のほんく時計がとほけたやうな聲で思ひ懸けない十時を打つ途端に、また格子戸ががら／＼と開いて、

「あら、小母さん、今日は。」と云ひながら入つて来たのは奴の聲だつた。

「私ね、旦那と一緒に湯治へ行つてたもんだからすつかり御無沙汰しちやつて、しばらくくだつたわねえ。」と云ふその聲は人もなけに二階までりん／＼響きあがつて来る。

なにか手土産でも持つて来たものと見えて、婆さんのしや嘎れたねつい聲が頻りにくどく／＼禮を云つてゐるが、

「私、ちつとも知らなかつたのよ。……さうですか。……ほ、ほ、ほ、世の中つてものは廣いやうで狭いもんですわねえ。」などと言ふ聲が聞えたかと思ふと、やがて階段がぎし／＼鳴つて、

「若旦那、ちよいと入つてもよくつて？」と、いひながら返事もしないうちに奴はもう障子を開けて、部屋の入口の處へすらりとした半身を現はした。朝湯を使つて、もう身じまひも済まして来たものと見え、常から白粉嫌ひな顔の地肌が薄紅くほうつと匂つて、襟のついた地味な吉野お召の袷に、黒繻子の晝夜帯を無雑作にひつかけたその姿が、貧乏臭い部屋の様子に比べては寧ろ慘ましいほど艶だつた。

折が悪いので松之助は銀次に氣を兼ねてはらく／＼したが、と云つて當人がもうそこへ顔を出してゐるのではどうすることも出来なくなつて、そつと涙を押隠しながらわざと元氣づいた聲で、

「や、先程は。随分しばらくだつたねえ。」と、懐かしさうに云つた。

「今日は。あらお客様だわねえ。お邪魔ぢやなくつて。」と云ひながら、奴は銀次の方を怪訝さうにみい／＼間内へ入つて来たが、彼等から四尺ほど離れて座をしめると、二人の様子をそれとさつてか、態と丁寧に両手をつきながら、

「どうも若旦那。ほんとにしばらくで御座んした。御變りも被居いませんで。又むかうに居ります時分にはいろ／＼御最眞になりました。」と、すつかり改まつた挨拶をした。

松之助の方では却つて面喰ひながら、

「いや……」と、云つたぎりてれてしまつたが、あんまり繼穂がないので、そぐはぬ笑ひかたをしながら、「ほんとに暫らくだつた。さつきちらりと顔をみた時にやほんとにお前さんとはどうしても思へなかつたもの。」

「私もですよ。あんまり御様子が變つてゐらつしやるんでね……」と、云ひかけたが、ふつと氣づいて氣の毒さうに笑ひながら、「でもこんな處でお隣り同志になるなんて、

随分御縁でものは不思議なもんで御座んさあねえ。私やおの土地をひいてからはもう御連中にはどなたにもお眼にかゝりませんもんですから、ほんとにまさかと思ひましてねえ。」

二人はお互に變り果てた境遇を訝しむやうにそつと眼を見合せながら押黙つてしまつた。

銀次は時々探るやうな眼つきをしながら、奴と松之助の横顔をかはるがはる偷みみてるたが、漸次と、もう愈と匙を投げてしまつたと云ふやうな白けた顔つきになつて、その眼には抑へきれぬ反感さへ現はしてきた。そして話が途切れるとそれをきつかけに慌たゞしく立ち支度をして、

「ぢや、若旦那。私はこれでお暇いたします。どうかあなたもう一度よくお考へになつて下さいまし。」と、云つて、ふいと立ちあがつた。

「まあ、いゝぢやないか。實は私ももう少し話し度いことがあるんだが、……」松之助もそれをみると急に情ないやうな、頼りないやうな顔色になつて、それとなく引留

めようとしたが、銀次はいこちな冷たい調子で、
 「店の方が忙がしう御座んすから又いづれ。」と、云ひ捨て、階段の方へつかく歩いていつた。

奴はさすがに氣の毒さうな顔になつて、

「折角御用がおありのところを、私のやうなものが伺つてほんとにお邪魔致しましたわねえ。」と云ひながら一緒に階段口のところまで送つて行つたが、松之助は火鉢の端で一段一段拾つて下りてゆく足音を追つてゐるうちに、又今朝のこのいちまきが銀次の口を通してすつかり母親の耳へ入るのかと思ふと、氣がいらくするほど情なくなつてきた。

銀次の足音が戸外へ消えると奴はすぐさま又もとの座へ歸つて來た。今度は七輪の残火を移したそのみすほらしいブリツキおとしの箱火鉢の前へびたりと摺り寄つて、松之助の顔をじつと見入りながら、

「ほんとに若旦那、一體どうなすつたと云ふの？」さう云ふ言葉つきは銀次のゐる時

と違つて、すつかり思ひ遣りのある打ち融けた調子になつてゐた。

松之助は改まつてさう聞かれると急にしみじみ情なくなつて、態と顔を背けながらひどく悄れ返つてしまつたが、やがて、駄々つ兒のやうな聲で、

「どうもかうもありやしないさ。私や家から勘當をくつちやつたんだもの。」

「そりや私だつて知つてるわ。いつだつてか芝居で小いくさんに逢つたら、あなたが
 お家の方を不首尾になすつたつて話をしてるんで私や初めて知つたんですけれど、
 それでなくたつて、勘當でもされなきやこんな處でこんなことをしてゐるあなたぢや
 ないぢやないの。」奴はそこらに取散らかした土釜や、食ひかけの茶碗や、佃煮の小
 皿などをさも傷ましさに眺めながら云つたが、「でも、それにしたつて、あなたも
 あんまり意氣地がなさすぎるぢやありませんか。勘當されたら勘當されたで、もうち
 つとどうにかしようがありさうなもんぢやないの。」

さう云はれると松之助はもう一言も返す言葉がなかつた。意氣地がないと云へばこ
 れほど意氣地のない境涯が又とあらうか。人の情に頼り、人次第でやつとその日の飯

がたべていける今の生活はまるで果敢ない浮草のやうなものだつた。といつてそれが厭さに自分といふものを立て通さうとすれば、自分のやうな何にひとつ腕に覺えのなものは忽ち明日が日から餓死しなければならぬ。それを思ふと今更らのやうに親の情がしみく有難くなつて、もう恥ぢも外聞も忘れてしまつたやうに、

「私なんざもう駄目さ。こんな腑甲斐のない人間はありやしないよ。」と、呟いて、又ほろほろ涙をこぼした。

「ほ、ほ、、厭だよ、もうそんな愚痴なんか零すのはおよしなさいつてば。道樂のひとつとした男がそんな度胸のないことでどうして？」と、云つて、奴はとつてつけたやうに笑ひ出したが、口ではさう云つても、彼女の眼には松之助が可哀さうで可哀さうで耐らなさうな色が浮んでゐた。

そこへ階下から婆さんがよほくしながらちぐはぐな湯呑みに番茶を注いで、塗りのはけた角盆に載せて持つて來た。手土産の禮心でか、駄菓子ひねりおこしが申譯ばかり添へてあつた。

奴はともすると婆さんがそこへ腰を据ゑて話し込みさうなので、

「ほんとに小母さん、これから毎日のやうに伺ふんだから、そんなに構つて呉れちや困るわ。お茶が頂きたけりや若旦那の七輪を拜借して、自分で湧かして呑むわよ。」

「へ、へ、へ。いつも姐さんは氣さくなことばかり云つてなさるだあねえ。構ふと云ふんぢやないですけれど、お寂しからうと思つてね。」

婆さんは火鉢の傍へ盆を置くと二言みこと無駄口をきいたあとで、もう何本も残つてゐない眞黄いろなそつ齒を突出してせいく云ひながら又階下へ降りてしまつた。

奴は松之助が鼻を吸りながら押黙つてゐるのをみると話題をそらさうとして、

「今こゝへ來てるたあの男の方は誰方？」と、靜かに問ひかけた。

「ありや長年家へ奉公してゐた番頭さ。今は人形町の小間物屋にゐるんだが、此處の家も實は彼の男の周旋で借りたのさ。」

「へえ、ぢやよく芝居で出て來る番頭の忠七で格なんだわねえ。道理で氣の利かない

顔をしてるよ。私も大方そんな事だらうと感づいたから、さつきは態と切口上かなんかであなたに挨拶してやつたのさ。ほ、ほ、ほ。それでなんでしょ、何んか意見でも申上けにやつて来たんでせう？」

松之助は昔に變らぬ奴のお俠な口調を聞くと強ひて微笑みながら、

「まあそんなとこさ。」と、答へて、素直に指の先でそつと涙を拭いてるたが、餘り口をきかないのも先の思惑にかゝはると思つて、先日來のことを少しづつ順を追つて話した。家へ呼びつけられたこと、伯父の言葉が癪に障つて座をたつたこと、人形町で金を貰つてその金で小いくに逢つたこと、それから到頭珠數を切つて吉原が振り出しで、無一文になるまで下等な飲み屋から飲み屋を歩き廻つたことまで包まず隠さず話して聞かせた。そして母親のことを云ひ出すと、さすがに奴もほろりとして、

「ほんとにねえ、親御さん方の身になつたらどんなに苦勞して被居ることとせう。でも、あなたがそれだけでもお母さんの事なんぞ思ひ出すやうにおんなすつたのは、

全く勘當の薬が利いたんだわ。若旦那で何不自由なく暮らして被居りやとても世間のことなんぞ分りつこないもの。」としんみり云つて暫らくの間じつと眼を伏せて考へ込んでるたが、やがて急に氣を變へて何事か思ひ出したやうに、「だけど親のことなんぞ考へてるた日にや馬鹿々々しくつて何も出來やしないわ。親なんてものは身勝手なもんで、やつばし子供が自分の思ふ通りにならないと、他人よりも薄情な眞似をするもんなんですもの。吉原の華魁なんぞの中には随分親のために難儀をしてる人がありますが、現にさう云ふ私なんぞも極道な親父を持つたために今ちやこんな體になつてしまつただけど。……まあ、い、わ、今更そんな事を云つたつてしょうがない。だけどあなたも一度こんな深みへ落ちると、これから先は道樂の味がほんとにしみじみ分るやうになるわ。一體、私なんぞにつきあつて被居つた時分には道樂がほんの初手だつたわ。唯派手に泳いでお廻んなさるばかりで、ちつとも味なんかありやしなかつたもの。あれぢやまるでお紙幣で遊んでるやうなもんだわ。さう云やあ此節小いくさんの方はどうなつてるの？」